

---

# 緋色の騎士は異邦人

間和井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋色の騎士は異邦人

### 【Nコード】

N9938M

### 【作者名】

間和井

### 【あらすじ】

《剣と魔法で召喚モノ》高校二年の秋、昼神 暁と高野 真夕美は登山中に他の一団とはぐれてしまい、どこにかして昨日泊まった山小屋に戻ろうとしていた。その日、何者かの手によって、彼は異界に送られた。

？この小説

は大凡主人公最強系になります。そう言った作品が苦手な方は、お手数ですがウィンドウの戻るをお押し下さい>（――）< ついでに言うと、この小説は比較的ライトな小説です。そう言ったモノが苦手な方も、上記の方法をオススメします>（――）<

## Ep1：会合と解放（前書き）

なんとなく考えてしまっていた物語を、性懲りもなく投稿しました。

今回はキャラクター性に重点を置く事に見たのですが、如何でしょうか？

## Ep1：会合と解放

草木の茂る山道の中、高校生らしき男女が二人。大きな石の上で座っている。

「おなかへったあ。ねえ、あけひ曉あなんか食べ物お〜」  
「いきなり何言ってんだよ。まゆみ真夕美」

ボーッとしていた俺は幼馴染みの突然の要望に、一瞬ビックリする。

その後、「ちょっと待ってろ」と言って俺は自分の背負っているリュックの中に有る数少ないお菓子を、ガサガサと音を立てながら探す。

お、あつたあつた。これならアイツも不満は言わねえだろ。

「ほい、これやるから少し静かにしてるよ？」

「おおおお！！こ、これですかい！？しかも二つ！？

ヘイヘ〜イ、解ってるねえ〜、お代官様〜」

「ちよつ、痛い痛い？」

渡したお菓子がそんなに嬉しかったのか、俺の横腹を肘でドスドスしてくる真夕美。これ案外痛いぜ？

ちなみに真夕美に上げたお菓子の名前は、『期間限定！！一瞬でリスに成れる飴！！』だ。コイツの好みは少々、と言うか大分変っている。

俺もなんか食つか。え〜と、あつたあつた、う〇い棒。げえつ、これ碎けてやがる。捨てるか。

そんな事を考えていると、いきなり真夕美が不安げな声でささやいた。

「ねえ、これからどうするの？」

「そうだな、まずは昨日泊まった山小屋を目指そう」

やはり不安でたまらないのだろう。さっきの妙に高かったテンションも、きっと無理して上げていたのだろう。

俺達は高校の行事で登山に来ていたのだが、つい先程、先生達からはぐれてしまった。それに今は夕暮れ時。精神的にもきついのだろう。

ちなみに、ケータイは圏外だった。

「それから、事情を説明してもう一度だけ止めてもらおう」  
「うんっ、そうだね。」

そうと決まれば、行動あるのみ。昨日の小屋だね」  
「ああ、そうだな。行動あるのみ、だ」

今まで腰をおろしていた石から離れて、歩み始める。

そうさ、早く帰るんだ。

早く小屋について、真夕美を安心させなきゃな。

「なんで？ どうして？」

ねえ、曉。何で私達、またここにいるのかな？　どうしよう、私達帰れないのかな？」

不安げな瞳を俺に向けて、質問をする真夕美。けど俺はその質問には答えられない。なぜならば、俺自身がこの状況に打ちひしがれているからだ。

あれから、一時間が経過しただろうか。  
今、俺達はまたさっきの石の前に居る。

見間違えはしない。俺の捨てた、う〇い棒の残骸と俺の書いた印がそこに有るからだ。

印はこれまでに何回かここに戻って来た中で、数回前に付けたものだ。

これで計7回だろうか。ここに戻ってきたのは。  
さっきは木に印をしながら、四角形に少しずつ進んでいく『スクエアサーチ』と言う方法をとっていたから絶対にここに戻ってくる事は無い筈だと言うのに。

何故、どうして、なんてことは言ってもなんの意味もない。  
原因の搜索をしよう。まずは、

「真夕美、まずはじめに落ち着こう。さあ、息を吸ってー、吐いてー。吸ってー、吐いてー」

「え、う、うん。スー、ハー、スー、ハー」

いつも通りに戻そう。

「ハイッ、そこでラマーズ法！」

「ヒッヒッ、フー。」

……って、何でラマーズ法なのさ!!」

突っ込みと共に飛んでくる小さな石の群れ。

「フツ、俺とお前、いつからの付き合いだと思ってんだ?」

そう小さく呟いて、石を避ける俺。まあ、10年以上も一緒に居れば、こういう物も慣れてくると言うもんだ。

そう思い、最後の一際大きな石をよけきった時、バキツという音がして、

そして

「ハハハハハッ!!」

そして、高笑いと共に、大量の黒いナニカが現れた。

「人間だ、人間が2匹いる」

何処に?

俺達二人の周り、四方八方に。

「男と女だ、女は俺達を解放してくれたぞ」

何処から?

感覚としては、音のした方向から。

『感謝しよう、感謝しよう』

如何して?

多分真夕美の投げた石がナニカを壊したから。

『でも、どっちも美味そうだな』

こいつ等は、ナニ？

解らない。けれど、このナニカは完全に俺達に敵意を向けている。

『そうだな、ウマソウダ』

それなら、如何する？

そんなの、決まってる

「真夕美ッ！」

『『『『『なら』』』』』

「何？ 何？」と言う真夕美を、周囲から隠すようにして腕に抱いて、

「お前は俺が            ！！」

『『『『『喰ッチマオウ』』』』』

守る。

そう言おうとした瞬間、劫火にに包まれた妖しき怪物が目映り、俺の意識は断線した。



## E p 2・送り火

「真夕美ッ！」  
まゆみ

何？ そう思った時には、アキラ 暁は私を抱きしめていて。

「お前は俺が」

抱きしめる力が強くて、痛いと思ったその時には、彼の全身は消えかけていた。

‘喰われる’とか、‘引き裂かれる’とか、‘貫かれる’とかそういうのじゃ無くて、『消える』なのだ。

彼には何かが見えていたのか、私の名前を呼んだ時に愕然とした顔をしていた。

そんな顔が最初に浮かんで、それから先はいくつもの楽しかった事、悲しかった事、これまでの人生の大半の物事が、私の脳裏を一瞬のうちに過ぎ去っていった。

「そ、走馬灯？」

一つの不吉な単語が、私の脳裏をよぎった。

体中から、嫌な汗が流れ出る。

私の上には、幼馴染みの身体が重なって、それが段々と消えて行く。

彼を消し去ろうとする者は何なのか、とか、何がどうしてこうなったのだろう、だとか、そういった疑問はどこかへ消し飛んでしまっていた。

「アキラ 暁、アキラア……！」

私の口から漏れ出てくる嗚咽。涙腺から溢れ出てる涙。それは止める事が出来なくて……

ただ消えて行く彼の身体、その身体には、まだ生物としての温もりが残っている。いままで私の拠り所だったその存在は、今尚消え失せて行く。

そんな中、周囲が、邪悪な気配に満たされた。

「な、……何!!?」

彼が居なくなる、そんな思いに駆られ、消えゆく彼を抱き寄せる。

その瞬間、邪悪な気配は、清らかな火にかき消された。

私と暁を取り囲むようにして、燃え盛る蒼い焰。  
それと共に、ナニカが私に語りかけた。

『無事ですか?』

その声は優しく、けれど厳かに問いかける。

「……私は大丈夫、だけど暁がッ！　暁がッ!!」

喉がカラカラで声は出し難かったけど、それでも必死に声を出して、

「暁を、助けて下さいッ!!」

私はその存在に、助けを求めた。

目が覚めると其処<sup>そこ</sup>は、見知らぬ神社の中だった。

俺 ヒルガミ アキラ 昼神 暁はどうやらどこかの神社の一室で寝かせられているようだった。

寝かせられている布団は少し硬い。

「痛ッ」

身体を起こそうとすると、全身が痛みに軋む。痛みが妙に大きい。それにどこか感覚も鋭利になっている気がする。

少しだけ無理をして上体を起こし、周囲を見回す。

「ここは、どこなんだ？」

口を吐いて出たのは、そんな言葉。

俺は神社になど来た事がない。当然そう言った所に知人なんていないし、ここがどこで、なぜ寝かされていたのかが解らない。

周りを見ても、簡素で殆ど何もない。神社だと解った原因はほんの少し開いた扉から見える、赤と白の絡まった形の綱が見えたから。  
(あれはきっと、鈴の奴だろう)

どうしようもない状況に、溜め息を吐く。

「……ハア」

『知ってます？ 溜め息すると、幸せが逃げちゃうんですよ』

突然、後方から聞こえてきた声。それに反応して振り向こうとす

るも、痛みで後ろを見る事が出来ない。

コイツは何者だ？

「何だお前。どこから出てきた？」

『そこら辺から、湧いて出てきましたよ』

「何を言ってる？ アンタは誰だ？ ここはどこだ？

それと……真夕美はどこだ！？」

俺の疑問に、訳のわからない事をぬかす何者か。

まあ、コイツどこから出てきたかなんてどうでもいい。

まず必要なのは相手の情報と、自分の現在位置と、守るべき者の安全！

そう意気込んでいた俺の言葉は、流れる水かもしくは柳の葉のようにして、正体のわからぬ存在に受け流された。

『私は和なぎる神のついで一柱。名前は、訳あって言えません。

真夕美さんはそこに居ます。ここが何所かとかは、彼女に聞いて下さい。あと、話が終わったらこの部屋を出てきて下さい。貴方には、やってもらう事があります』

そして、俺に吉報を運んでくれた。

「暁、大丈夫？」

「……真夕美」

俺たちが両者の名を呼んだ時、既にアイツの気配は消えていた。

会話をして教えられたのは、俺は一度死にかけたと言う事実。

それは封印されていた筈はずの多くの妖怪が解き放たれ、そして俺達に食らいついたからだと言う真実。

そして封印が解けたのは、俺達がアノ石の周囲を円形に回り続けて最後に石で、神木で出来た祠ホコラを壊してしまったからだと言う情報。この話が終われば、俺はどこか見知らぬ場所（いや、世界だったか？）に飛ばされる、と言う未来。

「お前、それ本気マジで言ってる？」

当然、こう反応するしかないだろう。

「わ、私だつて信じらんないわよ！ だからその憐れむ目はやめて！」

俺の冷ややかな視線に何かを感じたのか、頬ほおを膨らまして怒りだす真夕美。

まあ、そうだろうな。

「で？ その話が本当だとして、何で俺はここにいるんだ？」

大体解っている事を聞く。

その顔は真面目に、真っ直ぐ真夕美の目を見つめて。

「それは、さっきの声の誰かが、暁が消えそうになった時に突然出てきてね、ビックリしてたらいつの間にかここに居たの。」

けど、その後あの声の人、どうやったかは解んないけど暁を治してくれたんだ。だからきつと悪い人じゃないと思う」

方法は解らないか。だが、声の誰か？ 真夕美には見えなかったのだろうか。

治してくれたのはありがたいが、どうやって？

疑問は尽きないが、今は話を続けよう。

「そうか、じゃあ最後に

」

言葉を口にしながら、軋む身体を無視して布団を抜け出す。

この話が終わって外に出た時、きつと俺はこんな事言えないだろう。

そう思いながら扉を開けて、振りかえる。

「俺さ

」

精一杯の、作り笑顔を行って、

「約束、守れたかな」

最後の言の葉を世に放つ。

今、俺は円を基本にした幾何学模様きかがくもようの上に立っている。

『送るよ』

俺を治した奴が言う。

それに頷くと、そいつはなにかを呪文らしきものを唱える。

すると、幾何学模様の一番外の円形が蒼色に発火して、俺の周囲を包みこんだ。

空を見上げると、其処そこにも蒼い焰が出現していた。その隙間から視えた星空は、どこか悲しげに星を落とす。

「流れ星、か……綺麗だな……」

俺がこれから向こうに行っても、真夕美が不幸にならないように、願っておくか？

いや、やめておこう。そんなのはもう、アイツ一人で出来る筈だから。

『異界の神よ、今、我が神代マシヒたる客人を、貴殿等の守る世界へ送ろう』

思考の最中、そんな声が聞こえると、地面に孔あなが開くようにして扉が開いた。

### Ep3・歓迎は鋭く

それは、円柱形を成す混沌のトンネル。

反転する光と影、引力と斥力。

ここは真空ディラックの海の中。もしくは生命セファイロトの樹の上。

潜り抜けるその中で、流れるように変わる視界。

遙か古いにしえに交わされた契ちぎり。

どこか心の奥底で、強烈な衝動が蠢うごめき出す。

視線を奪う多くの望のぞみ

欲しいと言う欲望、叶かなえと言う願望、どうせと言う絶望、きつ

と、と言う希望の果てに

‘朱伊光景アカ ケシキ’が、見えた気がした。

瞬間、下の方に出口が出来上がり、歪みの中から排出される。

勢いは無く擬音で言うならば、フワリとでも言うような軽さで俺はその地に着地した。

其処そこは所謂幻想郷いわゆるファンタジー。俺をここに送り込んだ奴が言うには、ここは一柱の神の夢の世界なのだと言う。

俺はそこに現れる魔王と勇者の物語に関与して来い、そう伝えられた。餞別ちからに二つのモノ、一つは何だかよく分からない指輪、もう一つはこの世界でも生き延びれる体力をくれると言っていた。

神の夢。それは真実、幻想的だ。ファンタジー

ゲームや物語の中の世界。だからここでは魔術マジックも、魔物モンスターも、神様



なんてモノまで何でも有りなのだと言う。

けれどこの世界では、これまでの世界で言う所の‘自然’のように、そうあるべき姿、そうするために働く世界の修正力なんてモノがあるらしい。それは魔術やなにかで、そうあるべきモノを強引に変えてしまおうとした時に働くらしい。

本当に、現実<sup>リアル</sup>じゃない。

「で、ここはどこなんだ？」

一応今まで考えていた事がまとまり、思った事を口に出す。  
当然、返事は返ってこないだろう。

そう思っていたから、背後からの声に驚いた。

「ここはエルキオン。アルタイル王国首都、エルキオンだ。こんな夜更けに何の用だ？ 違法侵入者」

首筋に添えられる刃物の気配。

ヒンヤリとしたそれは、俺に濃厚な死の匂いを連想させた。

「まずは手を広げて後ろへ回せ。不穏な行動をとったら、その瞬間貴様の首をはねてやる」

「ハ、ハハ……」

もう笑うつきゃネエ。何だこの状況。

言葉に従い、手を後ろに回す。

すると、ガチャリと言う音と共に、全身に少量の怠情感が覆いかぶさる。

「魔力も手の自由も奪わせてもらった。こちらを向け、顔を確認する」

魔力を奪う、と言う事は俺にもそれがあると言う事だろう。怠惰感はないから、量が多いと言う事なのだろうか。

死の恐怖にカラカラになった喉を、無理やりに唾を飲み下して潤す。

覚悟を決めて、身体を後ろに振り向かせる。刃物はまだ首に突き付けられている。

すると、そこに居たのは自分と同年代の女の子だった。来ている服は青色の豪華なドレス。そして少女の姿は、それにも負けない程美しかった。

背中の中ほどまで伸ばした金紗の髪に、透き通るような白磁の肌。小さな顔のその中に、2点だけ小奇麗にちょこんと配置された翡翠の瞳。

その瞳の中には、呆けた顔をした俺が映っていた。

「オッドアイか……。禍々しい黒き右の瞳に、燃え盛る炎のように赤き左の瞳。わたりびと異邦人か……？」

だが、そうと決まった訳では……」

眉間にしわを寄せ、顎あごに手を当ててぶつぶつと呟く少女。

オッドアイ、それは人間が持つ目の虹彩の色がそれぞれ色違いである事を言う。

この少女は、俺に向かってそう言った。要するにそう言う事なのだろう。この少女からすれば、俺は突然現れた妖しいオッドアイの少年。と言った所か。

警戒されているであろうことを承知で質問をする。

「なあ、君？　ここってどう言う建物の中？」

そう、先程きずいたが、ここは何か建物の中らしいのだ。

きちんとみれば、足元には石畳。壁も石造りで、そこには大きな幾何学模様。まるで召喚か何かをしていたかのような程に大仰な儀式の陣。

「ここは城内に有る、神官の『祈りの間』だ。こんなところに侵入して、しかも神官を気絶させておいて、いけしゃあしゃあと……」

「神官を気絶？　どう言う事だ？」

「それを見る」

少女が指をさす。

その先には、石畳の上にヨダレを垂らしてだらしなく寝る白服の男達が数人と女性が数人。男の一人は「もう、辛抱たまりません……！」なんて言ってる。おい、なんの夢見てんだ。

「ハハ……」

言いつつ頭をかこうとするも、手錠の所為で出来ない俺。

予測すると俺を送りつけたアイツが召喚場所に此処ここを選び、その際俺が現れる時に起きた何かの所為で気絶したのだと思うのだ。が、なんでいい夢見てんだアイツ。

ほら、この娘こも何か察知したのか顔を真っ赤こにしてるし。よく見ると可愛いな。この娘。

「い、行くぞ」

「ちよつと待った。行くってどこ？」

嫌な予感を感じつつも、一つ質問する俺。

「何をたわけたことを。牢屋に決まっているだろ。性犯罪者」

やっぱり？　って、いつの間にか違法侵入者から性犯罪者にランクダウンしてる！？

それ俺じゃ無くね。あそこに寝てる一人のエロ神官じゃね！？

なんて事を言えるはずもなく、俺はおおよそ妥当であろう言葉を発する。

「何で？　俺はここに送られてきたんだ。その神官なら多分解る筈だ。俺はこことは違う世界から来たんだ」

自分で言つてて信じられない言葉を口にする。  
言ってる自分が正気かどうかを疑いたくなる。きつとあの時の真夕美もこんな気分だったのだろうな。

「何？　どう言う事だ……？」

私はこの部屋から突然魔力の反応があったから来たと言うのに……」

ひとり言を言う彼女。

俺にはよく聞こえないが、情報の分析かなにかでもしているのだろう。かなり真剣な顔だ。

数秒して、「よし、解った」と言う彼女。  
何が解ったと言うのだろつ。

「私はその情報の裏を取ろう。もし逃げられでもしたら私が困る。  
一応は高速の為、倉庫に居てもらつぞ」  
「そうかぁ、倉庫か」

数回の会話で直ぐに俺への対応を決めた彼女は、俺を引き連れて移動する。

彼女の言う『祈りの間』を出ると、外に出た。

ほんの一瞬だけ空を見上げると、見えたのは広大に広がる星の海。

「ああ、本当に、ここはとても綺麗だ」

空に目を奪われた俺の口について、そんな言葉が漏れ出る。

ここで俺がしなければならぬ事を思うと気が重くなるが、この空を見る事が出来るのならそれもまた良いのではないだろうか。  
心のどこかに、そう思っている俺がいた。

## Ep4：二つの試練

眼下には、延々と続く漆黒の大地。

頭上には、煌々（こうこう）と輝く紅き望月。

そして、中空にて浮遊する俺。

「なんだこれ」

大きな疑問を一つだけ、小さく漏らす。

確か、俺はついさつき倉庫に連れてこられて、不要物と一緒に寝ていた筈じゃないだろうか。

一人考えていると、右下から返答が返ってきた。

『ここは、貴方のの精神に内在する世界から、表層だけ切り取ってきたモノ。まあ要するに、心象風景ってやつですね』

「なんか簡素だな。俺の心の中とやら」

何だか軽く会話してるけど、コイツ誰だ？

そう思いつつ見ると、淡く発光する四等身の人影が、俺の右腕付近でグルグルと飛んでいる。

それは美しい少女だ。目も髪も黒色のその少女は、正反対に純白のワンピースを着ている。ワンピースの背には単語が一つ「精霊」と書いてあった。

元が良いだけにその単語が少し残念だ。

「精霊？」

『よく分かりましたね。自己紹介もしたいですが、まず始めに一言。第一試練‘幻想種の認知’合格です。視覚的な情報は問題無さそ

うですね。(……まあ、あの世界でもこの才能は有ったようですし、当然ですね)』

思い出した。

これは俺をこの世界に送った奴が言っていた、潜在能力と魔力を覚醒させる試練とやらだ。

幻想種って言うのは、おおそ基本的に前の世界で存在しないと  
言われていた生物達の事だろう。今回ののはきつとこの精霊さん(仮)  
がそのターゲットなのだろう。

その試練は俺に一人の精霊を永続的に憑けて、その精霊に数回行  
わせると言っていた。それはきつとこの精霊さん(仮)の事だろう。  
試練の内容はその精霊が決めるとも言っていたし、俺の人間性と  
かもその試練で調べると言っていた。

『では自己紹介です。私は精霊、正式には彼の地を守る神の御使い  
です。名前は有りません』

喜々として自己紹介をする精霊さん(仮)。名前がないって言う  
のは、寂しいだろうな。

これから長い時間一緒に居るのだろうし、名前がないってのは不  
便だろう。

「俺は暁。アキラ ヒルガミ 暁だ。アキラ

お前は名前ないんだよな？ これからずっと一緒なのにそれは不  
便だろ。名前、俺が付けてやるよ」

『えっ……!』

俺の一言に、『でも、そんな……』と顔を真っ赤にしながらボソ  
ボソと言っていたが、まあそれは無視だ。

精霊、黒髪、ワンピースに…… e t c。色々と考えてみる。

「まあ、よく考えてからだけだな」

今の所は出てこないため、次回にしよう。うん。

『あ、はい』

俺の一言に少し呆けている精霊さん。

少しして、思いついたようにこんな事を言い出した。

『そ、そうだ。第二試練がありました』

『第二試練？』

『そうです。さっきのは確認のための試練でしたので、漸く能力覚醒です』

「ああ、そうか。本題はそれなんだったな」

『はい。能力覚醒には時間がかかりますんで、少し待って下さいね』

そう言つと、彼女は俺の胸元に飛んできて俺の胸に両手を当てた。

関係の無い話だが、俺は基本的に真夕美<sup>まゆみ</sup>以外には母意外に女性との関係性が希薄だ。

そんな俺がデフォルメされてるとは言え、美少女に身体接触を長時間続けていたらどうなるか、と言つと、

『アキラさん。心音が大きすぎです』

こうなる訳だ。

自分でもおかしいと思うほど、心拍数が上がっている。それをどうにか抑える為に精神統一。



視覚を遮断、聴覚を遮断、嗅覚を遮断。頭の中を、空っぽにする。思考を停止、運動を停止、心をどうにか落ち着ける。

そうやっている、精霊さんが口を開いた。

『準備が整いました。目を開けて下さい、アキラさん』

それに従い、俺は精神統一の為に閉じていた瞼を開く。

「ハイ？」

眼前には、禍々しい玄い業火くろに包まれた、三つの首の狗が居た。

『アキラさん。これからこの地獄ケルベロスの番犬を跪かせて下さい』

笑顔でもの凄い事を言い出す精霊さん。あれ？ いつの間にか場所遠くね？ コイツ、確信犯だ。

小さな精霊の後ろで、凶悪に唸る三頭狗ケルベロス。絶対無理だろ。

駄目でもともと、まずは言葉で言ってみよう……。

前方に顕現している凶悪な生物に、手をかざす。

そして、口を開き、一言。

「……おすわり」

まあ、無理だよなあ。化け物相手に犬扱いとか、どうすっかな。魔王と勇者に関与とか、特殊な能力なしに出来る訳ねえだろうし、これからどうすっかなあ……。

「クウン」

考えていると、犬の鳴き声。

『「へ？」』

場違いな泣き声に、一瞬時間が停止する。

驚いていると、ケルベロスが跪き、俺を見て尻尾をぶんぶん振っている。

俺と目が合うと、その速度は一気に三倍くらいになり、「ククワ  
ンッ!!」「」と人吠えして、粒子になって消えて行った。

『どう言う事？ そう簡単に、従えられる訳が……』

「なあ、これってどういう事？」

思考を開始する精霊さんに、俺は一言質問する。

『多分、合格で良いと思います。それと、これで今回の試練は終了  
です。では、またいつか』

「ああ、またな」

言いつつ、疑問を残している様子の精霊さん。

次の時には名前を考えておこつ。と思う。

『あ、言い忘れましたが、私は指輪に宿る精霊です。話しかけたり、  
魔力を込めたりすれば顕現出来ます』

うつすらとした意識の中、そんな言葉が聞こえてきた。

目を開くと、右手に付けている指輪が、淡く淡く輝いていた。

## Ep5：三頭狗のチカラ

「わたりびと異那人よ、名はなんと申す」

「アキラ暁です、ヒルガミ昼神 アキラ暁」

俺は今、アルタイル王国の国王と面会をしている。

国王は玉座に座り、俺は床に跪いている。

何故かと言うと、この世界において何らかの事情があつて世界間移動をしてきた人間を異那人と呼び、勇者に近い扱いをされているとのことらしい。だから今は今後の俺の扱いについて決めている。

「本題に入るが、貴殿はこれからどのように行動したいのだ？」

「そう、ですね……」

この世界での俺のすべき行動は、勇者と魔王の物語に關与する事ならば……

「この国に、勇者様はいますか？ もしくは英雄？」

「おおよそ大凡いるのだらうとは思いつつ、疑問を口にする。

何故そう思ったのかと言うと、この国は王が騎士をやっている程、騎士の割合が多い騎士国家なのだ。例えるならばアーサー王と円卓の騎士のようなモノだらうか。

だから勇者はおらずとも、ほぼ必ず英雄はいるだらうと思ったのだ。

「勇者は居らぬが、英雄ならば、我が軍の兵一人一人が英雄だ」

「そう、ですか。では、その英雄の中から一人、私に戦闘の仕方をお教えいただける方を選んでいただけないでしょうか」

それは、自らの治める国を信頼する者ならば、当然ともいえる答えだ。

ならば一人一人も当然高レベルな戦闘技能を有している筈、だから俺はその誰かにその戦闘技能を学びたいと思う。

「それは、アキラ殿がこの国に腰を据えると言う事で良いのか？それとも短期間だけ教えると言う事か？」

「後者です。私は向こうの世界の神に使命を与えられました。その使命を全うするためには、どこかで必ず戦闘に成る事が予想られるのです」

俺は思う。

勇者と魔王、それは相容れぬ光と闇。対極の存在であるが故に、理解し合い、理解出来るが故に対立する者たち。要するにそう言う事だ。

勇者と魔王は必ずと言っていいほどに、死闘を繰り広げる者たちなのだから。

「良からう。だが対価は支払ってもらうぞ」

「はい、覚悟しています」

「ならばよい。まずは昼に力試しでもしてもらおうと思うが。近衛兵、アイリスに昼までに闘技場に行くように伝えてくれ。

では異那人よ。昼まで自由にして居てくれ。場内の見学などどうだ？」

「はい、では失礼します」

どうせ今日の俺に予定は無い。昼まで何をして暇をつぶそうか少し迷うな。

この語の行動に想いを馳せながら、俺は玉座の間を後にする。

結果的に、俺は今人気のない城の裏門付近に居る。

時間は9時半ぐらいの、丁度いい感じの気温の時間帯だ。

少し日陰になっているここは、俺にとって大分居心地がいい。

こんなだから、あまり女性との関係が宜しくないのだろうか。俺はいつも話しをする女を怒らせてしまっし……

閑話休題。

話を元に戻そう。

俺は今、裏門の所で昨日手にした能力とやらの練習をしている。

何故かと言うと、出来れば人に見られて知られる事は避けたいからだ。ここの人たちは俺の情報をほぼ何も持っていない。情報とは武器だ。出来れば与えないようにしようと思っている。

ん？ 門番？ 二人いたけど、今は倉庫に数冊あった女が表紙の本を渡したら、見なかった事にして置くと言っていた。

うん。やっぱ人間の三大欲求ってすごいな。

まあ、それはいい。今の問題は俺の手に入れた能力だ。俺の手にした能力は概念的干渉能力‘獄焰’<sup>ごくえん</sup>と言うものだ。

あの精霊を名乗る彼女が今朝、俺の前にいきなり現れて言っていたが、この能力には三つの特性があるとの事。わざわざ精神世界を惹き出さなくても、顕現は出来るらしい。

一つは、『発火炎上』と言う特性。これは前の世界における炎が持つ効果を、魔力を使って発現させる。と言う代物。

精神力って言うのは良く分からないが、要するに灯り暖房に關して困る事の無い便利能力、と言った所だろう。

これは右手に集中して「燃える」と念じる事で黒い炎が掌から上がったので問題はなさそうだ。発火する瞬間、少し変な感覚があったが、多分アレが魔力の使用なのだろう。

次に、『侵蝕』と言う特性。これは手に持ったモノに魔力を流し込み己の属性に染め上げ、能力を付加すると言う特性。外見的にも侵蝕を行うと変化が起こるらしく、まだ練習していないためそれが少し楽しみだったりする。

最後に、『概念破壊』と言う特性。これは、そこに有るモノを物質的ではなく概念的に破壊するもの。らしいが、今の俺には良く分からないため練習の仕様がなない。

基本的には能力と言うのは殆どの人間に有り、一つだけの特性を持つているらしい。勇者や英雄となると二つと言う事も偶<sup>たま</sup>にあるらしいが、三つもの特性を持つ能力は規格外なのだという。これはまさしく規格<sup>チート</sup>外性能。

それはさて置き、俺は今現在浸食の特性制御の練習をしている。

「手に持って、魔力を流し込む。だったか」

手にしているのは、倉庫から拝借した両刃の短剣。刃の長さが8センチほど、そして柄<sup>つか</sup>が7センチ程度の計15センチの装飾の無い質素な短剣だ。

その短剣の端と端をを両手でしっかりと持ち、それに意識を集中させる。

集中が臨界を超えようかと言うその瞬間、脳裏に一つの言葉が浮かんだかと思うと、知らぬ間に口にしていた。

「喰らえ」

流し込むと言ふより、包み込む感覚。

『侵蝕』とは良く言ったモノで、確実にそれは的を射ていた。

外側から少しずつ、徐々に徐々に浸み込んでいくような感覚。

前の世界の感覚で言うならば、食べ物をやつくりと咀嚼していくかのような感覚。

それが終わったかと思うと、俺が手にしている短剣は鈍く発光して形状を変化させた。

大きさはそのままに、刃の形は日本刀のような片刃、色は黒曜石の如き美しき漆黒。柄は生きた人間の鮮血で染めたかの如き妖艶な真紅の柄に変わり、柄と刃の中間に位置する鍔はまるで昨日見た三頭狗の吐く獄焔をそのまま固めて鍔にしたような禍々しさを放っている。

かかったのは数秒、これなら少しずつ速度を上げる事ぐらい出来る。そうだ。

強そうだけど、なんかこれどっちかって言うとき暗黒騎士とか悪役が使ってたそうだな。

考えていると、先程の衛兵の男が俺の持つ侵蝕後の短剣に興味を惹かれたらしく、俺に話しかけてきた。腐っても戦士と言う事だろうか。

「おつ、兄ちゃん。それは何なんだ？」

「これは俺の能力の産物です。あつ、これも内密に頼みますよ？」



「そんなこたあ、言わなくつても解つてるぜ。なあ兄弟！」

「おう、俺らの救世主の不利益になるような事はしないさ！」

練習を許してくれた二人に、俺は一言釘を刺したが、その必要は無かったようだ。

ガツシリと肩を組み言う二人。

手には先程渡した本を握りしめ、鼻から鼻血を流しかけている門番二人。

「じゃあ、そろそろ時間だと思いますんで、俺はもう行きますね」

上空の太陽は、もう直ぐ真上に来ようとしている。

俺は侵蝕により変化した短剣を俺の寝ていた倉庫に隠し、そこらに居たメイドさんを捕まえて闘技場を目指すのだった。

A E p 1 ; 《葬送の後》（前書き）

これは、時間軸的には第二話の直後のお話です。  
彼女と彼の幼い頃。

どこか危うい二人の関係性、的なモノです。

## A E p 1 ; 〈葬送の後〉

「俺さ……、約束、守れたかな」

私                    高野<sup>たかの</sup> 真夕<sup>まゆみ</sup>美は、彼の言葉に愕然<sup>がくぜん</sup>としていた。  
それは、もう忘れ去られたのだと思っていたモノ。  
私の心に、深く深く刻まれた、幼少の記憶。

当時の歳は、二人とも七歳前後。場所は、町はずれの廃工場。  
中には、段ボールで粗雑に造られた部屋や机。  
其処は私達二人の、秘密基地だった。

「おい、お前等ここに居る筈のガキどもどうにかしろ!!」

一人の少年の命令に、はい！ と良い返事の男達五人。  
こいつ等みたいなのは何故か私達の秘密基地に毎回来るけど、私  
達はそのたび追い返してる。だから、今日もそうなるんだって思っ  
てた。

けど、その日は何かが違ってた。

振るわれる暴力、鳴り響く鈍い打撲音。  
それにさらされているのは、彼一人。  
彼は私に、隠れている。そう言って男達の背後に走りだした。武

器は一本の鉄パイプ。

いつもの奇襲のおかげか、二人の男は倒す事が出来た。そして彼は、いつも通り隠れて何回も奇襲をする筈だった。

けれど、一回目の奇襲の後、彼は少年に見つけられてしまった。

その後は、身体の高い大人と七歳の少年だ。

力の差は歴然。殴られるしかなかった。私はそれに、腰を抜かして隠れ続けるしかなかった。

いつもは大丈夫なのに、何で今日は。何で。

耳を塞いで、彼が傷つく音から逃げながら、ただただ、そう考える事しかできなかった。

それは隠れていた報いだったのか、私は、見つけられてしまった。またしても、あの少年に。

私は怯えた。殴られる事に。

彼が言ったことを、守れなかった事に。

それまで彼を一方的に殴っていた男達の一人が、私の方にやって来る。

私はやはり、腰を抜かして動く事もままならない。

その時、私は間違いを犯してしまった。

私の口は、恐怖により勝手に一つの言葉を紡いでしまった。とても小さなその言葉は、しっかりと放たれた。

「助……けて」

届くはずの無いその言葉は、彼に届いてしまった。  
今も男達に殴られ、満身創痍の彼に。

彼は私が助けを求めたのと同時に、私の元へと駆けだした。  
一種の盾の様に、彼は私を隠すようにして男の前に立ちはだ  
かった。

殴られても殴られても、彼は立ちあがってしまう。  
私は、ずっとずっと泣いていた。

彼が立ちあがってしまう事に。殴られる彼を見なければならぬ  
事に。

そんな時間が、何十分続いただろうか。  
少年が叫びました。

「もう良い！ キリがねえ！ 他を当てるぞ！！」

男達は彼の言葉にしたがって、どこかに走って行った。  
その瞬間、少年の額に角が見えた気がした。

少年と男達が立ち去って、私と彼は二人だけになる。  
廃工場の中、鳴り響く私のすすり泣き。

彼はそんな私に、こんな言葉を吐いた。

「俺が、真夕美を守るから。だからお前は、そんな顔しないでくれ  
よ」

「うん。解った。解ったから、一緒に帰ろう……！！」

私は、またしても間違ってしまった。

彼の言葉に、肯定を表してしまったのだ。

傷だらけの彼を帰らせるために。彼は私がうんと言っまで、其処を動きはしなかったから。

それが、幼少の記憶。

彼はそんな約束を、今でも守っていた。

中学の三年間。私達は口を効かなかった。理由は簡単、彼に私を嫌って欲しかったから。そうすればきっと、彼は無茶をしないと思っただ。

けれどそんな空白の三年も、彼には意味がなかったようだ。

私は、また間違ってしまった。

そう思うと、涙腺から流れ出す涙。私は、大粒の涙を流していた。

「守れた。守れたよ、<sup>アキラ</sup>暁」

私は、三十分くらい神社の中に居ただろうか。

『真夕美さん。これからやる事は解りますね』

「はい、私達の解放した。妖怪退治」

未だ流れる涙を拭いて、私は神様の質問に答えた。

解放したのは私、神様が言うには、暁はその大本の神様の見る夢

をどうにかする事になっていたらしいのだ。

神様は、私達には特殊な能力ちからが有ると言っていた。

暁は、滅ぼす力。

私は、維持する力。

それは、きっと刃と鞘さやの関係性。

『では、行きましょう。彼の事を思っているのなら、妖怪退治こわが一番の近道です』

彼の身体を喰った妖怪たち。

それを倒せば、彼の力が増すのだそうだ。

「はい!!」

今の私は、どこか不安定。

私はきつと、彼を魂こころの底から求めているのだ。

丁度私の心に収まる、暁かれと言う存在タマシイを。

A E p 1 ; 《葬送の後》（後書き）

読んで下さいまして、誠にありがとうございます。――――  
感想など下さると、作者の励みになります。  
要するに執筆速度が急加速します。

と言う事で、私はいま感想とか渴望中です。皆さまどうか感想を  
下さいませ――！



## Ep6・怪力無双と瞬速移動（前書き）

今度、真夕美エピソード書いてみようかな、なんて思う今日この頃。

今回は少量戦闘シーンを含みます。

解りづらかったりしたら、ご指摘お願いします。

## Ep6・怪力無双と瞬速移動

今、俺達は広々とした闘技場に居る。達の中には、当然の如く使用人や国王が居る。

そして場違いにも昨夜の美少女が、目前に立っていた。

「昨日は本当に済まなかった、わたりびと異那人アキラ殿よ。重ねがさね、申し訳ない」

「いや、俺それは気にしてないからさ、早速力試しだっけ？ 初めてくれよ」

申し訳なさそうに俺を見て言葉を放つ昨夜の美少女さん、もといアイリスさん。彼女は聖騎士でも有り、この国の第二王女でも有るらしいのだ。

昨夜彼女が俺に刃物を突き付けてきたのは、俺が魔術を使ってこの王都に不法侵入をしたのだと勘違いをしたかららしい。

俺がどのような存在か確認をしようとしたが、現場に居た神官たちは何故か朝まで起きる事は無く、危険な可能性のある俺を放置するわけにもいかず、かといって無罪の可能性のある者を牢に入れるのは気が引けるため、そのまま今朝まで俺は倉庫で寝ていた訳だ。そのおかげで、能力の覚醒も出来たし今の所、その事を俺は気にしていない。

それに彼女は大分綺麗な方に入るし、この国のトップに成る可能性のある者が頭を下げている所など、騎士たちも見たくはないだろう。今もほんの少し憎悪の視線が痛いし……

まあ、刃物を喉に突き付けられるのは今後ゴメンこうむりたいが。

「そうですか、ありがとうございます」

「い、いや、どういたしまして。じゃ、じゃあ始めようか」

とたん笑顔になったアイリス王女。その笑顔は反則だと思えます。口調がいくらか砕けた感じになったのは、俺が気にしていないと言ったからだろうか。

今の自分の心境を誤魔化すために、力試しの開始を願う俺。

「はい。ではまず、得物を決めて下さい。

私の得物はこの戦斧ハルバートです。アキラ殿、貴方は何にしますか？ アキラ殿、どうしたのです？」

嬉しそうにして、笑顔で三メートル以上の戦斧ハルバートをどこから取り出し、軽々と片手で振りまわすアイリス王女。当然刃や殺傷の原因になりそうなモノはつぶされて丸くなっている。でもなあ、ヒュンヒュンいつてるしな、当たれば多分骨の1、2本は折れるんだろうなあ。

眼前の王女様の姿に、俺は口をポカンと開けている。あの細腕にどんな馬鹿力が……

俺が口を開け放っていると、アイリス王女が話しかけてくる。

「あつ、そうでした。アキラ殿は、門ゲートの魔術は知りませんよね。いきなりこんな大きなモノが現れたら、流石に驚きますよね」

……いやいやいや、俺が驚いてんのそれじゃないから。アンタの馬鹿力の方だから。

俺がそう頭の中で突っ込んでいると、彼女はその魔術の説明を開

始した。それを要約するところだ。

名称、空間操作系魔術：門<sup>ゲート</sup>

それは魔力を大量に使用して、既知の空間と自分の居る空間との門を作り出す大魔術だとか。空間と空間とを繋ぐと言う非常識な術であるため詠唱にも時間がかかり、本当は大変な魔術なのだという。

今回使ったこの魔術は、この国に居る数人の賢者が国王に頼まれて集まって、必死こいて制作した簡易詠唱術式を使って発動させるようにしてあるのだと言う。簡易詠唱術式とやは、何か身につけるモノかもしくは身体に魔術刻印と呼ばれる物を刻みつける事で、詠唱時間を短縮しワンアクションで魔術の発動を可能にするモノ。なのだそうだ。

ちなみに言うと、こちらの方が魔力の使用料は半端ないらしい。まあ、発動までの時間短縮しといて、使用する魔力まで少なくしたんじゃない<sup>チート</sup>それは反則と言うものだろう。今でも十分チートだが。

「では、アキラ殿。この中から選んでください。出来ればお速く、お願いしますね」

言って、己の背後を指すアイリス王女。

そこには空中に、さあどうぞとばかりにぽっかりと空いた孔<sup>アナ</sup>。その向こうには、刀剣 槍 斧 盾 銃…… e t c、と武器の山が広がっていた。

俺はその穴の中に入り、自分が一番使いやすそうなものを探す。ガチャガチャ、ガチャガチャと。

アイリス王女のような馬鹿力は俺に無いため、まず重量武器は却

下。

公言してはいないが、俺は一応幼少の頃から剣道をやっている。だから中型の刀剣と行きたい所だが、実戦形式での運用となると剣道の形は少々危ない。最近の剣道は一定の部位しか狙わない為、こういった時には使いづらいだろう。故に中型の刀剣も却下。

重火器の類も扱い知らねえし、却下。

「となると、これかな」

そう言っただけ俺が手にしたのは、小型の刀二つ。要するに小太刀の二刀で行こうと思う。

何故かと言うと、一つはあの手の長モノは超近接戦闘の際には自身の腕力に頼るしかなく、それならば一応死にかけるなんて事はなさそうだからだ。

次には、重量武器で有るあの戦斧、ハルバートあれならば基本的には斬撃は縦か横、他にも突きや引っかけると言うモノもあるが、振りまわしている所を見ると基本動作はそれに成りそう。それに対して小回りのきく双剣ならば間合いを詰める事ももしかしたら可能なのでは思ったのだ。

俺の選んだ双剣は装飾の無い簡素な双剣。柄の色は片方は白、もう片方は黒、正反対になっている。

これにした理由は一つ。丈夫そうだったからだ。

「よし、決まり」

そう言っただけ俺は両手に双剣を持ち、孔の中から歩み出た。

「決まりましたか。でしたら、始めましょう」  
「ゴメン、少し待ってください」

アイリス王女の言葉で、俺の意識は研ぎ澄まされる。  
思考する。現在の状況を。

場は広大なる闘技場。

眼前には、ハルバート戦斧を持つ怪力無双の御姫様。

己が手には、硬質で軽量の双剣。

姫君はいつの間にか重厚なる装備を身につけ、己が身に付けるは少々厚いだけの単なる洋服。

その差は歴然。ならば一瞬で間合いを詰め、ケリを付けねばならないだろう。

思考により得た情報により、登山用の分厚い上着を脱ぎ捨てる。  
今俺が身につけているのはジーパンとTシャツのみ。

己の最高速度を出すのには少し問題は有るが、現在出来る最軽量の装備はこれだろう。

そう思い、俺は一言口にする。

「準備、出来たぜ」

「解りました。では中心に移動しましょう」

「解った」

返事をし、移動を始める。

ピンツ、と張りつめた空気が闘技場を包み込む。

王女は半身になって、戦斧の先端を俺に向けるように構えている。俺はと言うと完全に自然体だ。

中央には、俺と王女様と以外にあと一人。その一人は騎士甲冑を纏まとっていて、俺と王女様の間で審判を行うらしい。

遠く離れた周囲の騎士達は、俺に向けて憐みの視線を放っている。

それもそうなのだろう。

今の俺の状態は、言うなれば今まで人に世話をされていたチワワが、単身ライオンに挑むようなものなのだ。

けれどその視線の理由が解っても、どこか納得できない自分がいる。自分で言うのもなんだが、俺は負けず嫌いだ。勝手な判断で嗤わらわれるのは、大嫌いだし。闘う前に負けを認めるのはもっと嫌いだ。だからあの連中に、目にモノ見せてやる。

王女様と対峙する心の内で、俺はそんな事を思っていた。

「では、試合……開始!!」

審判の号令と共に、俺へと叩きつけるようにして突風が吹いた。だがそれは錯覚。

突風の名は剣気。それは一流の戦士のみが放てる烈風の気合い。俺は過去、この剣気を一度だけ受けた事がある。

放ったのは、俺の行く道場の師範。

その人は八十代ではあるが、第二次世界大戦を生き抜いた超一流の剣士だ。あの先生の放つ剣気は、俺はもとより六段の先生さえも気怖いする程の物だった。

それと比べれば、今の剣気は身体が硬直しないだけいくらかましだ。

あの人の剣気は、俺では十秒以上硬直する。

「師範<sup>せんせい</sup>よりは、まだましか……」

周りに聞こえなうよう小さくそう言っ、俺は右足を一步前に踏み出した。

その一步に、周囲からは驚き上がる。俺の事は、戦を知らない一般人で通っているだろうから、それは当然なのだけど。やっぱり少し可笑しくなる。

「ククッ……」

可笑しさに口を吐いて出た微笑。やば、俺笑い方モロ悪役じゃん。

そう思うのは一瞬、次の一瞬には戦斧を持つ鎧の王女が詰め寄って来た。初めの間合いは十メートル以上だったが、それは一瞬にして四メートル以下にまで縮められた。

いけない。もう既に相手の間合いだ。そう思った時には、攻撃が開始されていた。

開戦の火蓋を切つて落としたのは高速の点攻撃、突き。

それは何よりも迅<sup>はや</sup>く、何よりも強いであろう一撃。その一撃には寸分の隙もなく、反撃と言う単語など俺の思考からは吹き飛んだ。



高速の刺突を、身体を右に大きく動かすことでなんとか避ける。どんな突きの達人でも、突けば引かねばならぬのは自明の理。だがこの戦斧にはそれは通用しない。

避けたその瞬間、斧になっっている面を俺に向け突きよりも速い速度で、一瞬後には戦斧が自分の斜め左後ろに行くほどに力強く振りぬく。

先程大きく避けたおかげか、ギリギリで俺に触れる事は無かった。だがその一振りは閃光の如く、俺の身体に触れるか触れないかと言う程の近距離を、一瞬にして通り過ぎていた。

途端、己の腹から激痛が走る。触れてはいない。触れてはいないが、王女の一閃は余りに迅く、現実には思えないが紙一重の位置であればその空間さえもまきこむほどのモノの様だ。

現実離れしすぎて正直開いた口が塞がらないが、今はこちらに集中しなければ大怪我をする事は明白。

故にもうその事は思考から弾き出す。考えるのは、王女様に一撃でも加える事。

身体能力からして、今のオレが彼女に打ち勝つ事は不可能。ならば一矢報えるように、頭を使って全力を尽くすまで。

その彼女は、高速の一閃を二発放つても俺に一撃加えられなかったのに危機感を感じたのか、五メートル以上間合いを取ってこちらを窺<sup>うかが</sup>っている。

これは、俺から仕掛けた方がいいだろう。

そう思い、俺は一気に前へと駆けだす。大凡<sup>おおよそ</sup>彼女は今、後の先<sup>カウンターの</sup>を狙っているのだろう。

それは直ぐに解る。だから普通は駆けだしてから、瞬時に避けて

次に移るのが最適。要するに、それは読まれているだろうと言う事。

ならば、ならばだ。そこを相手の読みを外せば、どうにかなるのではないだろうか。そんな考えが頭をよぎる。

きつとこれが俺にとつての最後の機会。チャンス

まずは相手の気を逸らす。俺は自分に出せる最大限の気迫を出しながら、大声で、吼える。

「

！！」

人の声と言うより、獣の咆哮。この場に居るほぼ全てのモノが、そう感じたではないだろうか。そして、それに気付いた時にはその身体は硬直している。これは単なる大声だが、これほどの大声は人間では早々出せはしないだろう。

斯<sup>か</sup>くいう俺も、今の声には驚いている。これほどまでの咆哮は、今までの俺では出てはいなかった。これはきつと、能力が覚醒したおかげなのだろう。

思考は一瞬。

身体は既に、次の行動に移る。

咆哮と共に詰めた間合いは、もう既に四メートル程になっている。

あと一歩踏み込めば彼女の射程範囲だ。

彼女の攻撃のその前に、俺は彼女の射程のギリギリ外から己が右手に持つ短剣を彼女の喉元めがけて投げ放つ。

すると彼女は俺の予想に反し、喉元に迫る短剣を、戦斧ではなく素手で防いだ。

己が身体を焦りが満たす。これでは一撃当てる事も叶わない。それは悔しすぎる。

それでも、走り出したら止まれない。俺は半ば諦めに近い感情を抱きつつ、左手に握りしめた短剣を彼女に突き付けた。

## Ep7：新たな友人

時間は朝十時ほど、俺ことひるがみあき昼神暁は城下街の商店街にやってきている。

今まで俺が見た限り、今まで衣類型の店は無かったため、きっとこれから向こうにそう言ったモノがあるのだろう。そう思って歩を進める。

すると。

「あれ？ あの兄ちゃんじゃねえか？ アイリ様と引き分けたって言うのは……」

「黒髪に漆黒と真紅のオッドアイ……。きっとそうよ。アイツに違いないわ」

アイツだアイツだ、と俺を見世物の様にして集まりだす商店街の人達。

そう、俺は昨日の試合ではあの怪力王女に引き分けたのだ。あのハルバート戦斧を軽々と振りまわすアイリス王女は、力も強く単騎で魔獣狩りをするのできるB級騎士様で有ったらしく、どこからともなくやって来た異那人がそんな人に引き分けたと言う事は、驚きであり瞬く間に町中の噂話になってしまったようだ。

口に戸は立てられない。

それに昨日は見物の人も来ていたらしく、俺は異世界来訪二日目にして噂の人になってしまった。

困ったものだ。今の俺の容姿は、どこかヨーロッパじみているこの国では目立つし、それにオッドアイである事も拍車をかけている。

要するに、悪目立ちするのだ。俺なんかと引き分けてしまったア

イリさん（昨日の試合の後、皆そう呼ぶから俺も愛称で呼ぶよう言われた）にも、俺がこんな風に目立つのは悪い気がする。

思いながらも、俺は人の群れを引きつれて商店街を歩いていく。

俺が何故悪目立ちするこの商店街を歩いているのかと言うと、衣服を買うためである。

お金は王様から渡された。理由を問うと、俺の闘い方に感銘を受けたから、らしい。

こちらとしては今の所衣服も二、三着しかなく、昨日の服は破れてしまったので（試合後、見てみたら腹部が破けていた）好都合では有るが、王様からそんな事をされては、と拒否したのだがそれは王様と王女様の二人に却下されてしまった。どうしたものか……

渡されたのは銀貨十枚。

この世界の知識の無い俺は、試合の後王様にもう一つこの世界の事を教えてもらえるようお願いしたら、アイリさんが自ら名乗り出して色々教えてくれた。初日の罪滅ばしがドータラコータラ言っていた。

彼女曰く、この世界では、共通の貨幣として金貨、銀貨、銅貨がある。銅貨三十枚で銀貨一枚分、銀貨二十枚で金貨一枚分なのだから。銅貨は、日本円で言えば約三百円程だと言う事も知った。有る一部の国では金貨の上に白金貨なんて言うものがあるらしいが、今の所俺には基本知識だけで十分なため、その話は聞かずに出てきた。

よくよく計算すると、王様とアイリさんからもらったお金は服を買うには多すぎる。俺にくれるとは言っていたが、余ったお金はき

ちゃんと返すようにしよう。

王様と王女である彼らにも用事があるだろうから、速く行くためとも思ったがやっぱり貰いすぎな感じは否めない。

「おい、その黒髪の兄ちゃん。なんか買ってかないかい？」

どこかから聞こえてきた俺を呼ぶのであろう声に、俺は首を左右に振ってみるが特に人は見当たらない。と言う事は、

「兄ちゃんどこ見てんだい。こっちだよこっち！」

やはりそうか。

そう思いながら、道に座る人を見る。

その人は全身に黒のローブを身につけ、頭にもやっぱり黒の、三角帽をかぶっていた。

声音から察するに、女性だろう。

快活な、周りも元気にしてくれるような声だ。

「ああ、済まない。そこだったとは思わなくて」

「よし、そう思っんならなんか買ってけ」

少し怒ったような声でその女が言ったため、謝罪の言葉を一言述べる。

すると彼女は俺の方を見て、笑顔で購入の請求をしてきた。

見ると、彼女が売っているのは腕輪や指輪、ネックレスにペンダントと、装飾品ばかり。それらは皆一様に、何らかの魔力を放っていた。

「でもそれ、魔術品だろ？ 高いだろ」

「おつ、兄ちゃん解んのかい？　そうさ、これは全部魔術品さ。だから少々こちらの装飾品系の店から見ると値は張るが、他の国から見れば格安さ。この国じゃ魔術品はなじみが薄いからね」

魔術品とは、何か身につける物に何らかの魔術を仕組んだ品物だ。この国では圧倒的に、魔導師よりも騎士の方が多いし、彼らは皆魔術品に頼らないし、更にここにはそれを好む風習がある。

ここでそんな物を売っていては、上がったり下がったりだろう。買おうにも、俺がもらった銀貨は、服買うためのモノだしなあ。

『アキラさん。それ、買っておいた方がいいですよ』

「いやあ、でも……って、何で出てきてんの……！？」

右側から聞こえた俺を呼ぶ声に、そちらを見ると、見覚えのある四等身。

いつだかの精霊さんが其処に居た。

「兄ちゃん。そいつあ、精霊かい？　面白いの連れてるね」

『へえ、貴方私が見えるんですか。やっぱり高位魔術品を売っているだけは有りますね』

「おつ、アンタは其処まで解るのかい。最近そう言う奴いなくてねえ、アタシは嬉しいぞ……！！」

『そんな、涙ぐまなくても……』

何故かは知らないが意気投合している様子のお二方。現在二人だけの世界形成中に付き、俺はハブられてます。暇だ！　もの凄く暇だ！！

よし、そこら辺に有る、なんか一風変わってそうな服でもいいじつてようかな。

これが面白そうだな、なんか不規則に黒いの出てるし、気にいっ

た。

俺は黒い煙みたいなものがモヤモヤと噴き出す、赤色の外套を羽織ってみる。

その時、何かが噛み合ったような力チリと言う音がしたと思うと、黒い煙は出なくなった。  
何でだ？

『あつ、アキラさん何してるんですか……！！　それ超貴重品ですよ！』

「……え？」

マジで　！？

やべえ、やべえぞ！　貴重品ってことは高額な筈。そんなんに手え付けちまったの俺！？

しかもなんか最初出てた煙は消えてるし、どうしよう……？

『シル、これはアキラさんに購入させます。本当に、本当に申し訳ありません……！』

「ああ、それここじゃ売れないだろうし、それになんかその子、アキラくん気にいったみたいだからあげるよ。だからこれからもよろしく頼むよ」

『そ、そんな……、じゃあ今度また来ますね』

必死にシルさん（露天商のおネエさん）に謝る指輪の精霊に対し、シルさんは親友に対するように接する。どうやらこの外套は俺の物になるようだ。

その態度に感動する指輪の精霊。って、勝手に予定決めてる！？  
まあ、予定はあんま無いからいいけど……



「そうかい、じゃあ、これあげるよ。それありゃ、どこに居てもアタシの居場所分かるから」

『はい、ありがとうございますっ』

小さな宝石のような物をシルさんが渡す。指輪の精霊は涙ぐんでいるようだ。

何だろう、この感じ。

俺、口出ししいしちやいけない気がする。

『では、また』

「あいよ、またね。あとアキラくんもまたね」

「あ、はいまたいつか。これも譲っていただいて、ありがとうございます」

流れるように別れのあいさつに移った両雄に、一息遅れて別れの挨拶と感謝を述べる。

帰り道、色々と服を購入した後、指輪の精霊はこんな事を言いました。

『アキラさん。シルさんはいいい人ですよねえ、火精霊サラマンダーの宿る外套を下さるんですから』

「……へ?」

何だか妙な予感のする一言は、精霊の笑顔によって誤魔化されるのだった。



## Ep7：新たなる友人（後書き）

貰った外套の能力は後ほど。

宝石の方は、ワンピースで言う所のビブルカード。  
要するに人の居場所の解る石です。

最近は勢いでやっておりますので、チョコクチョコおかしな点があるかも知れません。見つけたら、報告していただけると嬉しいです。  
（\*^|^\*）

感想も書いてくれるともっと嬉しいです。（\*^|^）v

では、またの機会に。ノシ

## Ep8・緋色の外套（前書き）

本日二回目の投稿です。

なんか今日は書けてしまいました（\*^ ^）v

## Ep8：緋色の外套

午後、体力作りの為に街の外壁の所を走っていると、どこから声が聞こえてきた。

「へへへ、コイツ案外可愛い顔してんじゃねえか。連れて帰ろうぜ」  
「はっ、まあたコイツのワリイ癖だ。このロリコン！」

「嫌！ 放せ！ 放せー！！」

男達の下ひた笑いと、年若き少女の悲鳴。

俺が正義の味方なら、真正面から男達の前に出て行って、少女を直ぐに助けるのだろう。

だが、俺にそれ程の力はない。武器と言えば、つい先日目覚めた能力のみ。

この状況、逃げるべきだろう。

俺はそう判断して、走っていく。

少女の悲鳴が消えるまで。

それは私  
過ちだった。

「魔女見習い」パンドラの人生の中で、一番の  
王宮に献上する荷物を積んだ馬車に、自分の杖を置いたまま客人用の馬車に乗ってしまった。

魔女にとって、魔法もしくは魔術を使うための媒体であり、魔力をためる杖は必須のモノ。

それをおいて馬車の中で話しこむなど、我々にとってはもつての外だった筈。

そんな時に、盗賊に襲われるなんて思いもしなかった。これは私の自業自得だ。これで死ぬならそれも良いだろう、半ばあきらめていた時、私を見つけた盗賊の一人が私の手を取って、こんな事を言った。

「へへへ、コイツ案外可愛い顔してんじゃねえか。連れて帰ろうぜ」

息を呑んだ。私はいまだ齡十四だ。後二年で結婚可能な年齢では有るが、それでもそう言った事はまだしていないし、結婚前にそんな事をするつもりもなかった。

師匠にそう言った事をして行つた魔術もあると聞いたが、それは信頼も重要だと聞いた。

「はっ、まあたコイツのワリイ癖だ。このロリコン！」

嗤いながら言う盗賊の仲間。他の数人も恐怖に震える私を嗤っている。

「嫌！ 放せ！ 放せー！！」

絶叫、私の叫びが森の中を響き渡る。

ここは首都の直ぐ近くだった筈。あわよくば、誰か助けに……

無駄だとは解っていても、抵抗せずにはいられない。

私のプライドも何もかも、こんな奴らに蹂躪されると思うと、怖気がする。

「こんな邪魔なロープ、引き裂いちまうか」  
「嫌だ！ やめろー！！ 誰か……！ 助けて……！！」

数人の男に羽交い絞めにされた上で、びりびりと音を立てて引き裂かれる私のロープ。

このロープ、気に入ってたのになあ。  
半ばあきらめが入ってはいるが、私は叫び続ける。

この状況を打破してくれる、勇ましき者を求めて。

「助けなんか求めても、誰も来<sup>き</sup>やしネエぜ。ここはそう言う場所だ」  
「そうだそうだ、騎士も、ましてや冒険者も来ネエ場所だ」  
「こんな所を通った、馬鹿な自分を呪うんだな」  
「ここに来るのは、まさしく愚か者だ」

男達は、私から希望さえも奪おうと手を伸ばす。  
涙が一筋、頬を伝う。

流れるその涙は、絶望か後悔か、

「なんだお呼びかあ？ 愚か者なら、ここに居るぜ」

それとも希望を掴んだ故か。  
差しのべられた手には、一つの希望が隠れていた。

『何だ手前は？？』  
てめえ

盗賊らしき風体の男達は、気配なく自分達の背後に降り立ち、不穏な言葉を放った緋色の外套に付いたフードの部分で顔を隠した男に疑問を放つ。

パンドラは突然の男の来訪に、目を見開き彼の言葉に感動した。それはきっと、私に差しのべられた勇者の手なのだと。

「俺はお前らの言う所の愚かもんさ、今からそいつの要望にこたえようと思ってね」

盗賊、パンドラ、ここに居る緋色の男以外の全員が息を呑む。盗賊はこの男の奇妙な自信に、パンドラは男の言葉への歓喜に。

「さあ、かかってきな。チンピラども？」

緋の男は、右手の人差指でクイクイツと盗賊を挑発する。これまでの男の発言への怒りと、その正体への不安から、盗賊たちは激怒した。

そしてそのまま手に武器を取り、雄叫びを上げて男へと襲いかかる。

そんな事をモノともせず、パンドラへと笑みを浮かべる緋の男。男の微笑に、パンドラは驚愕した。「あれは、何だ」と。

先の数瞬で、パンドラは男の魔力を読んだ。パンドラとて、今は媒体がなく見習いとは言え魔女を自負する身。それくらいは出来るだが魔力を調べた途端。全身に振るえが起きた。

大きすぎる。その魔力は、自信の練摩した魔力と比べても、由に七倍はある。例えるならば水槽と湖。それ程の魔力の差。



彼はいつたい何者なのか。そんな疑問が、パンドラの脳裏をよぎる。

それとはまったく関係なく、男は攻撃を受ける。

いくつもの斬撃、打撃を。四方八方から完全に同時に。

「ヘッ、殺ったか？」

盗賊は自分達が囲み、攻撃し、弱っているだろう緋の男確認する。

「なっ……！」

「居ないだと……！」

「どう言う事だ……！！？」

動揺し、周囲を見回す盗賊たち。

緋の男は、その上空から黒炎の門を開き、現れた。

「<sup>ゲート</sup>門……！？」

その魔術は、まさしく小型化された<sup>ゲート</sup>門。

だが、この男のそれはどこか異質。

本来、<sup>ゲート</sup>門の魔術は属性を持たぬ比較的汎用型の魔術だ。

それが炎を纏うなど、聞いた事もない。

「燃えな」

緋の男が、盗賊たちの中心に右手を翳して一言、言霊を放つ。

その瞬間、<sup>はじ</sup>空気が弾けた。

否、実際には盗賊の張る包囲網の中心に、先程の黒炎が爆発する

ようにして、一瞬だけ現れたのだ。

だが、それは空気が破裂するようにして見える原因となった。

盗賊たちが、吹き飛んだのだ。

目算で言う所約三メートル程、木にぶつかって止まるまで。

戦闘は終わった。

緋の男が、一撃で盗賊を気絶させる事によって。

「大丈夫か？」

緋の男は、パンドラに自分の来ていた外套を羽織らせた。  
疑問に思い自分の身体を見れば、肌が大きく露出していた。

「フフッ……」

パンドラは、その男の性格が、少しだけ解った気がした。

## Ep8・緋色の外套（後書き）

主人公、非力な少女を助ける。と言うお話。

気絶はしたが、生きてはいる盗賊たち。

魔女さん、主人公に興味を持つ。って感じですよ。

ではまたいつか。ノシ

最近暇さえあれば執筆している私、間和井でした。

## E p 9・ギルド登録（前書き）

今回は色々と主人公の情報をちまちま。

前回の魔術に関する事や、称号とかに関する事です。

では、お楽しみください（\*^^\*）v

## E p 9・ギルド登録

「なあ、あの娘<sup>こ</sup>なんて言ってた？」

『ありがとう、勇者様<sup>様</sup>』

『言<sup>あるじ</sup>つておつたぞ、主<sup>あるじ</sup>』

「……そうだよなあ」

貰い物である緋色の外套を纏う俺、<sup>ヒルガミキヲ</sup>昼神暁は、王宮内の与えられた部屋で大いに困っていた。

何を隠そう、先刻の盗賊に襲われていた少女の件だ。

「なあリン、サラ。俺どうしよう」

俺は冷や汗を流しながら俺の両肩の精霊二人に問う。

リン、とはいつぞやの指輪の精霊だ。理由は簡単。指輪<sup>リング</sup>のリンだ。さんざん悩んどいてその程度か。って思つかもしれないが、これにはもう一つ意味がある。

四等身でも、凜としたたたずまい。まあ、同じようなもんだ。

これを聞いた時の本人の感想は『ありがとうございます！ リン、ですね。心に刻みつけます』だった。

四等身でも、美少女の笑顔は様になると思う。

サラ、って言うのは赤い外套に住んでいるって言ってた火精霊<sup>サラマンダー</sup>だ。これも、俺の想像に反してかなりの美少女だった（四等身だけど）。名前の事は言わずもがな……、誰か、俺にネーミングセンスを下さい。

サラマンダーと聞いて火トカゲを想像するのは、きっと俺だけでは無い筈だ。

そんな事を言ったら、『主は吾ら<sup>われ</sup>に偏見が有るようじゃの。吾らにも性別は有るし、社会もある。今は基本的には人間が中心な社会であるしの、この姿が基本じゃ』なんて事を言われてしまった。良く分からなかったが、そう言う物なんだってことにして置く。

彼女達とは、命名による契約。と言うモノを結んだ事になっている。

リンとは、今までは仮契約、と呼ばれる一方的な契約だったのだが、今回完全な魔力回線<sup>パス</sup>が繋がったと言う事で、色々<sup>色々</sup>と魔術の知識が俺の中に流れてきた。ついでに言うと、サラからもだ。

彼女達には得意分野があるようだ。

リンは空間操作系。門<sup>ゲート</sup>とかの魔術。

<sup>フアイヤーボール</sup>

サラは火焰攻撃系。代表は火球と呼ばれる火の弾丸を任意の方向に飛ばす魔術だ。

それと俺の能力を組み合わせる事で、移動後の隙を生まない『黒<sup>フア</sup>円焰門<sup>イヤーゲート</sup>』と言う戦闘中に使用可能な門<sup>ゲート</sup>を編み出したり、空間操作系<sup>バリア</sup>の結界と発火の魔術を組み合わせた物など、色々<sup>フアイヤ</sup>と組み合わせたりしてみた。

とか、まあそれは今の問題とは関係無い。

問題は、彼女が俺の事を‘勇者’と呼んだ事だ。俺のここでの使命は‘魔王と勇者’に関与する事。となると、俺自身が勇者になっ

てしまったら意味がないのではないか。

そう思っ

て談義を始めたのだった。  
「はああああ……！！ どうすっかなああああ……！！」  
「まあ、主に対しての勇者の一言は、一人の娘が行っただけじゃ。その程度で勇者の称号が手に入る筈もなかるうて……」

『うんうん、そうですよアキラさん。サラの言う通りです。称号なんて、多くの人間が呼ばなければ成りえませんよ』

走る頭痛を堪える為に眉間を抑える俺の、真剣な言葉を、サラりと流すサラとリン。

お前ら真剣に考えてよ！ そうしないと俺一生身寄りが無いままなんだよ！

『そう言われても、主が勇者になっていないか調べる方法の……。あつ、ギルドが有るではないか、リン』

『そう言えばそうですね……！！ サラ』

彼女達は、俺と契約をしたおかげか、俺から発せられる強い意志は察知できるらしい。なんと厄介な。

「はあ？ ギルド？ 何それ……」

『それはじゃのう』

俺の疑問に、サラが説明を始める。

ギルドとは、それ即ち仕事受付委員会。まあ、前の世界で言う所のハローワークみたいなモノです。とはリンの言。サラが色々言ってくれたが、こっちの方が俺には解り易いのでこう解釈する。

そしてギルドには、入会するとギルドカードと言う魔術で作るプロフィールを書いたカードが貰えるのだと言う。

それには自身の能力値をABCと<sup>ジョブ</sup>で表したモノと、その人を呼ぶ敬称もしくは役職名、または神が与えた使命である<sup>スキル</sup>称号と言う項目、そしてその人物が持つ魔術や特殊な能力を表す能力と言う項目が有るのだそうだ。

サラはともかく、何でリンがそんな物知っているのだろう。そう思った俺は本人に聞いてみた。

すると『精霊には精霊の社会が有るんですよ』と言う吃驚<sup>ビックリ</sup>な発言が返ってきた。精霊の社会って、どんなだろう。面白そうだよな。

いつか、俺が行けるか聞いてみるか。なんて考えつつ、一言。

「よし。そこに行こう」

『なっ、そんな突然な……!!』

『サラ、それは言っても聞かない気がします』

そうじゃったな。と諦めるサラ。失礼な、思ったら即行動はいい事だろ。

所変わって、ここはアルタイル王国首都エルキオンに有るギルドの中。

俺はいつぞやの赤い外套。その両肩には定位置だとも言うつかのように、精霊二人がふんぞり返っている。

其処には筋骨隆々の戦士や、妖<sup>あや</sup>しさムンムンの黒装束、白銀の鎧<sup>ジョウ</sup>を身につけた騎士もどき。ありとあらゆるコスプ、じゃない。称号<sup>シヨウ</sup>の人たちが揃っている。偶<sup>たま</sup>にいるバーンさんとかが、いい！ とつてもいい！ 今度精霊二人に『嫌』……、解ってるさ。そんなの夢物語だってことくらい。

「用意が出来ました。どうぞこれを」

受付の女性から、渡される縦7センチ、横5センチ程度のカード。これがギルドカードか。



俺は未だこの世界の文字は読めないため、記入するモノとかはサラにまかせた。

数時間して、その情報を書き込み。

そして、渡されたカードには俺の情報が書かれている。

カードランク：D

名前：アキラ＝ヒルガミ

年齢：16

性別：（雄）

属性：混沌カオス

戦闘技能

体力 / D -

魔力 / C + +

敏捷 / B -

耐久 / D -

攻撃 / E +

防御 / D +

魔攻 / B +

魔防 / D -

ジョブ

称号：「オッドアイの異那人」わたりびと

『破滅の神代』カミシロ

「冒険者（初級）」

スキル

能力：「獄焰」「空間操作魔術（初級）」「火焰攻撃魔術（初級）」

一通り俺のギルドカードを読み終えて、再び1点を見つめるサラ。サラは顔をヒクつかせる。どうした？！何か悪い事書いて有ったか？！

「で？ 勇者って書いてある？」

左肩に居るサラに聞く。それはとても重要な事だ。

『いや、それは無い。それは無いのじゃが……。これは、他の者には見せん方がいいのう』

良かった。勇者にはなつて無いらしい。

「ん？ 何で他の人には見せちゃいけないの？」

『主は、妖しすぎるのじゃ』

俺の疑問への、サラの答えはこうだった。

本来ギルドカードのランクと言うのは、最低ランクであるFから始まるのに対して昨日の盗賊退治の功績で、初心の冒険者なのにランクDになっている事。

戦闘技能に関しては、普通の成人男性の平均が基本的に全部Eなのに対して変に偏った所が強い点。

極め付けは称号の欄の『破滅の神代』<sup>カミシロ</sup>だ。何だ『破滅の神代』<sup>カミシロ</sup>って。アレか？ 神様から言付かっている使命のあれか？ いやでもこんな凶悪な……

「そうだな。うん。見せない方がいいかもな……」

『そうですね。これは……』

三人とも、頬に嫌な汗を流すのであった。

その日の、サラ達の言う所の精霊社会。

「「サラ、お前面白い奴と契約したなあ。今度オレにも会わせろよ」」

「面白いつて言うか、変じやの。会って見るのは良いが、自力で何とかせい。のう、リン」

「えっ、何で私に振るんですか！？ コメントしようがないですよ……！」

「「ブー、ブー」」

そこでは、どこか気の抜けた会話が繰り返されているのです。

## Ep9・ギルド登録（後書き）

感想、待ってまーす。  
では、またの機会に。ノシ

## Ep10：愛憎の言霊

「ハアアアアア！！」

「オオオオオオ！！！」

周囲の空気を巻き込みながら風を切る鉄の塊、そしてそれを受けるもう一つの鉄の塊。触れあう瞬間には、甲高い金属音。

渾身の力を以って振りぬかれる戦斧を、俺はその両手で持ったドデカイ大剣クレイモアで受ける。やっぱし、アイリさんの怪力は半端じゃない。数回受けただけなのに、腕がしびれてきている。

異界に来てからもう一週間がたった。

俺は、王宮の中に有る修練場で毎日の手合わせを行っていた。お相手はアイリさんだ。いつぞやの試合から、ずっとこれが続いている。彼女にも公務が有るだろうに、大丈夫なのだろうか？

なんて事を考える余裕を彼女が与えてくれるはずもなく、今は全力で稽古を付けてもらっている。彼女の得物は、いつぞやの戦斧ハルバート。俺はと言うと、先日行ったギルドのクエストで多少稼いだので、自腹で買ってみた刀身が二メートル程の大剣クレイモアを使ってみたりしている。いや、毎日素振りもしてるし、少しは使えるかなーって思ってるね。

結果は歴然、完全に俺が押されている。これは稽古だし、俺の能力と、魔術は使わない事にしている。使うと稽古と言うより、死合いになりそうだし……。

「体さばきが甘い！　それでは衝撃を殺せないだろう！　何故双剣

で出来る事が大剣で出来ない！」

「ハイ！」

気付けば、彼女と俺は完全に師弟関係だ。そんなもってこの娘、稽古中はどSだ。女王様だ。王様は二人で高め合え、って言ってる稽古を許可してくれたけど、これじゃあ彼女の稽古になっているのかどうか……

『主はこの時だけは、完全にあ奴に頭が上がらんのだ』

俺の思考に割り込んでくるサラに、『そうだな』と心の中で返事をして、これが最後のチャンスだと言うように、大きな隙を作ったアイリさんに対し俺は大きく横なぎの一閃を放つ。

「これで……！ どうだああああ……！！」

振り切った一閃は、ここでの最初の試合に比べれば、かなりの速さで彼女に迫る。

その瞬間、耳を劈く程の超高音が修練場を包み込む。

俺の手には手ごたえが無く、そればかりか得物である大剣さえもその手には無い。

何故か、それは手甲をした彼女の右腕の裏拳で、完全にたたき落とされていたからだ。どれだけの反射神経、どれだけの怪力だったんだ。規格外にも程がある。

その後、彼女は稽古は終了だ。とばかりに、パンパンと手をたたき一言。

「今日の稽古は、これで終わりです。きちんと身体を休めて下さいね」

笑顔で言うその顔は、パアアという擬音がつきそうなほどに輝い

ている。まるで向日葵<sup>ひまわり</sup>である。

「あつ、あと、神官たちが貴方にあとで召喚場に来て欲しいと言っていましたよ。ナギル神がどうか……、ヨウカイがどうか言っていました、ヨウカイって何なんでしょうね……」

「解った、少し休んでから行くよ」

ここは基本的な宗教に、キリスト教みたいなものが有り、そこに自然崇拜みたいな感じが混じっている、なんとか教つてのが有るらしく。

その宗教では異世界にも神がいる、と言う認識があるらしい。俺が聖騎士であるアイリさんに「異端」として切りかかれたりしないのは、そこら辺が関係してるらしい。

まあ、大体はサラとリンによる入れ知恵だな。

俺はアイリさんに返事をして、その場にごろんと寝っ転がる。

今は朝の七時程。さっきまでの稽古は、朝稽古だったと言う事だ。

俺は熱くなつた身体を冷やすために、着こんでいた赤い外套を脱ぐ。

これにはサラが宿っていただけでなく、衝撃吸収、耐刃性、耐火性にと万能機能が施されていた。シルさんアンタ気前良すぎっ！！有りがたいわ。

そんな事は今の所関係なく、考えるべきは神官たちの事。

神官と言うと、俺は初日の嫌な思い出が浮かんでくるのだが、それは考えない事にしよう。

和ぎる神、妖怪、そのワードにここに来る前のことが思い出され

る。結局、背後を取られてから何かでやり返す事も出来なかった神を名乗る変な奴。

俺と真夕美に襲いかかってきた火や風を纏う妖怪達。あいつ等の事が、何故今俺の耳に入ってくるのだろうか。

そんな事に想いを馳せていると、アイリさんが俺に話しかけてきた。

「アキラ殿、その、もしよかったらなのですが、用事が終わったらで良いので、またここに来ていただけないでしょうか？」

「へ……？」

それは、どう言う意味だ？ もしや俺がふがないから、もう一回稽古とか？ 貴女、オニデスカ？

マイナス方向に考えていると、サラとリンが俺に一言『鈍感』と言ってきた。何、どゆこと？

『主、ハイ、と言うのじゃあ』

『そうですよ、それ以外の発言は、私達が許しません……！』  
「……ハイ」

なして、貴女達は怒っているのですか？  
なんと言うか、般若面が二つ見えるんですけど。

汗を垂らしながら俺が言うと、アイリさんは嬉しそうにこう言った。

「ありがとうございます！ 私、待ってますね！」

何だろう、この喜々とした空気は……、俺、この空気経験したことが有る気が……



『『フンッ……』』

そして二人の精霊は、何故か怒っているのですた。

「訳が解らん……」

数十分して、召喚場の前。  
俺は十分に身体を休めて、決意のもとにここに居る。

叩きつけられるのは、希望か絶望か、俺に渡される情報は、一体  
どんなものなのだろうか。

覚悟のもと、召喚場の扉を叩く。

その時、聞こえてきたのは、聞き覚えのある声だった。

『おっ、噂の彼のお出ましかな』

憎たらしい猫なで声。

そこには見覚えのある少女が一人と、白装束の男が一人、堂々と  
立っていた。



## Ep10：愛憎の言霊（後書き）

再登場！

次回、気になるあの人の姿が解ります（\*^^^）v

ではでは、また次回。ノシ

Ep11：思惑は妖しく……

『おつ、噂の彼のお出ましかな』

その声が聞こえた瞬間、俺は扉を蹴破った。

「何でテメエがいんだよ！！」

視界に入るのは、純白の着物を着て、その上に真紅の羽織を引つけた、俺をここへと送ってきた問題の野郎が居たのだ。

そいつの容姿は一言で言うところ普通。

黒髪黒眼の、一般的な日本人男性の姿だ。

だが、そこが何だか引かかる。コイツは神を自称している。しかもそれだけでなく、俺をここに送り届けると言う能力チカラも持っていた。

そんな存在であるアイツは、確かに俺にこう言ったのだ。『向こうにいけるのは、貴方だけなのです』と。

アイツの言う貴方とは俺の事だし、その時はアイツの前に俺がいなかった。

だから、だから俺は憤努するのだ。

アイツの後ろに、俺の生きてきた十五年の間、見なれた少女の姿が有る事に。

「テメエ、言ってた事と違うじゃねえか……！！」

俺は、真夕美はここには来ないと思ってた。それにアイツははっ

きりとこういった。『彼女の事は心配しなくても大丈夫です。向こうにはいけませんから』と。それが本当に真実かは解らないが、その眼は嘘を言っているようでは無かった。

あれは俺の見間違いだったのか。

そんな事を思っていると、自称神はこう言った。

『何を言っているんですか？ 暁さん、アナタは勘違いをしている。私も、私の後ろの真夕美さんも、そこにはいませんよ』

「は？」

こつちを指す和ぎる神。

アイツは何を言っているんだ？

理解が出来ない。見た限り、確かにアイツと真夕美はここに居る。

『どうやら解っていないようです。では、私達の方に来て下さい』

手招きをする和ぎる神。

警戒しながらも、一步一步前へと踏み出していく。

神官たちは、俺が入ってくる前からアイツに視線を釘付けにされているようだ。

何か使ったのか？

きつとアイツのする事は、俺には理解不能なのだろう。半分は気を抜いた状態で、俺はそれに気付いた。

「何だ、これ」

近づいたことで解ったのだが、和ぎる神も真夕美も、どこかノイズが走っている。前の世界のテレビで言う所の砂嵐の状態だ。手を伸ばしてみても、すり抜けていく。

「どう言う事だよ」

『聴き方に少々問題があるとは思いますが、まあ良いでしょう。貴方から見て、私達は映像です。』

立体に見えていたから、ここに有るのだと錯覚していたのでしようが、私達の実体は其処にはありません。ついでに言うと、会話を出来るのも私と貴方だけです。

私は思念を飛ばす事で会話が可能ですが、真夕美さんにはそれは出来ませんから』

良く分からない事を言っているが、要するにここに居るように見えるアイツ等は、本当はここに居ないと言う事なのだろう。

それならば良かった。そう思っただけが抜ける。そう、俺は真夕美に危険が無いのならそれでいい。

『では、本題に入りましょうか。まずはこちらの状況。』

次にそちらの世界に行った貴方の身体を奪った者たちと、その目的。そしてその世界における貴方の本当の役割を……』

初めにアイツが語り始めたのは、俺がこの世界に来てからの向こうの世界の日常。

現実世界での俺と真夕美は、今の所和ぎる神の使役する式神とやらで俺達の事をカムフラージュしてあるんだそうだ。心配していた学校とかの事とかを聞いたら、何も変化なく進んでいるそうだ。

次にアイツはとんでもない事を言い出した。

この世界に俺の身体を喰らった妖怪たちが、いつの間にか渡って来ていると言うのだ。アイツは、こと向こうの時間軸はどこかずれているから、いつ着くか解らないと言っていたが、それでは対処法が立てられない。

あの妖怪たちには、俺は瞬殺されている。そんなのが来てしまえば俺は使命も糞も無い状況になるんじゃないかなろうか。

そう質問したら、アイツは気楽に『今の貴方なら大丈夫ですよ』と、言ってきた。何が大丈夫だってんだ。

最後にアイツは、『貴方の使命は、【破壊】する事。繰り返される勇者と魔王の殺し合いの、混沌の物語り。貴方はそれに、終止符を打つんです』等と訳のわからない事を言ってきた。

これなら最初に言われた使命の方がまだ楽だった。もうわけが解らねえ。

『これで貴方への言伝は終わりです。あ、忠告しときますけど、もうその国出ないと、貴方に悪い事が起こりますよ。主に精神的な意味で……』

ではでは、私は真夕美さんに貴方は元気だったと言っておきますね。』

「ま、待てっ、俺はお前に聞きたい事が……」

一気に語り、アイツはスーッと消えていった。すると、今まで黙っていたサラが、ダムが崩れて鉄砲水が起きたかのように、マシンガントークを開始した。

『主<sup>あるじ</sup>！！ あ奴は何者なのじゃ！！ そこら辺の下級神官等と違う筈<sup>われ</sup>の、精霊である吾<sup>われ</sup>まで呑みこむ極大なる神気。有無を言わせず目を奪わせる魅了の魔眼！』

主も主で、それを物ともせぬとはどういう事じゃ！ うぬらは何処の化け物じゃ！』

突然の暴発に、俺は返す言葉が見つからない。と言つか、サラ。お前そんなに暴言をはくような娘<sup>こ</sup>だったけ？

フーフーと息を切らしながら、サラは言葉を続ける。

『それにじゃ、吾はあのような娘は知らぬぞ……。  
見も知らぬ娘の為に怒っている姿は、契約した精霊として、吾は、  
なんと言つか……。もどかしかったのじゃぞ……。』

顔をそっぽへ向けて、ぼそぼそと呟き、直ぐにサラは消えてしまった。

言葉は良く聞こえなかったが、後ろから見えた耳は、真っ赤に染まっていた。

そんなサラに影響されたのか、神官達が一斉に俺の方を向く。な、何！？

「異那人殿わたりびと。彼の者は何者なのですか……。！」

「異那人殿、貴方は何処からいらしたのですか……。！」

「異那人殿、先の話は真実なのですか……。！」

「異那人殿、あの少女とはどんな仲なのですかあ？」

異那人殿、異那人殿、と質問を叩きつけてくる神官達。  
ん？ 今何か不穏な質問が聞こえた気が……

「異那人殿、貴方は一体何者なのですか……。！」

「異那人殿、彼の者のと如何して会話が出来るのですか……。！」

「異那人殿、貴方の事を、ぜひここで調べさせていただきたい……。！」

「異那人殿、彼女のスリーサイズを教えてください？」

続けてぶつけられる疑問。って、ん？ さっきから真夕美の事聞き出そうとしてるやつ誰だあ！ 俺が叩きつぶしてやるから出てき



やがれ！

『アキラさん。これは逃げた方がよさそうですね……』

思念で俺にアドバイスをしてくれるリン。そうだな、ここは逃げよう。

『えっと、転移先は……』  
『修練場です』

門<sup>ゲート</sup>の魔術を使って移動する先を決めようとしていると、リンが勝手に転移先を決め、転移を開始させてしまった。

この魔術はリンから伝わった魔術であるため、彼女には色々と横入り等が出来るようだ。

空間系は彼女の方が有利なのだ。

円形の門をくぐり、着いた先は今朝の修練場。

そして、逆さに見える奇麗なおめかしをしたアイリさん。その顔はもの凄く驚いている。

アイリさんを確認したと思ったら、ゴチン、と言う音と共に激しい痛みが頭に走った。

『あ、あんな娘<sup>こ</sup>にデレデレしてたアキラさんがわるいんですよ？』

リン、俺が一体何をしたと？



**E p 1 2 : 仕事、仕事、仕事（前書き）**

今日から更新再開。（\*^^）v

更新停滞の理由は一応活動報告にあります。

## Ep12：仕事、仕事、仕事

突如現れた門から逆さで一気に落ちて、頭部を強く地面に打ちつけたアキラ殿。一体召喚場で何が……

「ど、どうしたのですか……！ アキラ殿……！」

私                    アイリスは、動転してそれくらいしか言葉が浮かばない。

門の魔術は、通常自分で転移先を決めてどのような方向で現れるかが決定できるため、こんな事は起きないはずですが、彼は如何したというのでしょうか？

「痛ううー。いや、大丈夫。それよりアイリさん。もしかして待たせた？」

頭を押さえつつも、自らの力で起き上がるアキラ殿。何かブツブツ言っていますが、本当に何があったのでしょうか？

それから放った言葉は、私がアキラ殿を待ったかと言うモノ。待ったと言えば、待った事になるのでしょうか。

私は稽古の後に浴場で汗を流してから、ずっとここに居るのですから。

「えっと……、待っていませんよ」

ですがそれを素直に言ってしまったては、アキラ殿の立つ瀬がありません。

私は笑顔で誤魔化します。

正直、男性に自分からお願いして時間を作ると言うの事は今まで

無かったので、緊張して居るなんて事は知られたくありません。  
恥ずかしい。

いきなり逆さで落とすのはどうかと思うぞ。リン。

なんて事を小さく呟きながら、俺は起き上がる。さっきの話は、  
一端頭の隅に追いやろう。アイリさんに失礼だ。

ここ一週間のアイリさんとの稽古と、ギルドでの力仕事が効いて  
いるらしい。頭の痛みはそこまできつくは無い。それよりも、

「痛ううー。いや、大丈夫。それよりアイリさん。もしかして待た  
せた？」

女性を待たせるとどうなるか、真夕美に身を以って教えられてい  
るため、初めの発言はこれにする。あの時の剣幕は凄かった。なん  
てつたて俺のなけなしの金が全部アイスでパアだった。あれ？ 何  
でだろう、眼の前の光景が滲んできたな。

きつくは無いと言っても、痛いもんは痛いので頭は庇っている。  
今度治癒の魔術を誰かに教えてもらおうかな。

「えっと……、待っていませんよ」

少し俯いて、いきなり笑顔に変わるアイリさん。それはまるで、  
直前まで俯いていた蕾が朝日と共に一気に花開いたアサガオのよう。  
嗚呼、その顔は反則だ。何で赤面してるのさ。俺の心臓を起爆さ  
せる気か？

少しだけそんな事を考えて、直後俺は頭を振って思考を振り払う。

「アイリさん。それで俺に、何の用なの？ その格好じゃ、稽古つて訳ではないだろうし……」

不安に思いつつも質問する。

アイリさんの服装は、どこか遠出でもするようなモノだ。下は膝丈くらいの青いミニスカート。上はほんの少し装飾の施された真っ白のシャツ。あぁッ、なんて眩しいんだ。

最初に会った時の青色のドレスとは少し違い、これはどこかスマートな感じの服装だ。

「えっと、あの……私のお友達に会いに行くので、護衛を頼みたくて……」

もじもじしながらも、「お願いします」と呟くアイリさん。だからそれ反則。

「……そ、そうなんだ。何処まで？」  
「良いんですか？」

俺の反応に、上目づかいで効いてくるアイリさん。ちょ、おまっ

……  
顔に血が上つて来ているのが自分でもわかる。

「あ、ああ。良いよ」

どこかから『フンッ』と言う声が聞こえた気がしたが、空耳だろう。

「良かった。行先は隣町のノエリア。

其処までには大盗賊団が出ると聞いていましたので、私一人では行くのは危険ですし、第二王女とはいえ私の上には四人もいますから近衛以外は動かさせませんし……」

彼女の近衛は、彼女が戦闘に熱を入れている所為か、王から回された人には基本的に内政型の人間が多い。

王様はどうにかして彼女をお淑やかにしたかったのだろう。現在の彼女の状況からその努力の程がうかがえる。兄や姉は大抵が肉体派で、彼女くらいは内政の手伝いが出来るようになって欲しかったのだろう。

まあそんな王様の思惑はどうでもいい。結果としてこんな可愛い王女様に仕上がっているのだから良いだろう。

今回はアイリさんの護衛だ。盗賊に気を付けるようにして居れば大丈夫だろう。その為の俺なんだから。でも、偶には俺の<sup>たま</sup>実力の確認もしてみたい。クエストでゴ布林退治なんて物があつてやつてみたが、所詮はゴ布林だし、それに退治だったしな。人間に対して、どの程度まで俺の魔術と戦闘術が通用するか試すのも良いかもしれない。

そう言えば、盗賊って言うと思いつくのがロリコン野郎とあの少女。隣町って言ってたけどもしかして……

まさかなあ。世界はそんなに狭くないだろ。うん。

「準備はこちらですとありますので、ついてきて下さい」  
「ああ、解った」

未だに花のような笑顔で、俺に手を向けるアイリさん。  
何処行くんだろ。

道中の会話とかそういうモノに想いを馳せていた俺は、この時アイリさんの向けた笑みが、王様の計略の元に向けられたものだという事に、全く気付く事が出来なかった。

しばらくして、王宮の裏門に付いた。

俺の装備はいつも通りの赤い外套に、最近買った大剣を背負クレイモアっている。戦力として、魔術はサラとリンのお陰で基本は完璧だし、応用も一応可能だ。こっちで覚醒した能力を絡ませた俺が創った黒焰系はやめておいた方がいいかもしれない。あれはリンが言う所の規格外。人に見せていい物では無いらしい。

裏門の所に目を向ける。

あれ、何で神官と門番さん話してんの？ てかその本いつぞやのブツじゃねーか。やめなさい！ そんな物持つてくんな！ にやけながらこっちを見るなエロ神官！

遠目に見えた変態三人に心の中で突っ込みをしながら、表面では平静を装っておく。

すると、アイリさんが出発を告げる。

「さあ、行きましょうアキラさん。それに近衛の皆さん」

「ああ、そうだな」

オォー……！、と小さく、そして強したたかに返事をする近衛の皆さん。



その数はおよそ20。

着ている物は皆同じく白色の外套に黒色の軽鎧。頭には目元まである幅広の白い帽子。二人だけ違う色の赤色と青色の帽子の奴が居るから、それが隊長と副隊長なのだろう。

近衛の中には女性もいるらしく、数人軽鎧のある所がきつそうな人がいて眼を釘付けにしそうになったが、まあ気にしてはいけない。後々リンとサラが五月蠅く言って来そうだ。

そう思っていると、どこから念を飛んできた気がした。

『なあリン、何か言ったか？』

『へ？ 何ですか？』

『いや、何でもない』

森の中から感じる違和感。どこか気持ちの悪いような、消化不良な感覚。

その時俺は、自らに向けられた好奇の視線の意味に気付くことが出来なかった。

森の中を駆ける、アイリさんと護衛の近衛隊長を乗せた馬車。

俺は、アイリさんが俺を連れてきた理由が解った。

出発して数十分経っただろうか、周囲から殺気立った気配を感じる。きっとアイリさんも気付いてる。でもこいつらは全員それを察知すら出来てねえらしい。

ついさっきまで、俺はアイリさんの近衛たちと会話をしていた。

まあ、所謂情報収集だ。

手に入れた情報は、ノエリアと言う街は魔術が盛んで、魔導騎士を多く輩出している街だとか、そこには城に有るあの召喚場の大きな召喚陣を描いた大魔女キリアなる人がいると言う事。その人はこの国の中では、一種の賢者のような存在である事。後は眉唾モノだが、その人は1000年を生きる不老長寿の法を編み出したとか、神に面会が出来るとか、色々。

そしてこれから会いに行くアイリさんの友達と言うのは、そのキリアさんの弟子なんだとか。アイリさんは、毎回商人がこちらに来るときに一緒に会いに来てくれているらしいのだが、今回は商人が無事に来なかったとかで、心配になっていてもたってもいられなくなり、そこに行く事にしたらしい。

最後に、これが俺にとって一番重要な事なんだが、ここは大盗賊団‘鷹の爪’なる者達が出没するらしい。その被害は甚大で、商人を襲い、人を捕まえて売りさばき、女子供は幽閉しどこか解らぬ暗い所に移動させる。だからここを通る際には最低限ギルドで認定されたD級以上の騎士を連れてこなければならなんだとか。

盗賊と言うと俺も一度会った事があるが、まあアイツらじゃあないだろう。あのロリコンの事を思い出すと、そんな風に思えてくる。

「止まれえ！俺達は盗賊、鷹の爪！！速いとこ諦めて俺らに捕まりな！！」

少々思考に耽<sup>ふけ</sup>っていると、顔を黒い布で隠した軽装の盗賊らしき男が、四方八方から飛び出してきた。

それに対し、近衛隊の奴らは馬車を守るようにして陣営を即座に

組んだ。気付けば俺は其処から少々外れて一步前になるような形になっている。

「おい、小僧。お前は仲間はずれか？」

リーダーらしき体中傷だらけの男が、俺にナイフを突き付けてくる。刃物が喉に突き付けられるのは、これで二度目。

相手の人数は40人以上。

どこぞの国の傭兵崩れか、統率の取れた動きで俺達の周囲を取り囲む盗賊たち。

これは、使えるかもしれない。

「アイリさん！ そいつらと一緒に逃げろ！」

俺は首元のナイフを即座に極小の獄焔で焼き払い、前方に居る盗賊たちに結界の強化系「空間系魔術：防衛結界」<sup>タリズム</sup>と門を同時使用<sup>ゲート</sup>して、纏めて馬車の邪魔にならねえ所に移動させる。

叫んで魔術を使うまで、約一秒ほど。呆けている近衛隊の連中に怒声を飛ばす。

「速く行けえ！！ それがアンタらの仕事だろ！！！」

言うと同時に、アイリさんが馬車から顔を出したが関係ない。

全員纏めて、俺がこの場から視認できる限界の場所まで先の魔術の併用で吹き飛ばす。

その様に、盗賊は顔を引きつらせている。そう言えば最初の魔術は無駄だったな。防衛結界は解いところ。

自身の感覚としては、魔力は有り余ってるし体力も申し分ない。  
アイツらは今最高の仕事を邪魔されて、詰め込まれた火薬で爆発寸  
前の爆弾と同じ。

だから俺は背負った大剣を引き抜き構え、微笑と共に、

「さあ、アンタらの相手は俺だ。全員一緒に叩きのめしてやるよ。  
コソ泥共」

壮大なる挑発を、小さく一言呟いてやる。  
それは導火線の根元に軽油を駆けて、火をくべるのと同じ事。

『ツザツケンナア！！俺らもこれから仕事するところだったんだよ  
オ！！クソガキがあ！！』

当然、奴らは逆上する。

見えない顔を歪ませて、森に怒鳴り声を響かせる盗賊達。  
憤怒の表情を隠さず、初めから感じていた殺気は、明らかに大き  
くなった。

俺の実力がどれ程か、これでやっと、試せるな。

口角を釣り上げ、俺はただ一言。

「俺の仕事もこれからだ」

そう言っ  
て俺は、自らの手に自身の幻想の塊イメージを出現させた。

## Ep12：仕事、仕事、仕事（後書き）

明後日から学業の方に移らねばなりませんので、更新は出来て一週間に一度くらいになると思いますが、ご了承ください。>（

―）<

### Ep13：仕事の結果は…（前書き）

今回はまた新キャラが登場。

色々忙しいので、前回の時書いた時の通り、次回更新は一週間後になると思います。（――；）

## Ep13：仕事の結果は…

周囲には、自らが生きる為に人に危害を加えるエゴイストが40人。

こちらは16歳の少年1人に、精霊が2人。

俺は想像する。<sup>イメージ</sup>手のひら大の灼熱の塊。発火と炎上、火炎系の大元の魔力を、視認可能な程にかき集めて圧縮した魔力塊。目に見える其れは、桜色の閃光で、周囲の世界を蹂躪する。

俺の右手には魔力塊、左手には大剣。<sup>クレイモア</sup>

2センチほど手のひらと間を空けてはいるが、それでも俺の手のひらにひっ付いて、発火しようと躍起になる火の魔力たち。

だがそんな事は許さない。

俺の魔力は、俺の意志に従って貰う。小さな小さな、手のひらだけの恒星。

この世界では、想像はほんの少しの工程を経て創造<sup>クリエイト</sup>に変わる。

イメージはハッキリとしているほど良い、なんてことはない。

元来、魔術や魔法、奇跡なんてモノは、具体性の無い虚ろな感情の塊だ。俺は、この世界もそんなモノなんだろうと思っている。

虚ろな夢。神様の夢見る愚かなる児戯。

綺麗なモノが、悪しきナニカに穢<sup>けが</sup>されて、それを再びナニカに美しくさせる。繰り返す破滅と救済。

この世界では、何度も何度も、魔王と勇者が殺し合う。

その為に多くの平安を求める人間と魔族が、無意味に消えていった。

それこそが、今の俺が生きるこの世界の有り様。

俺の知識は、常に借り物だから、本当に其れが有ったのか、どうなのかと言うのは解らねえが、いつか来る崩壊の為には、強ければ強いほど良い筈だ。

逆上した盗賊達は、それでも隊列を乱しはしなかった。

その上、一人だけ俺の眼前に出てくる。

これではまるで、戦争ゲームの中である將軍同士の一騎打ちの様。

「アンタ強いな。あんだけ空間系の魔術連発しておいて、それでもそんな莫大な魔力の塊を作り出せるアンタは何者だ？」

俺達は生きる為にこの仕事してんだ。見たとこアンタはこの国の騎士様じゃなさそうだ。

どうだ、俺達も金を出そう。ここは手を引いちゃくれネエか？」

前に出たのは、帽子をかぶり頭を隠し、顔の大半を長い布で巻いた青年。服は大体が緑と茶色。この森では一度見失えばきつと見つける事は出来ないだろう。

どうやら、コイツがこの40人の中のリーダーらしい。さっき飛ばした傷だらけの男はフェイクか。

コイツは悪い奴じゃなさそうだが、後ろが危なそうだ。

「悪いが、俺は雇われたって言うより、協力してるようなもんなんでね。アイツ裏切る訳にやいかねえのさ」

交渉は決裂。

初めからそんな事は理解していたのだろう。

青年は一声、解った。と言うと、手袋に隠された手を向けて、感情の無い目を向けて、



「殺<sup>や</sup>れ」

小さな声で、開戦の合図は訪れた。

青年を飛び越して、俺に刃を向ける盗賊達。隊列を取りながら、円形に俺を取り囲む。

その瞬間、俺は火の概念をたつぷり含んだ魔力塊を分散して男達の足元に放ち、自分の周囲に防御結界<sup>タリズム</sup>を張る。

そして青年以外の俺に押し寄せてきた男達全員を包むような大きな結界を作り出す。

「あんなバカげた魔力の維持は出来なかったか！！ はッ、こんな結界も、直ぐぶち抜いてやる！！」

盗賊は一瞬驚き、だが直ぐに魔力塊を避けて俺を守る結界を破ろうとする。

客観的に見れば、危機的状况。

だが俺から見れば、最高の状況。布石は全てばらまいた。

「ハアッ、ハアッ……、何だ気持ちワリイ。コイツなんかやったな。外出るぞお」

盗賊達は、数秒で気持ちの悪そうな顔をする。

それも当然だ。火種があるまま大量の大人の男が密室に集まれば、当然酸素が欠乏する。

男たちは異変に気付き、外側の結界を叩き割る。

瞬間、場違いなほど明るい声で、俺は言う。

「なあ。お前ら、バックドラフト現象って、知ってるか？」

「なあ。お前ら、バックドラフト現象って、知ってるか？」

外側の薄い結界を俺の部下たちが叩き割った瞬間、消えかけだった桜色の火種が、俺の眼前まで迫る爆炎に姿を変えた。何の魔力も感じさせずに。

焼かれていく俺の部下が39人。その誰一人として、自分が如何して焼かれているのかさえ解ってはいないだろう。

現に外から見ている俺でさえ、その理由が解らない。解るとすれば、アイツが言ったこの現象の名前が、「バックドラフト」と言うモノだと言う事だけ。きつと、王宮で暮らしている神官様とか、さっきの姫様とか、そう言う輩なら解るのかもしれないが、俺には解らない。

だから、それを理解するのは諦める。

「野郎ども。今、助けるぞ」

救済の手を伸ばす。

一步先、其処は炎の支配するクニ。数秒であれ、其処は通常他者が干渉することのできない空間になっている。

だが、俺は通常ではならない。俺の可愛い部下たちを、助ける為ならば、俺は悪鬼羅刹にでもならねばならないのだから。

服が消え、皮膚が焼けていく。

一瞬で、それはさっきまでの極小の大きさにまで戻った。

そして其処に広がった光景を見て、俺は即座に今できる最高の手段を取る。

俺は、出来る限りの抵抗をするために、今できるありつただけの力を乗せて、正体不明の男の作った強固な結界を殴りつける。

そして即座に、己の中に有る魔力を水の属性に変え、周囲にばら撒く。

本来、俺の得意とする属性は四大元素の中でも攻撃的な風の属性。いつもならそれを使って敵ごと薙ぎ払えば良い。でも、今はそんなことは出来ない。

「糞がッー！」

ここまで、己の属性が水で無い事を呪った事はない。

水の属性は、魔力を傷ついている対象に当てるだけで、その部分が回復する。得意とする属性が水ならば、それだけで回復出来る症状は増える。

今の俺は、ただ足元に広がる部下の命を、ギリギリ留める事しかできない。

水の属性ならば、きっと即座に意識が戻るのだろう。

「ハッ、ハッ……！！」

魔力は尽きた。後は、目の前の男を、叩きのめして帰るだけ。それが出来れば最高だ。

「なあ。アンタは如何してそこまでする？」

突如、目の前の緋色の男は結界をとぎ、俺に質問をぶつけてきた。  
俺は今、魔力を使い果たして力が出ない。闘うのを中断すると言  
うなら好都合。アイツらの  
どうして、そんな事は決まっている。

「……だからだ」  
「なんだ？」

周囲が熱気に溢れている所為か、喉がかすれて声が出ない。  
男が聞き返す。  
もう一度、今度は、据えるだけ息を吸って、叫ぶ。

「【家族】だからだ!!」

そう、俺達は家族だ。  
例え血のつながりはなくても。例え生きてきた環境が違ってても。  
俺達盗賊「鷹の爪」は、今を必死に生きていく家族だ。

「そうか、家族か……」

緋色の男は、どこか感傷に浸るように呟いた。  
何故かは知らないし、知る気もない。俺はただ、俺の家族が無事  
ならそれでいい。

俺は、契約をしてある、この森の精霊に語りかける。

『この地の風を司る者よ、我が内より出でし魔を喰らい、我が願いに応えよ』

俺の魔力は、拡散して個の周辺に放出してある。

それをこの森に住む風の精霊、シルフ達に食わせることで、瞬時に俺達のアジトへ送らせる。

「俺は鷹の爪、幹部の一人カルル・レイフォン。覚えとけ！ 緋色の男！」

あの男を殴ってやれなかったのは残念だが、俺もこれで一緒に送られる。

捨て台詞を残して、アジトへと飛ぶ。

あの男は一瞬だけ驚いたような顔をした。

アジトへ戻り、確認をすれば、俺の部下は一人として死んではいなかった。

軽度の火傷を負ってはいたが、息を引き取る者は誰一人として……。

「カル、お前が会ったって言う緋色の外套を着た男。風貌は一体どんな奴だった？」

今は、アジトの最奥部、頭領の部屋で報告を行っている。

「ハイ。髪は外套に隠されていて良く分かりませんが、瞳は黒と赤のオッドアイ。最近やってきた異那人わたりびとで間違いないかと」

目の椅子にすわるお頭に報告をする。

「そうか、異那人か。面白いな。」

異那人と言えば、500年前の勇者も異那人だったそうじゃないか。今回のそいつは、一体どんな奴なんだろうな」

クククツ、と、笑うお頭。その顔は、どこか無邪気な子供に似ている。

空気が凍る。

俺はこれまでにお頭が笑っている所を、他国の戦争に参加している時以外に見た事が無い。

きっと、この人は今、見た事の無い強者との戦いに想いを馳せているのだろう。

出来れば、その場には居合わせてくはないものだ。

カルルと名のつた男は、風に巻かれて、一瞬にして消えてしまった。

きっと逃げたのだろう。さっきのバックドラフト現象は、自然現象を使ってほんの少しの魔力で広域を攻撃するようにした魔術だ。名前は「回帰孔焰」、命名者はサラだ。今回、俺は出来る限り威力を抑えて使った。

やはり人を簡単に殺すほど、俺の心は荒んでいない。一瞬の躊躇で、俺は威力を最小にした。

基本的に盗賊と言うモノは、生かしておいたら後々酷いしっぺ返しをくらう。そう聞かされてきたから、俺は一気に大勢の敵を倒す事の出来る回帰孔焰を使った。けど、殺せはしなかった。

「俺は、まだまだ甘ちゃんだな」

『そんな事は有りませんよ』

『主は強いよ。だから吾らが此処に居る。本来は人間が精霊を完全に隷属させるなど、出来て一体だからの』

俺の独り言に、リンとサラが応える。

とてもありがたい。

「ありがと。それじゃ、アイリさんのところに行くか」

まずは、隣町。ノエリアを目指すでしょう。

**Ep13：仕事の結果は…（後書き）**

カギとなるのはお頭、それともカルル？  
主人公は現在、修行中。

ではまた次回。ノシ



精霊幕間 1・家族、それは大切な宝物（前書き）

なんだろう。書いてしまった。（。・。・）

書けちまったからには投稿しなければ。そんな感じに投稿。

今回はどっちかって言うのと暗い話です。

この話は幕間ですので、読んでも読まなくてもそこまで大きな影響はないでしょう。

## 精霊幕間 1：家族、それは大切な宝物

家族、それは産まれたときから側に有る者達。

家族、それは親しき者達。

家族、それはきつと、とても温かく冷たい関係性。

「家族か……」

ひとり虚ろに呟く少年は、今私を右手に付けている。

私はリン。彼が付けてくれた名だ。ここにきてから精霊の社会や、サラや他の精霊達に出会うなど多くの事が有った。それは私を感情豊かにさせた。それが良い事なのか悪い事なのかは分からない。

『アキラさん、前を向きましょう。ノエリアを目指すのでしょうか？』

「ああ、そうだな」

私は彼の右方向に出現し、質問する。

問いかける言葉に、彼はうつすらと反応する。

上の空だ。これはきつと彼の過去に関連するのだろうか、今の私にそれを確かめる術はない。魔術<sup>パス</sup>回線は繋がっているから、夜中に彼の夢の中でならどうにかなるかも知れないが、今はどうしようも

ない。

不安だ。彼の心がそう言っている。

魔術回線バスが繋がったおかげで、私は彼の持つ感情を知ることが出来るようになってる。

流れてくるのは、不確かなの感情。恐怖と憤怒と冷静さ、色々な感情の混ざり合った不自然なモノ。それは私にとって、とてつもない毒だ。

私達精霊は、基本肉体を持たない魔力を持っただけの思念体だ。それは四元素の象徴である四大精霊エレメントでも同じ事。これはその一画であるサラに聞いたから確実だ。

『アキラさん。アキラさん大丈夫ですか？』

返事がぶっきらぼうなのはいつもの事だから気にしないが、流れてくる感情が不安定なのが気にかかる。

するとサラも同じことを思っていたのか、サラも左方向に出現した。

『一体どうしたと言うのじゃ主。あるじリンの呼びかけにも答えぬとは、家族について何か嫌な事でも有ったのか？』

サラの十八番オハコ、直球質問ストレートエスチョン。いえ、技とかじゃないんです。私がそう呼んでいるだけなんです。

こんな質問、普通尻込みしてしまうと思うのだけどうだろう。

「そう、かもしれないな」

そう言って、有らぬ方向を向くアキラさんは、どこか悲しい目をしていて、私は何だか話しかけてはいけない気がした。

「なあ、二人とも。俺の昔話を聞いてくれないか？」

そう言えば、私もサラもアキラさん昔の事を殆ど知らない。私達が魔術や他の事を教えている時、熱心に聞いてくれたり、困っている人を見て見ぬ振りしようとしてとして失敗する少し間の抜けたご主人様。今更だけど彼の過去は、一体どんなのだったのだろうか。

「それは、

それは、気持ちの悪い程に生ぬるい風の吹く、真夏の昼下がりに。  
突然父から放たれた中学二年の俺の人生をぶっ壊す、最悪の告白。

「あき曉あ。俺会社首になった」

「ハア！？ 何言ってるんの親父！？ 嘘だろ！！」

泥酔するまで呑んだくれた父が明るいう口調で放ったそれは、俺にとつては死神からの死刑宣告と同じだった。

我が家は父一人子一人の家庭だった。母は俺が生まれたすぐ後に体調を崩して死んでしまった。死因は高熱がどうのこうのと言うものだったと思う。俺はハッキリとした理由を告げられて居なかったため、良く分からないのだ。

家計の殆どは父に一任していたから、その時の家計が火の車だった事は後で知った。その理由も父がキャ○クラとかそう言った店に通い詰めていたのが理由だった。

その翌日から、俺のアルバイト生活は始まった。道路工事、定食屋、コンビニに、殆どバイトは完璧になった。最初はバイトも大変だったが、段々と慣れていった。

だが、その地気には学校と家。その二つの場所は俺にとっての地獄に変わっていた。

学校ではバイトをしている事を知った上級生が、俺から金を巻き上げようと躍起になり、それにより友達も一人また一人と俺から去って行った。

そして家では、真昼間から酒に溺れてドメスティックバイオレンスを受けていた。それだけならいい、俺は痛いのかうしろは小さい頃から大人達とかと闘っていたから大丈夫だ。打たれ強さには自身が有った。でもその時に親父が放つ言葉に問題が有った。

「お前さえ生まれなきゃ、アイツは死なずに済んだのに！ 何で、何でお前が生きてんだ！」

しらねえよ！ 俺に聞くんじゃない！

そう言えたら、どんなに楽だったのだろうか。

そう本気で思えたら、どんなに心が軽かっただろうか。

俺は親父がどんなに母を愛していたのか、爺ちゃん達から嫌と言うほど聞いていた。

彼らが言うには、それは日本、いや世界の中で最高の夫婦だったらしい。常に互いを労り、相手の事は手に取るように解ってた。まさに夫婦の鏡だった、とのことだ。

学校では、先生に気に掛けられていたり、俺が親父に暴力を受けているのを知った連中からいじめを受けた。

数人俺を気にかけてくれる人もいた。それに、真夕美は遠くからだったが、いつも俺を心配そうに見ていた。あの時の俺の唯一の救いは、それだったのかもしれない。

家では俺が抵抗しない事によって、親父の暴力は加速していった。

最後の辺りでは偶に包丁とか、刃物も持ち出された。だから俺の服の下には無数の切り傷が有る。最初はただナイフを振りまわしているだけに見えた。だが、日を追うごとにそれは大きなものになり、最後には何処から入手したのかも知らない長細い日本刀で切り付けられた。

毎回切られては病院に行っていたから、その時にはもう警察に眼を付けられていたのだろう。

ほぼ廃人と化した親父を見て、俺は知らぬ間に涙を流していた。それは悲哀からなのか、喜悦からなのか、不安からなのか、安心からなのか、多くの感情が入り混じり、それは自分自身でも理解できなかった。

ただ一つ解るのは、俺の家族は存在しないという事実。

「今思うと、あの世界は俺にとって、最悪な世界だったんだな」

最後に吐きだしたのは、憎しみの籠もった独白。

苦しみでパンパンになった静寂。ザクザクと言う暁の足音だけが、  
無音の森に染み渡る。

何故、何故……。

そんな言葉が頭を駆け巡る。

私の疑問は一つだけ、たった一つだけ解らない事がある。

『アキラさん。貴方は如何して……』

ならば如何して、貴方はそんなに悲しそうな貌をしているのです  
か。

「家族」それは美しき絆。

「家族」それは醜惡な運命。

「家族」それはきつと、醜くも愛しき、愛憎の狂想曲。  
カプリッチオ

## 精霊幕間1・家族、それは大切な宝物（後書き）

なんだろう、暗い、暗い、暗すぎる！！

と言う事で次回からもつとファンタジーしたいなー。（；ーー）  
そんな作者の独り言。

自分の作品が面白いのかどうか、出来れば知りたいと思いますの  
で、完結もしていない作品に評価なんて……

などと感じるかもしれませんが、出来れば評価や感想をお願いします。  
ます。

またかよ。 って感じですね（ーー；）

批評でも、誤字報告でも、足跡を残して下さると、私はとても喜  
びますので、執筆速度が上がります。

ですので足跡と言う名の潤滑油を私に一滴お願いします>（

ー）<



## Ep14：発見、入手、魔光石

あの盗賊との戦闘から一時間ほど進んだ所。空はもう、赤く染まり始めている。

その場所で、俺は大量の魔物達を殲滅<sup>せんめつ</sup>していた。

「クソツ……. どんだけいんだよ！ キリがねえ！！」

手にした大剣で、四方八方から襲いかかってくる獣の姿をした魔物<sup>モンスター</sup>。魔獣達を片っ端からたたつ切る。

それでも、切っても切っても何処からかわいてくる魔獣達に、正直な所俺は疲弊していた。

『焦らないでください、アキラさん。私がこの原因を探ります』

指輪から顕現し、飛んでいくリン。

リン達精霊から見てもこの状況はオカシらしく、彼女は自身の身体を霊体に変化させて周囲を探し出す。当然のように、その姿は半透明だ。

ちなみにサラは俺の受けきれない攻撃を、外套の中から防いでくれている。

無論、彼女の得意な火焰魔術でだ。俺は魔術に関する知識は少ないが、彼女達はそれが豊富だ。その知識と個体として持っている能力を使い、彼女達は俺の魔力を喰う事で上級の魔術をホイホイ使えるようになるらしい。

魔力だけは魔王か勇者並。とは彼女達二人の言だ。

俺はそのお二方のどっちかと渡り合う可能性があるのだから、あ

って損はないだろう。まあ今の所は、宝の持ち腐れなんだが。

「吹き飛ばー!!」

叫び、俺は手に持つ大剣を横薙ぎに大きく払う。

この手に持つ大剣は、世に言う所の超重武器だ。そう呼ばれる武器はこの世界に数多くあるが、その武器には必ず一つの共通点がある。

そう、バカぢから金剛力のスキルでもない限り、攻撃の軌道が制限される事だ。

制限された軌道とは大きく分けて二つ。上方からの叩き落たたとしか、もしくは薙ぎ払い。その二つが超重武器の攻撃動作だ。

それ故に、基本的に一定以上の重さを持つ武器は多対一の戦闘には使えない。

それが一般常識。

しかし此処は、常識と言う手錠を外された自由の場所。永久とわに寝むる神の夢。

前方、後方、左右に上下。魔獣ケモノは何処からでもやってくる。こちらの都合など全く意に介さずに。

それに対してこちらだけ武器の攻撃が遅ければ直ぐに噛みつかれて喰い殺される。ならば速さを上げて、魔獣ケモノ達の攻撃に追い付けばいい。

とはアイリさんの言である。

これを言いきった時のあの時の事は、今でも鮮明に蘇る。

共に稽古を付けてもらっている兵たちの断末魔が聞こえる中、彼女は喜悦に歪んだ表情をしていた。

口元はネジ曲がり、冷徹な視線でこの身を射ぬくあの顔はまさに、恐怖と言う言葉を具現化したものに思えた。

考えていると、段々嫌になってきた。これはもう考えない事にしよう。

気付くと、周囲の魔獣は粗方あらかた一掃し終えて、色のついた半透明な石ころがゴロゴロと足元に転がっている。

色は赤、青、緑、銅色と、基本的に四つの色をしている。一つ二つ黒か白の石が混じっているが、あの色は如何言う意味を持つのだろうか。大きさもまばらだし濁っている石もある。

こんな経験は今まで無かったから、如何していいのが良く分からない。

『主、何時ぞや教えたであろう。それは魔光石プリズム、各属性ごとの魔力を含んだ石じゃ。専用の換金所もあるし、その含まれた魔力に方向性を持たせて放出すれば、特殊な魔術として扱う事も出来る。

更にそれに適性のある人間ならば、魔光石と融合して新たな魔術や特殊な能力が発現する事もあるんじゃないよ。

特殊な能力は、まあ主は持っているし意味はないかも知れんの。あと、個人の成長の上限を底上げすると言う事も聞いたことがあるの。

これが前われ吾らが主に教えた事じゃよ』

「そうだったか、忘れてた。ありがとな、サラ」

そう、これは魔光石。

俺はサラとリンに教えては貰ってあったが、今までギルドで討伐系の依頼は受けていないから見た事がなかったため、それが何なのか解らなかったのだ。

「それじゃ、移せ、」

一つの言霊に反応し、俺の身体から漆黒の炎が滲みだす。

それは、リンに教えてもらった唯一の中位の空間魔術にして「獄焰」との合わせ技。広範囲に獄焰を放ち、それに触れた物を任意で自らの作りだした別空間に移すと言うモノ。

名称は「黒界転移」。

ギルドで受けた依頼で使っていて知ったのだが、この黒焰は俺が燃やそうと思わなければ火としてだけではなく、俺のもう一つの手足として使用可能な程になるらしい。

感覚神経と言うモノが有る訳ではないのだが、それでもそれが触れている物とその形状などが瞬時に理解できるようになっていた。

そして、焼き払おうと思えば何であろうとも燃やしつくすことが可能だと言う事も解った。

その黒焰の持つ特性から、広域に放った感覚から魔光石のみを感じ取り自己の持つ別空間に淡々と移していく。

すると、

「何だ？」

自身から斜め右前方二十メートル程に、人間らしきものを感知した。

「ぎゃああああ！！」

感知したその瞬間に、少年の声らしきものが、夕刻になるかと言う森の中に木霊した。



## Ep14：発見、入手、魔光石（後書き）

お久しぶりです。

一週間以内には更新が出来て良かったです。（\*^|^\*）

それと、今回アクセス数などを確認して見た所、PVは18,000アクセス。ユニークは3,000人を突破していました。

読者の方々、毎度ありがとうございます。>（|^|^）<

これに応える為にも、これからも頑張ります（\*^|^\*）

ではでは、またの機会に。ノシ

## Ep15：鍛冶師アゲニ、大魔女キリア

ノエリアの鍛冶場から、師匠から言われて薪を取りに来たらどこから戦闘を行う音が聞こえてきた。

鉄で生き物を打ちつける鈍い音、獣の咆哮、消滅する魔物。モンスター

本来この辺りには魔物は出現しない筈なのだが、今は大量の魔物の気配がする。モンスター

こう言った時は、気配を消してその戦闘をやり過ぐすんだと師匠から聞いている。だから草木のなかに潜んでいたら、何か半透明の小さなものが俺の前に来た時は驚いた。

『貴方は、如何して此处ココに？』

いぶかしげな声で、俺に話しかけてくる半透明な何か。

「いやいや、その前にアンタは何だ？」

言葉を発する半透明な物体、師匠にもこんなモノの存在は一度も教えられていない。

世界には、まだまだ俺の知らない物が有ると思うと、少しだけ好奇心が芽生えてきてしまう。

『えっと、私は精霊のリンです。使役はされていますけど』

少し困ったように、俺に自分の事を語る半透明の光る光球型精霊、リンさん。

「精霊！？ 精霊ってそんな姿なの！？ スッゲー、俺初めて見た！」

少々興奮して、言葉を発する。

だって精霊だぜ？ 人間嫌いで普通俺らの前に姿を現さない精霊だぜ！？

そんなの興奮しない奴いたら可笑しくね！？

『それで、貴方は誰で、如何して此処に？ 今はノエリアにアイリス王女が向かっているため、外出は控える事になっている筈ですが……』

え、そうだったっけ？

俺師匠から何も言われて無いんだけど。

「俺はノエリアの鍛冶師イグニスの一弟子、アグニだ。今俺はあの破天荒師匠から薪を拾ってくるよう言いつかっていてな、その為にここに来たんだ。お姫様の事は良く知らねえ。師匠からは何にも言われてねえし……」

そう、俺の師匠は破天荒だ。何でも必ず我を通すし、自分が言った事を俺が出来ないと、きつっーいお仕置きが待っている。

だから早いとこ薪を集めないといけないんだが……

『そうですか。あの名工、イグニスのお弟子さん。解りました、時間を取らせてしまつて済みません。私はやる事があるので、これでサヨナラです。では』

そう言つてリンと名のつた精霊は俺の前から飛び立っていった。俺はその後ろ姿(?)を見送ると、一気に冷めてきた頭で一つ、



「あ、薪集めしなきゃ……」

この後のお仕置きが、少しでも和らいでくれる事を祈るのだった。

数分すると、アグニはもう薪を集め終わっていた。  
だが、アグニはまだその森の中に居る。

何故か。

そんな事は簡単だ。アグニの前方には、光球型の精霊、リンを携えた赤い男の姿が有った。

「で、君がアグニ？ 俺と殆ど歳変わんねえんだな」

首をかしげ、質問をする緋色の外套を着た男 アキラ 暁。

その瞳は左右で違い、漆黒と真紅のオッドアイである。そして頭髪は瞳の漆黒を更に深い闇で塗りなおした様な真黒な髪が、短いながらも所々はねている。

背丈は170に届くか届かないか程度。平均的か、もしくはこの年代にしては小さい方だ。

アキラから感じる気配はまさしくヒトの気配であるのに、アグニはここを動けないほどに緊張している。

そう、まるで蛇に睨まれた蛙のように。

「あ……、ああ。俺がアグニだ。それで、アンタはナンなんだ？」

率直な質問。

圧倒的な力の差が有り、相手に知性が有るのなら話し合いは悪い手では無い。

いつもは喧嘩っ早いアグニなのだが、今回は先の黒焰を見て、そして触れて、完全に戦意を喪失している。

物体を瞬時に移動させたり、焼かずに触覚と同じ働きをする炎など聞いた事もない。

それにアグニの中の本能が、アキラに逆らうのは危険だと告げている。

アグニの質問に、アキラはこう答えた。

「異世界人。ここの言い方で言うなら異那人わたりびとかな、そこで質問なんだがな。アグニはここに薪を取りに来てて、直ぐにでも街に帰りたい訳だろう？」

異那人、それはこの国では大きな意味を持つ存在。前回の魔王と勇者の戦いで勇者は異那人だったと聞くし、太古の昔から魔王はほとんどがそうだったと聞く。

この国においてその異名を持つ者が重宝されるのにはそんな理由があったりするのだが、今はそんな事は関係ない。

最後のアキラからの質問にアグニは「ああ」と、小さく返事をする。

肯定の意味を表す返事を聞いたアキラは、ほんの少しだけ表情を和らげて、こんな事を言った。

「ならさ、俺を案内してくんねえか？ 俺途中で迷っちまってよ。それに見たところ、アグニは無傷じゃねえか。それなら危険度の少ないそっちから行かせてもらった方が俺としても嬉しいし、薪は俺がまとめて持っていけばアグニも楽だろ？」

それはアグニにとっても、とてもいい案に思えた。

「ああ、良いぜ。俺も両手に薪抱えてたら帰るの遅くなるしな」

そう答えた時、アグニの身体は自然に薪を地面において、アキラの方に手を差し伸べていた。

するとアキラも同じように手を伸ばし、アグニの手を力強く、がつしりと握りしめる。

「じゃ、よろしくな。これから、俺らは仲間だ」

アキラの放つ言葉に、アグニは「あつ応っ！」と小気味良い返事をする。

その約束が、これから起こる時代の奔流に大きな影響を与える事を、全く知らずに。

魔術都市ノエリア、その多くの部分を家に持つ大魔女キリアの豪邸。その客間は王宮の客間にも勝るとも劣らない豪華さと不思議さを持っている。所々に置かれている調度品には、規則性が無いよ

うに見える。だが、それらは一つ一つ、そして全てにおいて意味を持っている。

私、アイリス大ニ王女の座るこのソファも、その前に悠然とたたずむ小柄な少女の周囲におかれた小さな人形達も、それぞれに、そして全体的に意味をもつものなのだ。

「で、ニーニャよ。今度の客人は勇ましきものであったか？」

少女は私をニーニャと呼び、質問をする。

ニーニャとは幼少期の私の名だ。この国では13の誕生日に幼名を棄て、新たに一人の人間としての名を名乗る事を許される。

故に通常の者が今の私を呼ぶ時は、アイリス様。などの堅苦しい呼び方にならなければならず、初めは私もこの呼び名は恥ずかしかったため注意をしたのだが、全く取り合ってはくれなかった。

「いえ、キリア殿。彼からは魔王の資格は感じられなかったのですが、勇者の資格も読み取ることが出来ませんでした。これは、どう言う事なのですか？」

からかうような眼で、私を見続ける小柄な少女。その名はキリア。そう、少女の容姿をしたこの者こそが、大魔女キリアなのだ。

「言っておくが、1000年を生きたとて解らぬ事は有る。

ニーニャよ、今度はもしかすれば、もしかするのやも知れぬぞ」

一言目の言葉は、そう言う事なのだろう。今までの異那人<sup>わたりびと</sup>は、どちらかと言えば勇者の資格を持ち、そして魔王討伐を行っている物が多数だった。

全く何もしない者が居なかった訳ではないが、それにしては、あ

の成長速度は異常だ。

何か裏があるようにしか思えない。

「そう、ですか」

今回のノエリアへの来訪、それは親友の事を心配に思ってたの事と言う事にしてあるが、本題はこちらだ。心配でない訳ではないが、優先順位としてはこちらが上なのだ。

そう、今度の異那人　　ヒルガミ　アキラが、勇者に成りうるのか、それともこの国、そしてこの世界を乱す魔王に成ってしまうのか。

それを大魔女であり、10世紀を生きる賢者であるキリアに答えてもらう事で、今後の彼に対する対処を考える事。

「彼の者ならば、きっとこの世の、壊れに壊れた御伽噺をも、変えてくれるのではないだろうかの」

どこか遠くを眺めるように、キリアは呟く。

キリアの回答により、得られて事はただ一つ。解らないと言う事。危険因子として取る事も出来るが、最高の客人であるとも言える。この状況を私の父ドラグノリア王に話したのならば、あの賢き王の事だ、彼を危険因子として取り、内密に処分してしまうのではないだろうか。

そんな危機感が、私を支配する。

「ならば、彼は大陸に避難させましょう」

真剣な眼差しで、私はキリアを見つめる。

「そうさの。では、久々に大魔方阵でも行使するかの」

やはり遠くを見つめたまま、キリアは感じ取れぬほどに巨大な魔力を、やすやすと行使する。

魔術都市ノエリアに、緩やかな風が、吹き出した。

## Ep16：鍛冶師アグニが目指すのは

「で、何でこうなってるの？」

白髪蒼眼の少年、アグニは半分呆れ気味に、そう呟いた。

アグニの目前には、この森の主と思わしき真紅の大蛇　　フ  
レイムナーガと、それを漆黒の炎で焼き払う、これまた真紅の外套  
を纏った少年　　アキラが対峙していた。  
対峙していたと言っても、その時間は数瞬。

突如アグニとアキラを囲むようにして威嚇を始めたフレイムナー  
ガに、アキラが一言だけ言葉を発したかと思うと、その極大なる全  
長十メートルは有るかと言う巨体を黒い炎で包み込んだのだ。

自身が火属性であるにも関わらず、焼かれている事が理解できな  
いのか、フレイムナーガは断末魔の叫びを上げる事も出来ずに灰と  
なった。

本来あの魔獣は火の海の中でさえも快適に過ごすと言うが、それ  
を焼き払うとはどういう事か。そしてそれについて先程身を包まれて  
いた事に、アグニは恐怖を覚えた。

フレイムナーガだった灰の中から、アキラは魔光石を取りだすと、  
アグニに向かって一言。

「大丈夫だったか？」

のんきにも、笑顔で問いかける。

「肉体的には、な」

頬の肉をびくびくと引きつらせながらも、なんとか答えたアグニだった。

最後の休憩だとアグニが言い、目についた大木に二人して腰を掛ける。

フウ、と一息ついてから俺

ヒルガミ アキラ  
昼神 暁に問いかけるアグニ。

「なあ、その大剣、クレイモア俺に見してくれよ」

「ん？ ほい」

見習いとはいえ鍛冶師だからか、俺の背負う大剣に興味を示すアグニ。その瞳はキラキラと輝いている。

それに対して俺はこの大剣は、筋持久力の修行として使っているだけだ。特に執着もない、でもまあ愛着は有るんだろうか。

そんな事を考えつつ俺は、背負った大剣を抜き放ち、直ぐその地面に突き刺した。

ヒュン、と言う音を立ててアグニの頬を俺の大剣が掠める。

「ウオオオツ！ おまつ、危、あぶアップネエエ！ 切れたらどうすんだよ！

てか、頬切れてるし！ 後で覚えて口ボオオ……！！」



叫び続けるアグニに目もくれずに、その口を強制的に塞いで治癒の魔術をそのままかける。

「休憩の時くらいは静かにしてくれよ。気が休まらねえ」

コイツに傷がついちゃいけねえ、それ故に俺は常に極薄の獄焔を全方位に放出している。ある種のクモの巣のようなモノだ。

これに魔的なモノが引つ掛ければ直ぐに焼き尽くして、魔光石を回収するのもし疲れぬ。

「ゲホッ、ゴホッ。悪かった、じゃあ、見せてもらおう」

塞いでいた手を取ると、俺は感覚を黒焔へと移す。

今の所魔的なモノの気配はしない。むしろ前方からは清らかな気配が、ん？

街、か？

意識を前方の街らしき物に移す。極薄の黒焔は、霧状に成るまで薄く、薄くしていく。

すると、

「ッー!!」

大きな壁に当たったかと思うと、脳に激しい痛みが駆け抜けた。

意識は、完全にここに帰ってきた。ヤバイ、これはきっと………気付かれた。

「アグニー!!」

大きく叫びを上げる。

「な、なんだよ……」

驚きに身を竦めるアグニ。

こちらを見ているのだろうが、俺は振り返りもせず立ちあがる。

「それ、お前にやるよ」

そう言つて漆黒の炎で身を包み、記憶の中に有るギルドの依頼で行った事のある辺境の村を思い浮かべる。

「ちょッ                   」！

アグニの焦つたような声が聞こえた気はしたが、聞かなかった事にしよう。

門の魔術<sup>ゲート</sup>で、俺はその場から逃げだした。

一言だけ言い残して、黒焔に身を包まれていくアキラ。

「ちょっと待てよ！    どうしたんだいきなり！！」

焦り叫ぶ俺の声は、虚しく森に木霊する。

木の周りを歩いてみても、さっきまで暁の居たそこには何の痕跡もない。

視界の端に映つた漆黒の美しき焔は、きつともっと大きな力が有

るのだろう。今まで見た炎の中で、あそこまで俺に畏怖させた炎は他になかった。

「……どうすりゃいいんだよ、相棒」

仲間と呼ばれて、俺は嬉しかった。

一緒に休んで面白い話もしたし、アイツの話は俺を夢中にしてくれた。

相棒と呼ぶ事も、許してくれた。  
もっと多くの時間、共に笑っていられると思っていた。

一息、溜め息を吐いて歩き出す。

右手にはアキラの使っていた大剣を持つ。刃こぼればかりで、切れるようには到底見えない。

「バカかよ……」

それを使って魔獣をさんざん切り捨てていた姿が、未だに瞼に焼きついていてる。

視界が、緩やかに滲んでいく。

「ホント、バカかよ」

柄の布をめくれば「いつか返しに来い」と、無茶な願いが焼きつけられていた。

「バカはデメエだ。どれだけ薪持ってきてんだ！俺は両手に持てるだけと言った筈だろう！！」

「え？」

聞きなれた偏屈な師匠の怒声に、俺は顔を上げる。  
するとそこには、うず高く積まれた薪の山。

「アイツ、絶対見つけてぶん殴ってやる。」

まずは、この町一番の鍛冶師になる。そんでもって、この剣強くしてアイツの前に現れてやる」

涙にぬれた顔をぬぐい、俺は工房に走りだす。

力強い独り言は、誰に聞かれるでもなく溶けていく。

アグニの見た薪の山の端には、小さく。そう、本当に小さく「俺は旅に出る。お前はどする？」と、見習いの俺に対して、とんだ皮肉が書かれていた。

## Ep17：边境の村ミノリス（前書き）

気付けば、書いている自分が居る（；――）  
テスト前に何やってんだか……

## Ep17：辺境の村ミノリス

降り立ったのは、辺境の村　　ミリスの浜辺。

ここは、漁業が主収入の村だ。貿易は他の海沿いの街に制限されており、この村は基本的に平和な良い村なのだ。行商人は多くはないがそれなりに来るし、圧制を敷くような悪い貴族が統治している訳でもない。治めているのは人の良い初老の好々爺のじい様。俺としてはとても好ましい村だ。

村人の男は大抵が筋骨隆々と言う、男としては出来れば長居をしない場所でも有る。

何故そんな場所を選んだかと言うと、ここが一番あの魔術都市から遠く、そして見つかり難いと判断したからだ。

逃げた理由は数多くあるが、大きく分けて二つある。

一つは、先程の魔術都市への不当な探索。これはアイリさんから重罪になると聞いている。

あのタイプの結界術は、逆探のような機能もあるのだ。あの距離ならば、数分とせず大魔女キリアとやらの弟子やら護衛の兵士やらの者たちが駆け付けるだろう。それならば見付かる前に逃げ出し、俺はあの盗賊達との戦闘で死んだ事にしてしまえば良いだろう。

俺が重罪人になって、苦勞するのはアイリさんだ。

彼女は良くしてくれたし（稽古はキツかった）、俺としては彼女に酷い迷惑はかけたくない。

二つ目は、最近王宮で起きている派閥間の抗争らしきものだ。何故だか現王とアイリさんと、もう一人。第一王子様を頂点にす

る王侯派に、自警団や騎士団をまとめて市民の人気を取っている騎士団派。あと何故か解らんが共同で行動する男神官を頂点にする工口学派……、ん？ 最後才カシイな。

まあ良い。そんな事が有り、俺こと昼神暁は王侯派の強大な戦力になりうると言う事で、最近事故に見せかけた攻撃行為が増えてきていたし、逃げた方が良さそうだったのだ。

アイリさんや、第一王子の方が単体で小国くらいなら制圧できる戦力を持っていると言うのに、莫迦らしい。きつと戦力になりきる前に潰そうつてのが魂胆だったんだろうが、俺はそんなのはゴメンだ。だから逃げた。

「ああゝあ、格好ワリイな」

額に手を当てて、悪態を吐く。頭をぐしゃぐしゃとかきながら、行うのは自傷行為。

本当に格好悪い、俺はアイリさんに迷惑をかけないため、と言う建前により、王宮から逃げたいと言う本音を自分に対して納得できるように提示していたのだ。

一度逃げたからにはもう戻れはしない。それならば、次回は（それが有るかは解らないが）絶対に逃げないようにしよう。今の俺を縛りつける鎖は、この世界には一本もないのだから。

「よし、それじゃあ」

力強く拳を作り、覚悟を決めて言葉を放つ。

「冒険だ！！」

あの王宮には、勇者と魔王の過去は有ったが、現在の所魔王が現

れたと言う情報は無い。

ここに来る前の世界の自称神が言うには、もうすぐに表れると言うことらしいが、アイツの情報はきつと掟子曲ねじまがっているだろう。そんな気がする。

多分後一、二年は出てこないはずだ。

ならば、ならばだ。

幼い頃からの夢、大冒険をする事くらい、良いのではないだろうか。

ここに来た使命を忘れようとは思わない。それに身体カラダ、精神ココロそして能力チカラも強くしていくつもりだ。それでも、男が夢を追うくらい良いではないか。

心には覚悟を、身体には決意を刻み、歩み出そう。

これからは、何も守る物の無い、真正正銘の冒険だ。

その為には、

「まずは路銀を手に入れなきゃな」

いつの世も、そして世界も。先立つものはお金である。

にぎやかに、けれども五月蠅くない程度に耳に伝わってくる市場の喧噪。

値切るおばちゃん、断る親父、そこを何とか、持ってけドロボー。色々な声が聞こえてくるなか、アキラは魔光石の換金所となる役所



を目指していた。

この辺境の村にどこから人が来る事は稀だ。理由はそれだけではないが、アキラに突き刺さるような視線が四方から浴びせられている。

少しだけ居心地が悪い。そう思っていると、後方から声がかけられた。

「あの。あのつ、冒険者ですか？」  
「ん？ そうだけど……」

振り返り、簡素に応える。アキラは知らない人としやべるのは余り得意ではない。

その声は何処か幼げで、後方からと言うよりも、後ろではあるが斜め下側から発せられていた。

「あつあのつ、これ。これ依頼料です。おね、お姉ちゃんを、助けて下さい……！」

その幼い声の主は、やはり幼かった。

顔は目深にかぶった、ローブに付いたフードで良く見えないが、背丈と声音から判断するに四、五歳の少年だろう。

その少年が手を高々と上げ、「依頼」を頼みたいと言っている。

見ると、その服はズタボロ。見上げる気配には恐怖がにじみ出ている。

きつと今掲げているのは、この少年にかき集められる最高の依頼料、そしてこのような事を何度も繰り返してきたのだろう。掲げた手はフルフルと振るえ、アキラの気配を探っている。

受けてしまおうか。

そんな思いが脳裏をよぎる。それはきっと、トラブルのもと。引いてはならない紐の先。

安請け合いはしてはしけない。

本来、そんな事をしてもアキラには何の利点もない。

「解った、俺が助ける」

それでも、言ってしまった。

最近は反射的に行っている気もするのだが、アキラは思うのだ。

断つたりすれば後味が悪い。ならば、受けて苦労した方が何倍もましだ。

アキラの生き方は、なんとも不器用で、小汚くも正しきものだ。

少年はアキラの答えを聞き取ると、今まで見えなかったその顔を、見える所まで上げた。

ボロボロのロープの下では、透き通った空色の瞳が、アキラを見つめていた。

「本当、ですか？」

頭髪は確認できない。けれどもその瞳は、これまでにないほどに未来を見つめている。

弱弱しくも、確かなる命の息吹。この少年は、ここでどのくらい頑張ったのだろう。それは解らない。解らないが、その行動の結果を作り上げる事くらいは出来る。

然りと、少年の手に乗ったわずかな依頼料を受け取ると、アキラは一言。

「本当だよ」

命をかけた願いには、それ相応の結末を。

少年の透き通った瞳を、アキラは愚かながらも真っ直ぐな視線で見つめ返した。

少しの間、村を外に向けて歩くと、隔離されるようにしてポツリと建てられた小さな小屋が見えてきた。

壁は木製、周囲には小さな田畑が一つ二つと有るばかり。

それは見ただけで、家主が金品を一切持っていない事がうかがえる。

「ここが家です。でも、何で家なんか？」

ここに来るまでに話ただけで解るほどに、この子は聡明な子だ。その話によると、この子の家は三人家族。母は病弱で働くにしても内職くらいしかできず、父はもう数年前に他界している。実質的な働き手は姉と自分の二人だけ。そして自分もそこまでの仕事はする事が出来ない。

そこでこの子のお姉さんは、苦しくなった家計を支える為に小さなながらもこの村に有るギルドの依頼クエストを行い、この家の家計を支えていたらしい。

今回は受けられるクエストのランクを上げる為に受ける、ギルドの特別なクエストを受けたのだが、そのクエストが行われている中、

通常ではありえない程に強い魔物モンスターが現れた。

そのせいでこの子のお姉さんは重傷を負い、ギリギリで逃げているがいつまた襲われるかも解らない状況に居ると言う事が解っている。

その時に理由は説明をしてある。

その為発せられた言葉には、確認の色が強い。

「まず、君のお姉さんの気配、顔形などを知るため。それと、今身につけている物の確認がしたいんだ」

何を悠長なとも言つようにして、最初はこの子も食ってかかったが、優しく説明をすると理解したようで直ぐに案内をしてくれた。

今のアキラならば見つけた生物の持つ特有の熱波動、むしろ生命波動イオウエーブとも言つべきものが感じ取れるようになってる。だがそれにはその対象の身につけていた物や暮らしていた場所から、それを覚えておく必要がある。ここに来たのはそのためだ。

そして今身につけている物の確認だが、それは同じようなモノが家に有ると言っていたため、それを見ておこうと思つている。

「じゃあ、確認してください」

ローブを着たまま、アキラには警戒して素顔を見せようとしない。どんな事情があるのかは解らないが、依頼は受けた。

「ああ、出来る事は全部やつとこつ」

いつ倒壊してもおかしくはない無いだろうと言う程にボロボロな家に入り、誰にともなくアキラは呟く。

この子に、自分と同じ思いはさせまい、と。

## Ep18：辺境の村のお姉さん【VS妖】（前書き）

フッフ、色々間違っている気はしますが、投稿（\*^ー^\*）  
テスト？ 何それ、おいしいの？

な感じの今日この頃。

まあ、そんな私は置いて、バトルバトルなEP18をどうぞ  
（^ー^）

## Ep18：辺境の村のお姉さん【VS妖】

ミノリスの村には、一般人は立ち入り禁止の危険区域が三つある。一つは海辺の洞窟。もう一つは古に造られたと言う小さな幽霊屋敷。最後の一つは、死碑しひの森と呼ばれるこの森だ。

一步踏み入れば其処はもう魔獣ケモノの巣。

魔物と魔獣との区別は、基本的にはそこにずっと住んでいるのが魔獣。魔力さえあればどこにでも出現するのが魔物、と言ったところだ。

ここはそこに住みつく魔獣の巣なのだ。特に居るのは猪や鹿などの獣、その中でも水や土の属性を纏ったもの達が多い、魔獣の巣としては比較的レベルの低い物でありこのものになれば、致命傷になるような傷を負わせることのできる存在は居ない筈だった。

そう、  
筈だったのだ。

「何で、何であんな化け物が……」

息も絶え絶えに、一人の女性が木の上で深く刻まれた傷の治療を行っている。

その傷は明らかに、刃物で切り裂かれる事によりできた裂傷。右肩から左わき腹にかけて大きく切り裂かれているその状態は、むしろ生きている事の方が不思議な程だ。

「あの子の、あの子の為にも私は死ねないんだ」

女性、ミリイ・ミエーチェは頑なに死を拒み、命からがら逃げて

きた。突然現れた獣と武器の混じり合ったような化け物から。  
今の所ミリイはこの小高い木の上で身体を治してはいるが、いつあの化け物が血の匂いを嗅ぎつけてやってくるかも解らない今の状況では、精神的にも肉体的にも殆ど休めているとは言えない。  
要するに、彼女は今極限状態なのだ。

「ギルドへの連絡はしたし。後は、アイツから逃げ切れれば……」

極限状態だからとはいえ、思考が止まる訳ではない。と言うよりもむしろ、今止める訳にはいかないのだ。

止めれば確実に、次の瞬間ミリイの息の根が止まる。

そう、思考して思考して、生き延びる術を探さなくては。

ヒュン、ヒュンヒュンヒュン

風の、流れる音がして、

「嘘……！！ 何でアイツが」

彼女の意識は断裂した。

空間転移で、アキラは死碑の森へと降り立った。  
身につけている物は未だ変わらず、緋色の外套のまま。

「なんだ、この感覚」



空間が丸ごと自分を押し潰そうとしているかのような、異常な圧力がアキラにかかる。

それは以前にも浴びた事のあるもの。剣気とも、魔力とも違う禍々しく澱んだ怨念。

アキラはその感覚に眉を<sup>ひそ</sup>顰めて、何かに気付いたように呟いた。

「そうか、これはアイツらの気配だ。あの時は必死だったから解らなかつたんだ」

そう、それは憎きモノの気配。

今を生きる人間としての、嫌悪感。

悪しきそれへの憎悪が、ふつふつとわき上がる。

「俺が、刈り取ってやるよ」

言つて、アキラは索敵の為に煙状の黒焰を周囲にまき散らす。

悪しきソレの気配は異常、数個の魔獣の気配を無視して、憎むべき物を探し出す。

アキラの脳裏からは、もう既にあの子供の姉の事など消え失せている。

何処までも、何処までも手を伸ばす。

己が獲物を探し出すまで、嗅覚を、触覚を、聴覚を、視覚を、五つの感覚の内の四つを動員した最高の網で、求める。

その姿は、どちらがケモノか解らない程に、野生の本能が剥き出しになっている。

「そこか」

少し遠いが、それくらいは空間転移でどうにかなる。

瞬時に術式を起動して、標的に己が銃口を向けて、撃鉄を上げる。

吹きすさぶ突風、鎌の手を持つ人間と同じ大きさの化け物は、唯一この森に侵入してきた柔らかい肉塊を生きたまま捕食する筈だった。

突如出現した緋色の硬い肉塊に邪魔されなければ。

緋色のそれに、鎌の化け物は慨視感を感じる。見た、と言うよりは知っていると云った方が適切な程にその記憶はあいまいになっているのだが。

「よお、元氣かクソ野郎。そんでもって、燃え尽きる」

吐き出されるは、汚い言葉。その言葉が孕むのは、完全な敵意。

圧倒的な憎悪を以って、その男 アキラは言霊を発した。

その化け物には理解する事は不可能だが、感覚的に察知する事くらいは出来る。

言霊は悪意を持って、鎌の化け物の身を焼く黒い焰に移り替わる。

『G I A A A ! ! !』

苦しみに叫ぶ獣は、瞬時に身体全体に風を纏ってその焰をかき消そうとする。

本来ならば、それにより火は消える。だが、今回は消え無かった。アキラはそんな事は関係ないとばかりに、言霊を飛ばし続ける。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ！！！」

燃え尽きる      「！！」

彼はその力を理解しない、重ね掛けした言霊により、激しい頭痛にみまわれながらも更に言葉を紡ぎ続ける。

優しげなその顔を、憤怒の想いに染め上げて。

「燃え尽きろ、カマイタチ鎌鼬があああ！！」

彼が焼き払うのは、日本妖怪鎌鼬。

本来の力である風の刃を使う事も出来ず、彼の獣は漆黒の焰に喰い尽くされる。

まるでアキラがその身を喰いちぎられた時の焼き増しをするようにして、存在が消し去られていく。そこに居ると言う事実が、生きていると言う現実が、絶対的な死の権化たる辻のアヤカシが、憤怒の焰にかき消されていく。

アキラの放つ怒声により、切り裂かれた木とともに地に伏していたミリイは目を覚ました。

朦朧とするその瞳は、燃え上がる黒焰を確かにとらえた。

「……綺麗」

気を失っていた事も忘れるほどに、その焰は清らかだった。

漆黒の焰が、悪しき塊を焼き祓う。

絶叫の後、未だ炎熱の手を緩めない少年      アキラにミリイ

は安心を憶えた。

轟々と燃え盛る黒焰は、やがてその火の手を緩めていく。  
少しづつ消えていく美しき火に、ミリイは目を奪われる。

本来、黒とは禍々しきものであると言うのに、あの焰はどこか温

かい気配がする。

全身が包まれていく感覚。

それはまさに、母に抱かれていたあの幼き頃のような心地良さ。

「何、アレ……」

消えゆく漆黒の中に、何かが見える。

アキラはそれに近づき、柄らしき物に手を添える。

ピローン

それをアキラが握った瞬間に、周囲に小さな音がする。

場違いな音に、ミリイは疑問を浮かべるが、それは些細な事。

「デスサイズ処刑鎌……！！」

アキラの持つ何かの形が、日光により露わになる。

ミリイの目に、大地より引き抜かれた強大な翡翠色の大鎌が、しっかりと映った。

## Ep19：辺境の村の家族【絆】（前書き）

考えてみると、私は戦闘描写が苦手なようです。  
それでもって普通の描写も苦手とくる。

あ、こう考えると私って才能ないっぽいですね（汗  
ふう、精進精進。

これからも頑張っていきたいと思いますので、ここまで読んで下さった皆様、気が向いたらアドバイス等、宜しく願います。>

――<

## Ep19：辺境の村の家族【絆】

「ねえ、アキラ。貴方って何者なのよ」

いぶかしげな声で、ミリイはアキラに問いかける。  
その問いに対してアキラは、おどけた調子で気楽に答える。

「俺？ 俺は冒険者さ。ただのしがない冒険者、それが俺」

喜々とした声で言うアキラ。その顔にはべったりと笑い顔を張り付けている。

対するミリイは、ピンク色の肩で切り揃えられた髪に、切れ長の目、瑠璃色の宝石のような瞳。

胸は案外と大きく、スタイルは平均以上には良いだろう。その全身を使い、アキラに置いていかれまいと頑張っている。

そんなミリイに対して、アキラはいつも着ている緋色の外套を着せて、ずんずんと森の出口へと進んでいく。

外套を着せている理由は簡単、先程の鎌鼬カマイタチの所為でミリイの服がスタボロになっっているからだ。

それに関してサラは「主あるじ、それには吾も宿われっているのですから、もう少し躊躇ちゅうちうを……」と悲しそうに言っていたのだが、それはまた別の話である。

「それじゃ答えになってないわ、何で貴方はあの鎌の化け物を倒せたの？ それに、あの黒い焰はなんだったの？」

ミリイの抱える疑問は尽きそうにない。

少々疲れている二人であるが、両者とももう魔力の残量はそれほど多くないため、門の魔術で一氣に移動する事も出来ずに歩いている。

「気のせいだ気のせい、俺黒い焰なんか知らねえし。」

それに鎌の化け物ってなんだ？」

ここへきて、しらを切り始めるアキラ。

なかった事にしようとしている物は完璧にミリイに見られているため、あまり意味はないのだがそれでもあがこうとしている。

「貴方嘘が下手なのね。私は貴方が黒い焰の中から大きな鎌を取りだしてどこかへ飛ばしたのを見てるのよ？」

前を向いたままで顔を見る事は出来ないが、アキラはきっと明後日の方向を向いて答えているだろう。

それに対してミリイは少しづつアキラを追い詰めようと奮闘している。

「それもきつと幻覚だ。そんなもん俺知らねえし」

ついには口笛を吹き始めるアキラ。発せられる声は完全に棒読みである。

ミリイは、少し追い詰めすぎてしまったかしら？ などと思っている。

「あれ、もうすぐ村じゃないかしら」

ミリイの一言がアキラの耳に届く時、その声は小さな子の大きな

歓声によって、打ち消された。

「おネエちゃん!!」

「チースティ!!」

ミリイは、その小さな子　　チースティに向けて駆けだした。  
その顔は、アキラとの道中で見せていた顔からは考えられないほどに嬉しそうだ。

涙を流し、抱き合う二人。

完全に傍観者と化したアキラ。

「美しい家族愛だな。羨ましいこった」

能面のように凍りついた顔で呟いた。

瞬間、アキラの右と左に白と赤の光球が現れる。今回はアキラの魔力もないため、実体となる事が難しいようだ。

『アキラさん』

『あゐじ主よ』

二つの光球はリンとサラ。

ほぼ同時に発せられた最初の呼びかけに、アキラは虚ろに「何だ?」と反応する。

『私達が』『主の』『家族です』

声だけで読み取れるほどに、二人の気配は優しさに満ちていた。それは、感じた事の無い母の気配のように、アキラを包み込む。



「ハハッ、そうか。家族か」

手のひらで顔を押さえ、ズルズルと鼻水をすするアキラ。  
その手の下からは、大粒の雫しずくが零れていく。

アキラの言葉は、振るえていた。

その後の精霊二人。精霊の社会（仮）にて。

「リン、何故なぜそなたの方が先程セリフが多かったのじゃ。吾ももつと主を元気づけたかったのじゃぞ」

サラは少々怒り気味。

「そんなの決まっているじゃないですか。私の方が、先輩です（アキラさんとの契約的に）」

クイツと、お酒を呑むふりをして大人ぶるリン。その年齢は一歳未満。

「そ、そんなの年で言えば吾の方が……」

最後の所で言い淀むサラ。精霊であれ何であれ、女性にとってこの話題はタブーらしい。

「アハハハハッ。サラ、墓穴掘ってやんの」

本日も、この世はとても、平和です。

**Ep19：辺境の村の家族【絆】（後書き）**

どうでしょうか。

短いすねえ（；――）

どう考えても。

精進精進。

では、またの機会に。ノシ

## Ep20：断罪の鎌（前書き）

今回からは一話からの見直しも込みでやっていきますので、投稿が遅くなってしまうかもしれませんが、ご理解のほどを、お願いします。 > ( — — ) <

では、第二十話、「断罪の鎌」をどうぞ。

## Ep20：断罪の鎌

「アキラさん、我が家の為にこんなことまで。  
ありがとうございます」

ベッドの上で、心を込めて礼を言うミリイ達の母      シイル。  
辛うじて身体は起こせてはいるが、それでも気を張っているのが  
明らかな程に、彼女は衰弱している。

断続的に続く息継ぎの音により、彼女が弱っている事が聴覚から  
も解ってしまう。

「いや、こんなの当然ですよ」

手を目の前で振りながら、虚言を吐く。

アキラはこれを当然だとは思っていない。本来はこのままだこ  
で路銀を手に入れて直ぐにでもこの国から出ていきたいのだが、今  
出ていけば後味が悪い。

その為仕方なくここに居ると言っただ方がいいだろう。

「ですが、我が家の為にこんなに働いてもらっているのに」

そう、アキラは今このミリイ達の家の掃除、洗濯、炊事、ついで  
に薪割りなども行っている。

それと並行してシイルの身体を治すためのお金も集めている。

これを親切と呼ばずして、何を親切と呼ぶか。アキラは自分の性  
格を解っていないながらも、変えられない事がもどかしいらしい。作業  
中はずっと妙な顔をしている。

「いえ、その代わり一日は泊めてもらう事になっているんです。これくらいしないと」

行動の理由はそれ、良く言う一宿一飯の恩義とでも言おうか。アキラはそのようなモノを感じているらしい。

せつせと働くアキラは、床の掃除を終えて次は窓ふきを始めている。

「良いじゃないお母さん。アキラがやるって言ってるんだから、受けてやるうよ。」

それに、あの子の為だと思って、さ」

母の看病のため、部屋の中で果物の皮をを剥いているミリィ。彼女の放った最後の言葉は振るえていた。

「そうですよ。俺の事は気にせずに、いつも通り過ごして下さい」

笑顔で窓ふきを終えて、ミリィとシルの方を向くアキラ。その顔は能面などではなく、心の底からの感情を表していた。

その日の夜、アキラに与えられた部屋の中。

入口から見て右奥の端に位置した簡素なベッドのうえで、アキラはリンとサラの二人の精霊と話しこんでいる。

「なあ、サラ。今日のカマイタチってここに生息してたりする？」

いつになく真剣に、顎に手を当てうんうんと唸りながら考えてい

る様子のアキラ。

それに対してサラは、その四等身の身体をふよふよと浮かせつつ、それでも真剣に返答する。

『<sup>あるじ</sup>主、それは有りませぬ。向こうの世界に居る神が言っておったであらう？ アレはきつと主の世界から渡って来たものじゃ。

吾ら精霊の方でも、酒場などでは土地を荒らし回るものとして噂になっておったのじゃが……』

サラにの言葉が詰まるのに合わせて、リンがそれを補足する。

『サラの言う通り。あの鎌鼬<sup>カマイタチ</sup>は、確実に向こうの世界のモノです。それにあの霊格、きつとアキラさんの肉体を喰らった者の一体でしょう。彼の神は何をしているのでしょうか？』

アキラの元いた世界で、こちらに来る寸前に彼はこう言った。『あの妖怪たちは、私達がなんとかしましょう。ですから貴方は私の言った事に集中して下さい』確かにそう言った。

なんとかが何かはアキラもリンも知りはないが、確かにそう言っていたのだ。

リンの最後の言葉もうなずける。

「ホント。あの野郎帰ったらただじゃ済まさねえ」

ゴゴゴ、と後ろに黒いオーラを背負いながら拳を作るアキラ。頬はひくひくと痙攣し、怒りを露わにしている。一言でいえば怒髪<sup>ドハツテン</sup>天だ。

その顔は般若の如く。幻覚か幻影か、リンとサラの目には、アキラの額に鬼の角が生えて居るように見えた。

乾いた笑いを漏らすリン達に気付いたアキラは、一瞬で後ろのオ  
ーラを取っ払い、額の角をへし折った。

「っと、そう言えばリン。あの時手に入れた大鎌<sup>オオガマ</sup>だけど、なんかお  
かしな感覚するんだよな。調べてくんねーか？」

快活な笑みでリンに質問をするアキラは、応用魔術で作った黒焰  
に手をつっ込んで、昼に手に入れた大鎌を引き摺りだす。

その鎌の柄は風をモチーフにしたような柔らかな形。そして先端  
には、鋭利な刃物。

『アレ？ アキラさん。それ、鎌なんですよね？』

本来その横に有るべき大きな鎌の刃は、そこには存在していなか  
った。

アキラはリンのその妥当な質問に、否定を示した。

「いや、それは鎌だ。こうやって魔力を流せば……」

昼の殲滅（と言ったようがいいのだろう）の時に使い切りはした  
が、驚異的な回復力で戻った魔力を注入するアキラ。

その瞬間、先端の刃の根元。

本来、鉄で出来た刃が有るべき場所に魔力が集束し、そして。

見えない刃が現れた。

『風、じゃと……！？』

それを感じ取ったサラは、驚きの声を上げる。



一応夜であるため、その声は小さめだ。

『これは、エンシェント・ウェポン 古代武器でしょうか？

失われたはずの過去の遺産が、何故この時代に？ それにアキラさん。何故扱い方を知っているんですか？』

質問を連発するリン。

その理由は明白。魔力を元に変化を起こし強化される武器は有れど、魔力自体が攻撃の手段に変化する古代武器はもう千年以上昔に失われてしまっている。

失われた過去の遺産、その使い方をこの世界に来て一カ月も経たない少年が知っている。移動をすれば世界自体がその地の常識や知識を教えてくれる彼女ら精霊とは違い勉強をしなければ覚える事も何も不可能であるはずの少年がmだ。

それはどのような奇跡か、リンはそう言った事に対しても疑問を感じているのだ。

「それは解んね。これ掴んだらなんか色々頭ん中流れてきたから、そのせいだとは思うんだがな」

癖の強い髪の手をかきながら、もどかしそうに言うアキラ。

その顔は嘘を言っているようには見えない。

『そうですか。なら、ギルドカードの機能で調べてみましょう。その鎌は放さないでくださいね』

仕方なさそうに言うリン。

リンが一言『アンヴォカシオン 召来』と呟くと、ギルドカードが現れる。アンヴォカシオン 召来と言うのは、ギルドカードを呼び出すためにこの世界の殆どの国で使わ

れるようになった呪文だ。子の呪文は本人だけでなく、その所有者と契約している者も呼び出すことが出来るようになっていく。

カードに映りだすのは前回の表示。

それを人差指で触って、今回は『武装<sup>アルム</sup>』と呟く。それによりカードに映った情報が変わっていく。

『この武器は 』

瞬間、三人に衝撃が走る。

現装備

武器：大鎌<sup>クリム・プロー・フォー</sup>、罪ヲ断ズル大鎌

特性：攻撃性の強い完全不可視の風刃。

飛び行く斬撃。

魔力による刃の生成。

古代武器。

霊体断裂。

防具：長衣<sup>サラマンドラ・プロテクション</sup>、火精霊の外套

特性：火精霊との契約（相性による）。火焰攻撃系魔術の習得。

火耐性（大）。守備上昇（15%）。

武器の名は「罪ヲ断ズル鎌」これは霊体自体に攻撃をする事を可能とする、異常な武器。

霊体とはどんな生物、物体にもある存在そのものの核とでも言うべきもの。それを攻撃する事が出来ると言う事は、どんなモノにでも攻撃手段を持つと言う事。

それは神に仇成す、常識外れの希少武器。

「無敵じゃねえか」

アキラの一言を皮切りに、呆れかえる一同。

『これは、最終手段ですね。基本的には異空間にしまっておいた方がいいでしょう。あと、アキラさんはもう寝た方がいいでしょうね。もうすぐ魔力が尽きますよ』

冷静に、淡々と今後の方針を決めるリン。  
きつともう慣れてしまったのだらう。

「そう、だな」

手を放すと、鎌に生えた風の刃は消えた。

黒い焰の中に大鎌を投げ込むと、倒れるようにして眠り始めるアキラ。

『主は、どこまで強くなるのじゃろうな。吾は今の主の持つ力でさえ信じられんと言っのに』

スースーと言うアキラの心地良さそうな寝息を聞きつつも、遠い

目をするサラ。

アキラの持つ魔力は常識をはるかに凌駕するもの。

『何処までも、じゃないでしょうか。男の子なんですから』

『そう、じゃな。主はきつと何処までも強くなる。目的の為に』

二人の精霊に流れていた魔力は、アキラが眠る事によりアキラと繋がっていたパスが閉じられる。

遠く、遠くを見つめる二人は、闇夜に溶けて行くようにして、消えていった。

## Ep20：断罪の鎌（後書き）

どうでしたか？

これから主人公アキラの冒険が始まります。

冒険の夜明けとしては、上々なものを書けるようにこれからも精進する心積もりではありますが、至らない点がありましたら、遠慮なく言ってきて下さい。

では、またの機会に。ノシ

## Ep21:さあ行こう、幽霊屋敷(前書き)

冒険開始の主人公達(\*^|^\*)

まずは村の中の進入禁止区域からお送りします。

Ep21：さあ行こう、幽霊屋敷

ミリイたち、ミエーチ家の朝は早い。

その中でも一番起きるのが早いのは、何を隠そう今洗面所で顔を洗っているミリイである。

「ん？ 何この音？」

顔を洗い終わると、鋭い風切り音が何度もミリイの耳に届いた。その音はどうやら家の外、村のはずれにあるために自動的に広くなったミエーチ家の庭から聞こえてきている。

ミリイが知るなかで、こんな朝早くに起きる者はこの家には居ない。ならば昨日からこの家に泊まる事になった妖しいアイツ以外には居はしない。

そう決めたミリイは、昨日の内に一気に綺麗になった狭い廊下を抜けて、悪戯心にドアから遠回りに外に出る。

「フフフツ、ビックリするかしら。」

アキラの驚く顔って面白そうだし、後ろから声掛けてやるっ

瑠璃色の瞳を子供のように輝かせ、今から行っ悪戯を考える。

初級魔術で驚かせようか、木の枝でも投げつけてやるっか。

何か棒状の物を使って素振りを行っている様子のアキラを余所に、悪戯の計画をし始めるミリイ。

「ホントの事言おうとしないアイツが悪いんだもの。私は悪くないわよね」

昨日アキラが嘘を吐いた事を未だに根に持ちつつ、アキラの居るであろう庭の周り、少々手入れの行き届いていない雑木林の中に身を隠す。

「さて、最弱設定の魔弾くらいでいいわよ、ね……？」

その身を完全に隠し終え、庭の真ん中。ミリィが魔力回路に火をくべて、魔術発動の準備を行い始めた時、アキラの居る場所から聞こえていた風切り音が消えた。

「何してるのかしら？ アキラ」

ずっと行<sup>おこな</sup>っていた素振りらしき事を終えて、今度は仁王立ちをして、胸の前の空気を両手で包むような型をとるアキラ。

その姿は堂々としていて、雑木林の中のミリィにさえも動く事を躊躇<sup>ためら</sup>わせる。

小鳥のさえずり、木々のざわめき、朝露の落ちる音。その全てが消え失せて、その空間は無音となった。

完全な静寂の中。

アキラは突如、言霊を放つ。

「来たれ、太源の一角を担う者。渦巻けよ火の精」

「なっ、アイツこんな所でッ……！！」

中級攻撃呪文の呪文詠唱。アキラは最低でも小さな森一つを焼き払う事が出来る程に強力な魔術を詠唱している。



今そんなものを使えば、ここら一帯は火の海と化すだろう。

アキラの構える手の内側の空気が捩ねじま子曲がり、視認可能な程に超高密度の魔力の塊が形成される。

徐々に成長していく大量殺戮の種は、アキラの右手を包み込む。

「我が手に下りて、汝等が力の一片を、我に示せ」

破壊そのものでも言うべき魔力を右腕に纏い、その腕を天空へと突き上げるアキラ。

「フリコレ・トルナード  
……燃える竜巻」

右腕は赤く発光を始め、超高熱の小さな竜巻を作り出す。  
詠唱を完成させた上位呪文に、脅威に対する最後の抵抗をしようとするミリィ。

「アキラ……！！ やめて！」

雑木林の中、出来うる限りの絶叫をするミリィ。

ミリィの必死の叫びは、アキラを中心にした竜巻にかき消される。  
そして竜巻が最高速になろうかと言う時、

「え？」

その全てが、黒い焰にかき消された。

周辺の空気を巻き込み、天空を貫くはずだった紅き魔力の塊は、最初からなかった事のようにして、漆黒の焰に焼き尽くされた。

「よし、概念破壊の特性もマスターできた」

雑木林の中に隠れたミリイ。

嬉しそうな微笑みをたたえたアキラ。

この瞬間、アキラの秘密は、ほぼ全てミリイに知られてしまった。

今朝のミエーチ家の朝食は、少々かたいパンのトーストにオニオンスープ、そして死碑の森の植物サラダだ。

他二品はいいが、最後の一品はアキラにとって頬をヒクつかせざるを得ない代物であった。

「口じゃん」

サラダを見てから最初のアキラの発言は、そんな物だった。

何を隠そう、そのサラダの名は百口草<sup>どつくちくさ</sup>。妖怪百目鬼と同じようにして、過去の勇者が付けた名だとか。

名の通りその草は、百もの口を持つ薬草。良薬口に苦しと言う事もあり、見た目はアレだが効能は最高級。筋疲労や小さな傷などは薬草の含む水系統の純粋な治癒の魔力で回復される。

一部の薬屋では重宝されていたりする代物だ。

チースティに差し出されたフォークでアキラはそれを食べた。

ドスツと音を出しながら、差し込まれたフォークの音と同時に、薬草のいたるところに有る口が悲鳴を上げる。

「ウエツ、五月蠅<sup>せみじ</sup>えな」

片手で耳を塞ぎつつ、それでもドレッシングのたっぷりかかった

口型のサラダを口に運ぶ。

「そうですかあ？ 私達はいつもこうだから解りませんが、嫌な  
ら食べなくても……」

三人で囲んでいる机、アキラの向かい側。その席に座るチース  
テイが言う。

「何言ってるんだよ、どんな見た目でも味は食べてみなけりゃわか  
んねえだろティム。食わず嫌いは嫌だからよ」

青ざめた顔で言うアキラ。その手はプルプルと震えている。  
ティムとはチーステイの愛称だ。昨日帰って来た後に、そう呼ぶ  
ように頼まれていた。

「アキラ、無理しなくていいのよ？ 食べられないなら母さんにあ  
げるんだから」

用意周到に耳栓をしていたミリィは、平気な様子でアキラに声を  
かける。

百口草は体力回復の効能もあるのだ。

「いや、そっちの方がマズイだろ。残しモノとか人にあげちゃいけ  
ねえだろ」

その言葉の直後、サラダを口に含むアキラ。  
瞬間、アキラの脳裏に電撃が走る。

「ぐうっ……」

口元に手を当てて、水を探すアキラ。  
その時にはもう手に水が渡され、直ぐ様に口の中の物を飲み下すアキラ。

ミリイ姉弟による連携プレーのたまものである。

「だから無理するなって言ったのに、もう残しなさいよ」  
「いや、いい。食べる」

口数少なく返すアキラ。  
意地でも残す気はないようだ。

それからはただ黙々と食べ続けるだけ。  
ミリイとティムはおしゃべりを楽しんでいたが、アキラは何度も意識を失いかけていた。

地獄の朝食が終わり、村の中。ごく小規模のギルドでアキラはミリイと昨日の依頼の完了を報告していた。  
簡単な依頼だった筈が死にそうになったと言う事で、ミリイはギルドからほんの少しではあるが保険金のような物を貰っていた。

「これなんかどう？」  
「いや、竜種<sup>ドラゴン</sup>退治とか無理だから。位置的にも時間的にも」  
「いいじゃないのよ、アキラならきつと軽く出来るから」  
「何その自信！？ 俺そんなに強くはないから！」

そして今、二人はギルドの依頼カウンターの前で、コルクボードに張り出されたギルドの依頼書を見つめていた。

何度も繰り返されるミリイの無理難題に、とうとうアキラは大声を出した。

「むう、それならこれで譲歩してあげるわ！　これなら場所も近い  
いいでしょ！　依頼レベルもだし」

満遍の笑みで、アキラに語りかけるミリイ。軽くアキラの怒りを  
受け流している。

ミリイが指さす先に書かれた依頼書の題名は、妖しげなものだっ  
た。

「【幽霊屋敷の探索】？」

アキラの声が、半ば上ずっている。

「そうよ、時間も距離も大丈夫でしょ？　これならやってもいいじ  
ゃない」

幽霊と言う単語に、ひくひくとするアキラの頬。額には、一筋の  
汗の軌跡が見える。

目ざとくも、ミリイはそれを見逃しはしなかった

「いやならやめてもいいわよ？　幽霊怖いものねえ？」

ミリイは、嘲笑うようにしてアキラに話しかける。

「いや、いい。お姉さん、これ受けます」

「ハイハイ、依頼受諾ね。でも君、意地っ張りは損するよ」

ずんずんと歩き、依頼受付まで行くアキラ。

アキラ達の会話を聞いていたのだろっ、ギルドの依頼受付のお姉さんはほやんとした表情でアキラをなだめる。

「大丈夫ですっ！」

アキラの瞳にはギラギラと燃える決意の焰が見える。決意と言うよりも、意地と言った方がいいかもしれないが。

「よしアキラ。受けると決めたからには冒険準備よ！」

真剣そうな目でアキラを見つめ、右手でガッツポーズを作るミリイ。

「大体準備出来てんじゃん」

「バツカねえ、あそこはある意味ダンジョンよ。色々準備しないと危険なんだからね」

「へえ……」

「あつ、信じてないなあ！ この」

傍目から見れば痴話喧嘩にしか見えない状況で、アキラ達はギルドを去っていく。

二人がギルドを出て数時間後。

それまでギルドの片隅で酒を呑んで酔いつぶれていたフードの男が、カウンターまで千鳥足で歩いてくる。

その足取りはおぼつかないながらも、真っ直ぐにカウンターに向かっている。

「これ頼む」

「これは……！ あの二人が危ない」

男は紙切れをお姉さんに見せる。

するとお姉さんは、紙切れを手から離し突如顔を青くする。

その紙切れには、【幽霊屋敷の探索】の依頼レベル上昇の通達が  
されていた。

ひらひらと落ちるその紙に書かれた上昇後のレベル指定は、B。  
それは飛竜退治と同レベルの、高難易度依頼であった。

## Ep22：吸血鬼（前書き）

今回は文量が少々増量されています（\*^|^\*）

話としてはそこまで大きな変化は、無きにしも有らず？  
誰か、コメディの書き方を教えて下さいorz



## E p 2 2 : 吸血鬼

それは、ミノリスの村のと真ん中に堂々と居を構えていた。

古びた石造りの外壁、それにまとわり付く何かよく分からない草木のつた。澱んだ空気に、神経を逆なでするような鳥の声。これぞ、幽霊屋敷と呼ぶにふさわしい。

「ここが、ヴァンパイア吸血鬼の居る屋敷ねえ」

ボソリ、とミリイが呟く。

その着ている服はこれから砂漠でも超えようかと言う程の荷物を持った旅装束。服は基本白とピンクを基調とした物で、その可愛らしさが際立っている。

「ああ。つて嘘！？ 吸血鬼だと？ 聴いてねえぞ！」

一瞬ミリイに見とれていたアキラは、吸血鬼と言う単語を聞いて驚きの声を上げる。

吸血種は竜種と並び、この世界の生態系の頂点に君臨する種族だ。竜種は魔獣の王者、吸血種は生命の王者と恐れられている。

むしろ人間への害と言う点においては、竜種よりも吸血種の方が脅威であるとされているのだ。

その脅威である吸血種の中でも、人の形を成し、異常な程の魔力を保有する吸血鬼と言う種属は群を抜いている。

「怖いのか？」

驚きの声を上げ冷や汗を流すアキラに、笑いかけるミリィ。

本来ここで踏みとどまるべきなのだが、アキラは無駄にプライドが高い。

「いや、おもしれえ！　そうでなくちゃな！」

それと共に、一人の男としても、アキラは吸血鬼と言う存在を自らの目で見てみたいと言う好奇心もあったのだろう。目がキラキラしている。

が、ミリィの目にはそれ以外のものも映っていた。

「でも、足振るえてるけど？」

フンツ、と鼻を鳴らしながら言うミリィ。

最近はいささかサディストと化しつつある。

「こ、これは武者ぶるいだ！！」

取り繕うように言うアキラ。  
顔を見れば、目が泳いでいる。

「へえ？」

首を曲げ、しげしげとアキラを見るミリィ。その眼はまるで、新しいおもちゃを与えられた子供のよう。

「な、なんだよ」

数秒間見つめ続けられ、かゆいところがかけない時のような顔をして、アキラがミリィに問いかける。

フツツと笑いつつ、アキラの方を見ていたミリイは屋敷の方へ向  
き、一言。

「じゃあ、怖くないなら行こうよ。アキラは強いでしょ？」

クスリと笑い声を上げながら、ミリイは屋敷の敷地に足を踏み入  
れる。

後ろを見ずに、ミリイは小さく声を上げる。

「私に、あの綺麗な黒い焰を見せてよ」

その背中が、どこか嬉しそうに見える。

「は？」

アキラは間抜けな声を上げ、それでも前へと進むのだった。

暗い、暗い部屋の奥底。陽の光の届かぬ場所で、会話をする声  
がする。

「ほう、侵入者が……」

どこか、愉しむような声で喋る何者か。

『そのようです、マスター。どういたしますか？』

その声に答えるのは、闇より黒い光を放つ小さき者。

「そうさの、この気配は覚えがない訳ではないが、記憶には余り無いな。こ奴等は、いつも通り追い返せ」

『了解しました、マスター』

いつもの会話、いつもの行動。  
楽しみとして予定されていたもの。

「今回は、どこまでもつかの？」

喜色を含んだその言葉は、ニヒルな笑みと共に放たれた。

ギィイと音がして、古びた洋式の扉が閉まっていく。  
ビクンと反応するアキラ。

「うをおおうー！」

その姿に、ほんの少し不安さを感じながらもミリィは前へと進もうとする。

「さあ、行こう行こう。色んなお宝有るんだろうしねえ」

その言葉に、アキラは一瞬だけ思考して返答する。

「いや、まずは索敵とか色々やつといた方がいいと思うんだが」

ミリィとアキラの眼前には外見からは考えられないほどに延々と広がる大広間。そこから一直線に進んだ廊下には多くの部屋の入口が有る。

そのどこかに、これまでの探索隊の者達が情報を持ちかえることが出来なかった理由が有る筈なのだ。

右手を下あごに乗せるようにして、考えるような所作を取るアキラ。

真剣そうに考えるアキラに向けて、ミリィは軽く一言。

「それじゃお願い、でも無理だと思っけどなあ」

その言葉に従い、アキラは最近では殆ど完璧に見えなくなった黒い霧を周囲に放ち、探索を行う。だが、それは無意味なものだった。

「なんだ？

ここおかしいぞ、何処にでもいる？ いや、どこにも居ないのか？」

アキラの索敵はアキラ自身の感覚を分身に移し、それにより物やその気配を感知すると言う、通常使い魔が居ないのであれば上級魔術に分類される程の高位探索術を使っている。だと言うのに、それすらも妨害するような異常な濃度の魔力がこの屋敷には充滿している。アキラは以前リンとサラに、濃度の高い魔力は感知系の魔術には一番有効な妨害方法だと言う事を聴いていたが、今のアキラの黒い霧にまでそれが及ぶと言う事は考えもしていなかったようだ。

今回妨害として用いられているのであろう魔力は、一種類にも十種類にも、何十種類にも感じられる。

「ほら、ここじゃ自分の目や耳を頼りにするしかないのよ。探索とかは自分の足を使ってやるの。」

依頼書にも探索は出来ないかもしれないって書いてあったじゃない」

首を小さく曲げて、呆れたような顔で言うミリィ。

「そうだったか？ 俺それ見てねえや」

片目を閉じて、頭を右手で頭をかくアキラ。

子供のようなその所作に、ミリィは微妙な不安感を感じる。

「アキラってどこか抜けてるわよね。それって今後危ないんじゃない？」

辛辣にけれどもどこか心配そうに言うその言葉にはどこか温かみがこもっている。

「そうだなあ、俺冒険初心者だし。でも今回はミリィが居るしそこら辺は大丈夫だろう？」

満遍の笑みを浮かべつつ、アキラはミリィの心配に斜め上の答えを述べる。

根拠の無い自信、完全に自分の事を信じきったアキラの発言に焦るミリィ。

「そ、そんな事言っただて何も出てこないわよ？」

アキラのいつもの顔からは想像できないほどの子供のような無邪

気な笑みに、後ずさりつつ返答するミリィ。その顔は少し紅潮している。

気が抜けていたと言う事もあったせいだろう。ミリィの足がおかれた場所からガコンツ、と音がすると、二人とも間拔けな声を出す。

「へ？」

足元からの音から数瞬後、二人の足元が大きく口を空ける何かの動物のように開いた。

それは古典的な罨。スイッチ式のそれは、二人の身体を引き摺りこむように一瞬にして完全に開ききる。

「ギャアアアアア！」

子供のいたずらのような古典的なモノでは有れど、そこは吸血鬼の住む屋敷。

規模は半端なモノではないようだった。

「ヤバイヤバイイッ」

目を回しつつ、どうにか下へ向かうGへと抵抗しようと平泳ぎもどきをするアキラ。言うまでもなく無駄である。

二人は勢い良く風を切りながら、暗い穴の底へと墜ちてゆく。

そんな中、アキラは混乱したままの頭を使い、どうにか二人とも無事に戻る方法を考える。

着地時にクッションもどきを作る。

却下、第一何処に落ちるのか解らない。もしかしたら、下に剣山が有るかも知れないし、魔術妨害用の術式が有る可能性もある。

ミリイを抱いて壁伝いに元の場所へ。

頭上の穴は未だに大きく口をあけているが、もう既に十メートルは落ちてきている。今のアキラには肉体強化の魔術は使えない。壁の幅も大きく開いているため、こちらも却下。

<sup>ゲート</sup>門の魔術で、落ちる直前の場所に転移。

「これだッ。リン、補助頼んだッ」

目を見開き、右手の人差指と中指の指先に魔力を集めて印を切る。

『ハイ、場所は先程の場所ですね』

アキラの言葉に、顕現しないままのリンが念話<sup>テレパシー</sup>に近い形でアキラの頭の中に直接声を放つ。

数秒の内に印を切り終わったアキラは、ミリイと自分に自身の魔力で編んだ魔法陣を展開する。

「ミリイ、目え閉じろッ」

「へ？ わ、解ったけど」

アキラの言葉に、ミリイは目を閉じる。

瞬間、魔法陣にアキラの魔力が流れ込み、黒焰が噴き出していく。

ミリイは素直に答えはしたが、片目のみ薄く開けていた。

「発動、転移開始！！」

アキラの発動する黒焰の門に、目を輝かせつつ身を任せるミリイ。



公言こそしないが、ミリイはとてつもない魔術マニアである。ミリイの魔術は独学で、初級の魔術所によるものが多い。基本中の基本の魔術こそ習得しているが、珍しい魔術や属性魔術などと言うものは彼女は存在こそ知ってはいるものの、見た事はない。

魔術が大好きである彼女にとつて、文献にも記されていない黒い焰を操るアキラ特有の魔術はミリイの心をわし掴みにした。

彼女の知らぬ魔術は、彼女の大好物。

性格は余り宜しくないが、それでも美人に目を付けられたアキラは、今後の苦勞を解らずに黒焰の門をくぐりぬけた。

門を抜けると、先程の大きな穴が有る筈だった。  
そう、筈だった。

「何処だ、ここ？」

気付けば、アキラは全く見覚えの無い広々とした部屋の中に居た。  
右手の指輪に魔力が吸われ、四等身で半透明のリンが現れる。

「ア、アキラさん！ 転移場所が強制変更されました！

相手は最低でも上位精霊に勝る能力を持っています……す

！」

「 黙れ、異界の精霊<sup>せいれい</sup>ごときが私の前で囀るな<sup>さえず</sup>」

慌てふためくリンに、冷やかな声がかけられる。

その声は冷酷にして辛辣。リンは、その声のした方向から放たれる重圧に、<sup>プレッシャー</sup> 声を出すことさえもできなくなる。

リンの異変と、背後に感じる凄まじい悪しき気配に、アキラは跳ねるようにして振り返る。

この屋敷で、この状況で、悪しき気配を発していると言う事実が有れば、攻撃の理由には事足りる。

アキラは、威力は劣るが素早く魔術を発動するために無詠唱で魔術を発動する。

「喰らえ、ファイヤ・ブレード魔炎弾！」

振り返るとともに、アキラの右掌から放たれる極小の魔弾。火で出来た魔弾の数は、およそ二十を超えている。

火焰攻撃系の魔術で基礎中の基礎とされるもののだが、そこは異常な魔力容量を持つアキラ。温度が桁違いなようで、色が本来のオレンジのような色から青色へと変化している。

至近距離で放たれるその弾丸の連射に対し、避けようとする気配一切ない悪しき気配の主。

気配の主に、魔弾の雨が降り注ぐ。着弾し、鮮やかな青色の火が飛び散ってゆく。

「まだ、まだだ……」

額に大量の冷や汗を流しつつ、攻撃の手を緩めないアキラ。その攻撃は最早弾丸による点の攻撃とは比べ物にならぬ、濃密なる面の攻撃。

張られる弾幕から、逃れる手段はないように思われる。

普通ならば、先程の攻撃で確実に命中して、火傷などの怪我を負い動きが鈍るなどの状況に陥ってもおかしくはない。

それでもアキラは、弾丸の数を百、二百と増やし続ける。その大きさも、量も、人間一人を殺すには十分過ぎるものだ。

断続する爆音。一方的に、湯水のごとく降り注ぐ火の弾丸、その状況に変化はない。

眼前の状況は、放ち続けた火炎弾の煙のせいで確認できない。

反撃もないが、手ごたえもない。

弾丸の雨は止み、部屋に響くのは虚しい風の音だけ。

「これだけで、終わる訳ねえよな……」

そう、風の音が闇に包まれた部屋に満ちている。攻撃の前には聞こえなかった風の音が。

一点に集まるように、風の動きが変わってゆく。

「その通りだよ、客人殿。

突然威圧したこちらも悪いが、君もこのように攻撃をしたのだし悪くは思わないよ？」

無数の火炎弾の斉射後、温度の急上昇により生じた煙が風の流れによりかき消えていく。

避けるでも、隠れるでもなく、ただただ真正面から放たれる攻撃を受け続けた。

それは、どんな達人と対峙した時の緊張感よりも鮮明に恐怖を感じさせ、アキラの身から逃げる力を奪い去った。

風と共に集束するのは、多大なる禍々しき魔力。

それは中級の魔術を使う為に集められる魔力ほどまでにかき集められる。

すると、吸血鬼は厳かに呪文を唱えた。

「集いて来たれ風の精、契約せし我が呼びかけに応えよ。  
其は束縛のそよ風、其は切断のつむじ風。  
フリュ・トゥ・ポ・モザン  
彼の者を捕らえ、切り刻め。【捕縛の刃風】」

巻き起こる旋風。

切り刻む風の刃。

襲い来る強風に、アキラは苦しみの絶叫を上げる。

「がつ、ああああ！」

その瞬間は数秒。

切り刻む強風が止むと、吸血鬼は話し始める。

「さあ、客人よ。話をしようかの、渡り来た君の話を」

状況は理解不能。

アキラはただ流されるままに、吸血鬼の言葉に耳を貸した。

## Ep22：吸血鬼（後書き）

どこがおかしな点などあれば、感想かメッセージでご報告ください  
い>（―――）<

## E p 2 3 : 影と吸血鬼 (前書き)

お久しぶりです。

今回は投稿が遅くなったため (あんま関係ないけど) 分量がいつもより少し多くなっております。

形としてはバトルかなあ……

では、E p 2 3 : 影と吸血鬼どうぞお読みください。―――

## Ep23：影と吸血鬼

「話をするためにも、まずはこちらの部屋に来てもらおうかの」

気付けば、アキラは可愛らしい部屋の中に居た。お姫様の寝ていそうなカーテンの付いたベッドに、奥に有るピンクのカーペッドに乗せられた無数のデフォルメされた動物のぬいぐるみ。

部屋を中心らしき場所には、場違いな程傷だらけな少年。アキラが風の魔術で拘束されている。

その眼の前には、鮮やかな金色の長髪に陶磁器のように白い肌、その内に二つの翡翠の宝石をたたえた美しい少女の人形が立っていた。

「さあ、一時的にでも決着がついた所で話と洒落込もうかの。なあ、アキラとやら」

アキラを呼ぶとともに、手に向ける人形。

人形の身体はどうやら木で出来ているらしく、一言喋る内にカタカタと言う音が何度も聞こえてくる。その腕には球体関節がはめられていて、身振りをしようとするたびにきりきりと音がする。

人形は直ぐそこに有ったソファにドサリと座り込み、その姿に似合わぬ爺口調でアキラに問う。

「は、何でそんな事……！ 吸血鬼なんかを信用するかよ」

無機質に、無表情に聞く人形の言葉はアキラの心には届かなかっ

たのдарう。

つい先刻切り刻まれた傷だらけの身体を無理やりに動かして、アキラは風の拘束に抗った。

後ろ手に風の刃で巻き取られた両腕、膝立ちに固定された両足、そしてその全てを薄皮一枚で切り裂かぬよう覆う、さも生物をあやめる為に作りだされたかのような鋭利な拘束の旋風。

「ガア…アア…！！！」

それからどうにか逃れようとして、身体を捻り、切り裂かれた。飛散するアキラの血液。無数の風には容赦などと言う言葉を知りはない。

耐刃素材であるはずの緋色の外套も、鍛えられ始めたばかりの若き身体も、全てに切り傷を付けてアキラの抵抗を許さない風。

傷つけて苦しめて、拘束するその風に遮られようと、それでも抗うは賢きか愚かしきか。

身体の傷が増える度に、アキラの目に灯る光が弱くなって行くのが、人形には手に取るように解った。

「ほう、抵抗する<sup>レジスト</sup>のか。だがそれは硬き衣を持つ鬼をも切り裂く風の刃で編まれた拘束具。ヒトに破れる訳が」

余裕を持つて放たれたヒトの形を模したものの言葉は半ばで、絶大な高音に遮られた。

それは硝子<sup>ガラス</sup>が叩き割られた時のような、耳障りな高き騒音<sup>ノイズ</sup>。

頭へと直接響き渡るような高音に、口を閉じた人形。見開かれた、その硝子玉<sup>ガラス</sup>で形作られた眼球の表面に映るのは、両腕を左右に大きく広げて拘束の風を完全に振り解いたアキラの姿。



「な……に……！？」

意味の無いな疑問の声。

投げかけるでもなく、風が消え音が消えた部屋に、その声は溶けていく。

視線の先、鬼をも縛る風の刃を打ち負かしたアキラ。

アキラは膝立ちのままではいけないと思ったのか、フラフラになりながらも立ちあがる。

もう既に意識を保つ事もギリギリな身体で、それでもなお立ちあがるアキラの放つ気合いは鬼気迫る様子。

その姿はまさしく、鬼。

死にぞこない。そんな言葉の似合いそうな様のアキラの気合い。弱弱しい筈のアキラは、一步。前に踏み込んだ。

それに合わせるようにして、ズルリ。

人形はソファを足で、後ろへと押し下げた。

「ふ、不可能じゃ……！ 不合理じゃぞ侵入者！ 君は人間、私はそれよりもなお高き霊格を持つ者つ。その霊格の落差を無視する事などつ、その事など出来る筈が」

何故、何故。

そんな言葉が宙を舞い、その末に帰結した結果は、不明。人形には理解が出来ない。

アキラの持つ気合いが。

それに気怖されている自分の現状が。

「……ハアツ……ハアツ……、五月蠅こいつえよ……、轉さえずる……な、よ……  
ザコが……！」

それはどんな意趣返しか、アキラが発したのは人形が初めに放った嘲あざわらりの言葉。

言葉の調子も、立ち位置も違えば、放った相手も全く違う。

それでも、放たれた言葉に、返す言葉は有りはしない。

思いついては消えていく反論の言の葉。

「な、何で……」

パクパクと口を開閉する人形。

その気配は当初の威圧的なモノとは違い、小さく儚い小動物のようなものへと変化している。

足を引きずり、右手を人形へと伸ばす息も絶え絶えなアキラ。

その気配は明らかにヒトの物ではなく、生命の格が違うものでさえも恐怖させるケモノのようなモノへと変貌している。

アキラは、突き出した右手に莫大な魔力を練りこみ、呪文も無しに言葉を放つ。

「燃えろ」

次の瞬間、黒い焰が噴き上がる。

それは容赦なく、無慈悲に。

それは敬愛と、慈悲を込めて。

清廉な人形を焼き尽くし、蹂躪した。

暗き部屋で、ただ一つ輝く水晶球を覗きこむ幼子が一人。

「客人、そうか。ニーニヤの言っておった魔王の資格も勇者の資質も持たぬ者、か。さて、ここからどう抜け出す？」

覗き込んだ水晶球には、傷だらけで捕まえられた少年。アキラと人形の姿、そしてその周囲の物が上方から映し出されている。

「何をしている無資格者。その程度の拘束、破れなくてどうするのだ」

水晶球の中のアキラは、風の刃に切り刻まれながらも悪あがきをする。

じたばたと暴れれば暴れるほど、その身は傷つき血を噴き出す。

「この程度か？ ならばニーニヤには仕置きが必要か？」

数秒間傷つけられても悪あがきをやめないアキラに、半ば呆れ気味に言葉を吐く何者か。

次の瞬間、響き渡る硝子の割れる音。

「何だと……？ 魔力も使わず、腕力でか？ そんな事、有り得はしない」

呆れながらも水晶球を眺める何者かの目が驚愕に見開かれる。

其れは、魔術の理論を斜めから完全にぶった切るような理不尽な出来事。

本来、人間はおろか肉体の硬度等の強靱さにおいては軽く四倍はある鬼族の者たちでさえ拘束し続ける中級拘束魔術『フル・アウター・バインド捕縛の刃風』を肉体の力だけで破るなど、それこそ生態系の頂点に君臨する竜種や吸血種の力がなければ不可能なのだ。

それを、アキラはやってのけた。

「イレギュラーなんと云う……不安因子。」

これでは勇者も魔王も関係ない。小奴、霊格そのものが違うではないか」

息を呑む音と共に、何者かは頭痛を堪えるかのようにして。眉間をもんでいる。

霊格とは、すなわちその生命体、もしくはその種族の持つ概念的位の事だ。

現実世界において、その頂点に君臨するとされているのは人間やゴリラなどの霊長類。こちらで言うつとすれば頂点に【神】と呼ばれる者達その下に最強の二種族。吸血種と竜種がおかれている。そこから下は多くの種がせめぎ合っているため今は省く事とする。

アキラの行った行動がまぎれもない真実だとするならば、最低でも彼の霊格は最強種に並ぶことが可能であることとなる。

人間にも竜を狩ったり、吸血鬼を死に迫いやる者は居る。だがそれは大抵、英雄やら勇者等になりうる才能を持ったモノなど、限定

されてくる。

特殊な千理眼の術を用いて其れを見ることができるのは今はこの者くらいのもののだが、それを持ってしても、アキラにその資質は認められなかった。

アキラは英雄や勇者と言った者の伝説として語り継がれるようなきらびやかな結果を生み出す物ではない。  
それはそう言うことへとつながるのだ。

強大な力を持ち、その上勇者には成り得ない。

ならば後の選択肢は、大抵負の側面へと流れ込んでいく。

「だが、魔王の資格も持つては居ない、か」

見た所アキラの行動には、言い知れない【悪】を感じさせる気配はなかった。

術を使ってクッションを置いてでは良く分からない。

「ならば自身の目で確かめるべき、か」

そう言うと、幼き者は聞き取れぬほどの高速で、呪文を詠唱した。

「長距離移動、隠れ家6番の私室へ」

呟く声の、数秒後。

幼子は漆黒の焰の燃え盛る場所へと、移っていた。

それは何もかも差別しない、平等な海のようなモノだ。  
全てを包み込み、焼き尽くす漆黒の焔。

それが今冒すのは、私にいつもつき従う精霊。影の上位精霊、私が付けた名はリヤン。幾年月を経ても信じあえるよう私が考えた、絆と言う意味の名だ。

彼女は私が吸血鬼となった時よりの従者なのだ。時を経た精霊は強くなる。だからこそ人形へと憑いてもらい、彼がどのような者なのかを契約により得た感覚同調の術で私に直接彼女自身の考えを教える事になっていた。

だがそれも虚しく、彼女の感覚を通して私に伝わったのは一つだけ。

ただただ、彼の者の霊格が人間をの持てる次元の物ではないと言う一つの事。

その後、彼女から送られてくる感覚が途切れたことから、彼女の憑いていた人形が最低でも修復不可能な状況に陥っている事が解る。

「リヤン！ 完全同化だ！！」

人形が修復不可能でも、幾百の年月を重ねた最上位の影の精霊である彼女がやられる事などありはしない。

大丈夫。そう、大丈夫だ。

『はい、マスター』

ほら、いつも通りの受け答えだ。

「アキラ、と言ったか。勘違いしているようだから解らせてやろう。

私がこの屋敷に住まう吸血鬼、キリアだ」

呆然自失としている傷だらけの少年に、睨みを利かせて脅してやる。

私達の魔術は俗に精霊魔術と呼ばれる類のもの。

その中でも俗称で完全同化と呼ばれるこの魔術は、術者の能力を限界以上に引き上げると言う規格外な最上級魔術に分類されるものだ。

これにより各種能力値が上昇すれば、私の使う千里眼系の魔術も見抜く能力が上昇する。

その代わりに、限界ぎりぎりで意識を保っているだろう彼は意識を失うだろうが、それはいい。

まずは彼の霊格の謎、そしてその精神世界の状況と言ったモノを確かめさせてもらおう。

「契約せし我が名において命ずる、暗き彼の地より来りし者、影の精霊よ。

汝、我が心と共に存れ<sup>あ</sup>。

汝、我が身を鎧<sup>よろ</sup>え。

汝、我が爪牙となれ。

其は、混沌より生まれし光の対極。究極なる陰の意志。

我、汝を欲せん」

一息に紡ぎだす高位呪文。一言口にする度に、私の身体に、私の精神に、リヤンが溶け込んで行く。

今でもほんの少しは暗い筈の視界は、吸血鬼の能力の底上げによって完全に可視可能になる。

身体の周りを、暗い魔力が蠢きだす。其れは一つは鎧のように、一つは牙のように形を成していく。身体全身に魔力が行き渡った時、私は元の姿よりも荒々しい、吸血鬼そのものと言った様相のモノになる。

私達が完全同化、と呼ぶこの高位魔術。  
その名は、

「エレメンタル      オンブル・アルミヨール  
精霊化、      【影鎧爪装】」

彼は一瞬私を見て、糸の切れた人形のように崩れ去る。

『まずは精神世界から探りを入れましょう。マスター』  
「そうじゃな、なれば【夢渡り】」  
レーヴ・ミタフテール

そう、まずはココロの有り様から、この少年。アキラの事情を探ってみよう。



### Ep23：影と吸血鬼（後書き）

どこかも解らぬ部屋の中、数人の少年少女が机に向かい、教団の上一人の少女と一つの黒い影が立つ。

「キリアと！」

『リヤンの！』

『「新出魔術教室！！」』

ポンッポンッと言う小気味良い音に乗せて、ハートマークが宙を舞う。

『さあ、マスター。今回作者がなんとなくノリでやってみたこの企画ですが、マスターとしては、どう思います？』

「うむ、私の出番が増えて万々歳じゃ」

『そうですか。まあそれは置いて早速本題に入りましょう』

「む、そうじゃな。今回の講義内容はなんじゃったか？」

『今回は、マスターと私が完全同化と呼ぶ、エレメンタル精霊化の魔術についてです』

「ああ、そうじゃったな。それでは精霊化の魔術について、これから抗議を始めるが、皆よいか？」

はい、と言う声が各所から上がる。ここの生徒はみな良い子た

ちのようだ。

「精霊化とは、自身の霊体に霊格が一段階上の精霊を溶け込ませ、自身が意志を持ち実体を持つ精霊となる魔術じゃ」

説明を始めるなり、赤いフレームの眼鏡を付けて黒板に図をかいていくキリア。

その絵は大分、拙い。

「ここまでで質問のあるものは？ クリス、なんじゃ」

「えと、何でキリア師匠の絵はそんなに汚ブツ」

クリスと呼ばれた青年の言葉が出しきられる前に、何らかの方法によって彼は気絶させられた。

皆の頬がびくびくと引きつる。

「ここまでで質問のあるものは？」

再び質問、今回は拳手をする者は居ない。ここの生徒はみな良い子たちのようだ。

「では次じゃ、精霊と同化すると言う事は、口では簡単に言えても実行するのは生半可なモノではない。意志を持たぬ最下位の精霊ならばまだしも、意志を持つ上位精霊では霊格の低い我々の方が精神を乗っ取られるからじゃ。

そこで今回の我々には、それが起きないように前準備がしてあった。なんじゃと思う？」

一息に出された言葉と質問。

気絶している筈のクリス青年が一言。

「……主従、契約」

それだけ言うと、クリス青年は泡を吹いて机に突っ伏した。  
今度こそクリス青年は力尽きただろう。

「その通りじゃ、クリス。主もやろうと思えばできるではないか。  
今回の成績は上げてやろう。

さあ皆の者、今のクリスの言葉で解ったと思うが、この魔術において術者が精霊と主従契約をする事は絶対となる。この点においては、我とリヤンは百年単位での長い主従の契約期間が有るため難なく条件はクリアしておるのじゃ。

エレメンタル精霊化の魔術の概要は解ったかの？ この魔術には、まだ応用として部分精霊化、物質精霊化と言ったモノもあるのじゃが、今回の授業はここまでじゃ」

きりーつ、れーい。

ありがとうございましたー。

くくくくくくく

いかがでしたでしょうか、今回は本文が大体真面目な感じなんであとがきでこんな企画をやってみました。

またやるかも知れませんが、やらないかもしれません（適当で済みません

では、またの機会にノシ

## E p 2 4 : 門 前 ( 前 書 き )

お久しぶりです。

ちまちました執筆中、私は色々考えます。

例えば、キャラクターの性格。

例えば、ストーリー上必要ないけどやってみたい事。

あんまり本文と関係ありませんね。

ではE p 2 4 : 門 前

どうぞお読みください。

## Ep24：門前

漆黒の大地、紅蓮の天空。そびえ立つ純白の門。西洋に有る王城の門のようなそれは、美しさよりも先に禍々しさを伝える。

その前には、三つの首と蛇のたてがみを持つ巨大な狗。

対するモノは、腰まで伸び鮮やかなウェーブを描く金紗の髪、翡翠色の双眸に、病的なまでに白い皮膚。その全てを影の衣に包み隠した小さき少女。

その全ては中空に浮遊している。

それはなんと場違いな光景か、唸る三頭狗ケルベロスに相対するのは、暗き衣を身に纏った幼子。

「なんなのじゃ、これは……？」

幼子であるキリアがアキラの精神世界へ侵入しての第一声は、そんな簡素なものだった。

キリアの疑問も正しいもので、精神世界に扉が有るだけなら多くの者に有り得るのだが、ここに居るのは三頭狗。本来ヒトの精神にケモノが巣くうなどと言う事でさえ有り得ない事なのだ。

それもここに居るのは伝承に伝えられるような怪物、その中でも地獄の門番として名高いケルベロス。

異常にも程がある。

「リヤン、分身を作る。アキラの契約している二柱の精霊を捕らえ

て来るのじゃ。この状況の説明をさせる」

『了解しました。マスター』

無詠唱で、自分とほぼ同じ姿の分身を作りだすキリア。違いと言えば、ほんの少し身体が透けている程度。

その技巧は、幾百年の年月により本来長い時間のかかる術でさえ数秒で行える程。

身体に似合わぬ知性や魔術の腕前だけでも、彼女が超常の存在であることがうかがえる。

『では、行つて参ります。マスター』

広大な大地と天空を背に、同じ姿の少女が、全く同じ姿の少女に別れの挨拶をしているのだ。

それに、その後ろには三頭狗。

荒い息、口元からチラつく全てを焼き払う黒焰、発せられているのは強大な殺気。普通の神経をしているのなら、そこに居るだけで気を失うような程のモノだ。

「ああ、行つて来い。けれどリヤン、油断はするなよ？」

この感じでは一柱はきつと炎国の姫君じゃ。あの国の秘術は使われると面倒じゃからの。一時的にでも魔力の無効化はしておくのじやぞ？」

背後の光景などには、我関せずといった調子で、キリアとリヤンはいいつも通りの会話を行う。

その姿はまるで、ほんの少し御使いを頼むようなモノだ。

『了解です、マスター。では魔術無効化系統<sup>マジックキャンセル</sup>の術を使いましょう』

そう言って、リヤンは人間では知覚不可能な程の速度で搜索を開始する。

このペースで行けば、一時間もせずに探し出すだろう。とキリアが思っていると、背後の三頭狗から発せられていた殺気がより一層強くなる。

ここにヒトが居たのならば、それだけで息が出来なくなるほどの苛烈な殺気が、小さな背中に浴びせられる。

「五月蠅い駄犬じゃ、犬ならば犬らしく這いつくばっておれ」

その言動も、醸し出す雰囲気も、そこに居る事自体が場違いな。

人は見た目で判断してはならないと言うが、其れは人だけにあてはまるものではないのかもしれない。

キリアの言葉を理解してか、それともただ本能に身を任せてか、三ツ首の獣は歩を進める。

獣の放つ唸り声は一転し、一瞬の静寂の後、その咆哮は轟いた。

「GYAAA  
!!」

現状へと終止符を打つために。



『放せ！ 放すのじゃ！ 吾を誰だと思つておる！』

『精霊界内での最高権力を持つ国、炎国の第五王女ですね。私にとつては誰であろうと構いませんが』

『……なッ！』

飛行する、キリアの姿をした半透明の影精、リヤン。彼女は今、檻に入れた蜥蜴トカゲと、口論している。

聞こえてくる口論に、三種類目の声が混じる。

『サラ、無駄ですよ。私達は抵抗に失敗したんです。これ以上行動を起こしても、この世界の主であるアキラさんへ悪影響を及ぼすだけでしょう。』

ここは一応リヤンとやらの言う、吸血鬼さんとの交渉を試みてみましょう』

彼女が檻に入れて肩に担いでいるのは、焰を纏えぬように魔力無効化の魔術をかけられた、本来の姿へと戻ったサラだ。マジックキ

そして今サラを宥めているリンも、リヤンの操る影で出来たもう一つの檻に閉じ込められている。

『リン、お主……！』

目を見開き、何かを察し多様な顔をする檻の中の蜥蜴。その情景は、とてもシニールだ。

『解つたのならば黙つて下さい。私は静かなのが好きなので』

その直後、見下すような態度で言うリヤン。

『貴様！ 吾にそのような態度を取って良いと思つて  
五月蠅い<sup>はみじ</sup>です。精霊界においての地位が何であれ、今は私がこの  
場の支配者です。貴方は大人しくしていなさい』  
『知つた事か！ 貴様は吾が焼き殺す！』  
『そうですか、それで良いですから黙つて下さい』  
『貴様また 』

延々と続く子供のような口論。

リンは何処となく疲れた様子で、息を吐く。

『もうずっとやってていて下さい』

おおよそ身分の高い者の言葉使いとは言い難いような言葉には耳  
をかさず、リンは秋の紅葉のように色鮮やかな空を眺めて、目的地  
へと着く時を心待ちにするのだった。

ぷくつと膨れた殺人的なまでに大きなたんこぶ。  
それが三つ連なり、しゅうしゅうと音を立てている。

「これでは最高の門番であると言う神話も、あやしいものじゃのう」  
目をバツ印にした三頭狗は、気を失つて大地と天空の間に倒れ伏  
している。

現状を作りだした張本人であるキリアは、三頭狗を一瞥すると通  
り過ぎていく。

歩みを進めるキリアは、白色の門の前で立ち止まる。

「この門は、奴の……」

純白の門に手を添えて。

放った言葉は、虚空の中に消えていく。

その余韻さえも消えた時、キリアはピクリと身体を振るわせる。

「来たか、リアン」

## Ep24：門前（後書き）

今回は余りストーリーに進展はありませんね。

次回は、主人公である暁くんの過去を覗く話になります。

どう言った過去かは、読んでみてからのお楽しみ。

では、また次回。ノシ

## E p 2 5 : 小さな城（前書き）

お久しぶりです、間和井です。

最近ではP Cに向かつていられる時間も短く、余りいい出来とは言えないかもしれませんが、今回もまた、緋色の騎士は異邦人を、宜しくお願いします。

## Ep25：小さな城

燃えるような色の空、奈落の底の如き大地。

丁度その中間地点と言うべき場所に有るのは、巨大すぎると言っても何処からも反論が上がらないような程の大きさの白き門。

その門へと片手を当て、苦い顔をしている少女が一人。

言うまでもなくその少女はアキラの精神世界に侵入したキリアだ。

「まだか、リヤンよ」

純白の大門の方へと手を添えたまま、眉根をよせるキリア。その表情は憂鬱そのもの。

キリアは扉に添えていた方の手を頭へと持っていていき、目を閉じて周囲を探る。

数秒の後に両目を広げ、キリアは一言

「連れてきたか、リヤン」

『はいマスター、二柱ともこの檻の中に』

キリアがその美しい金髪をたなびかせて上空を見上げると、少し色の薄くなったような、キリアと同じ姿のリアンが上空からキリアを見下ろしていた。

『災国の姫君には魔術無効化もかけておきましたし、もう一柱の外  
マジックキャンセル  
界からいらした方は冷静に話がしたいと言っていました、マスター。』

……マスター？』

浮遊するリヤンは、ゆっくりとキリアと同じ目線まで高度を落とすと報告を始める。

自らの行動の結果手に入れた情報と現状の説明を少し自慢げにしていたリヤンだが、最後に言葉にした主を呼ぶ言葉に返事がない事をいぶかしむ。

見れば、キリアの表情は未だ険しいもの。

何故かと思いその後ろにたたずむ白色の門を良く見れば、キリアの背後に注意しなければ知覚する事も叶わないほどに希薄な神気の気配がする。

『マスター、その門はもしか……』

リヤンの背に、おぞましいものが這っていく。  
檻を握っていた手の力は緩み、瞳は焦りに満ちていた。

『如何したのですか？』

緊迫した二者の間に作られた空気を壊すように、檻の中に囚われた黒髪の妖精      リンが口を開いた。

『あつ、それは      ！』

『奴の印じゃな、ぬしの良く知るあのクソ神の印。やはりぬしは色々と知っておるようじゃの。』

その内容は、後でゆっくりと話を聞かせてもらおうかの』

先程までの鬱々としていた表情は何処へやら。

キリアはほんの冗談なのか、それとも本気で言っているのか解ら

ないような聞き方でリンを質す。

『そ、それは……！』

リヤンが感じていた焦りとはまた別の、どこか困り果てたような表情になるリン。

一応妖精の保革の為に作られたため、弱いながらも魔術無効化系マジックキャンセルの術が組み込まれた檻の中に居るにもかかわらず、自由に言葉を口にしていることから彼女の霊格の高さがうかがえるのだが、そんな事は関係ないとばかりにリンは焦りに焦っている。

具体的には、独り言を言っているのに囁むなんていうことが起こるくらいには焦っている。

『まあ良い。今はこの門の向こうに有ると言う、宿主の心象風景の方が先じゃの』

どもっているリンをしり目に、キリアは淡々と話しを進める。

その姿に、先程の焦りは微塵もない。

『さあ、鍵歌キを。奴から聞いているのであろう。我が城へ侵入した分の対価だと思えば、このガキの深層心理を見せるなど安いものだと思うがの』

言葉と共に、キリアはその身に秘められた魔力を放出する。

リンにとって、それは全身に打ちつける濁流のように感じられるほどに強大な威力を持っていた。

感覚としては、下級神の放つ神気にも似た圧迫感が、リンの全身にのしかかる。

『あ……ぐう……』



解、りました。で…すが、対価として、見合わなければ……相応の、モ…ノを、頂きま……すよ』

潰されるような感覚に耐えながら、リンはキリアに返答をする。

『では、始めよ』

その一言と共に、リンに与えられた重圧は完全に消え去った。

ハアハアと言う息切れ。神域に片足を突っ込んだような強大な重圧に耐える、その対価として奪われた体力が徐々にだが回復している。

これもまた、キリアからの対価としてのモノなのだろうか。  
不自然なまでに回復が早い。

リンは身体の回復を確かめて、厳かに唇を開く。

『いにしえの、父と母の末子よ』

空虚な天空と大地にそびえ立つ白門から、扉の軋む音が、響き渡った。

リンの口から発せられていた唄が止むと、古木の軋むような音と共に、純白の大門はその口を大きく開けた。  
扉が開き、目に入っただのは公園だ。

ぽっかりと大きく口を空けた空間の先に、今いる広大な大地と天空と比べれば粗末なモノにしか見えない、小さな小さな公園。

そこに、少年<sup>アキラ</sup>は居た。

否、少年<sup>い</sup>と言うにはまだ幼い。その子供は年で言えば5、6歳の未だ小学校にも通っていないような出で立ちだ。

アキラはその公園の砂場で、一人砂遊びをしていた。その姿は孤独なモノ。

キリアは言う。

『これは、ただの記憶じゃの』

これはただの記憶の断片。キリアが求めるのはもっと奥深く、深層に根づいた魂の記録。

それ故に、キリアは落胆したように言葉を漏らした。

つまらない、と。

心に思った言葉をそのままに。

そう思ったのもつかの間、キリアはその現代日本の日常風景をくり抜いたような景色の中で、息を呑むことになる。

「ねえ、おねえちゃん。あそぼ」

一人で砂遊びをしていた幼いアキラが、キリア達の方を向いたかと思うと、話しかけてきたのだ。

キリアにもリンにもこの状況は予想外であつたらしく、それでも

かと言っほどこに目を広げて驚きを表現している。

それもそのはず、この世界はアキラの中に有る記憶で構成されたモノであるはずなのだ。

経験の集合体であるはずの記憶の中のアキラが、独自の行動を起こすだけでも驚きであるのに、その上認識阻害の魔術を使って霊格の高い生物でしか確認できない状態のキリアに話しかけたのだ。それは確実に、常識という枠組みを逸脱している。

「どうしたの？ そのにんぎょうであそぼうよ」

一回目の言葉に反応しない事を怪しく思ったのか、アキラは不安そうな顔をして質問と勧誘を投げかける。

向けられた幼い表情にキリアは、慌ててアキラに返事をする。

「そ、そうじゃの。遊ぼうかの」

突然の言葉に、答えた言葉は了解を示すものだった。

人形だと思われている檻の中のサラとリンは、ほんの少し恨みのこもった視線をキリアに当てた。

視線の痛さを隠すようにして、キリアは二つの檻をアキラに渡す。  
すると。

「やったあ。それじゃあね、おうさまごっこしよ」

アキラの顔が笑顔になる。

その瞬間、世界に歪みが走ったかと思うと。

「……………」

公園のだったはずの極小の空間は、欧米圏の古城の王座の間の如ききらびやかな空間になり替わった。

「なんじゃと！」

先程の驚愕などなかったことのように、驚愕を更なる驚愕で上塗りがされていく。

「すごいでしょ？ おねえちゃん」

幼いアキラの口角が上がり、三日月の如き笑みを浮かべる。

その表情はまるで蛇の如きおぞましさを、キリアに持たせるのだった。

## Ep25：小さな城（後書き）

どうだったでしょうか。

感想、意見など、いただけたら幸いです。

では、また次回。ノシ

A E p 2 ; 〈渴望の女〉（前書き）

生きていました、私めは生きておりました。

細々とですが書き続ける事（数週間？ 憶えてないや、H A H A

H A

なんかもう記憶もあやふやだけれども、それでも完結はさせたい、  
とかなんかほざきながら生きてました。

多くの方々に忘れ去られているだろう今、そんなもって基本自堕  
落な作者のお送りするこの趣味をどうぞ。

## A E p 2 : 〈渴望の女〉

鮮血の如き色をしていた空には、漆黒の帳が下りた。

私は今、白い小袖に真つ赤な緋袴を着た、見ただけでそうと解るような巫女姿だ。

秋だと言つのに、肌になつとりと絡みつくような嫌な空気。

町の中に有る、人気の無い四つ辻の中央。

そこで私

真夕美は粘りつく汗をかいていた。

理由は一つ。

目前に転がる一つの車輪のような姿をした妖怪の所為だ。せい

妖怪の名は片輪車。かたわぐるま木で出来た一つだけの車輪にオッサンの顔、そしてその周囲に炎を纏った人に害なす妖怪だ。とあの神様を名乗る男の人は言っていた。

私はコレがどういうモノなのかは解らない。けれど、コレが良い奴で無い事は確かだ。コレは確実に暁の身体はどこかを喰らっていたのだから。

頭上を見上げれば、空に舞う暁アキラの能力の片鱗ちから。真黒な焰まっくろが、夜空の月影に熔けていく。

それは、先程苦勞して命を刈り取った妖怪が、あの時アキラの身体を喰らった証。

これが発見できたのは、ここ数週間の間、妖怪退治をしていた中でも初めてだ。

最初こそ訳も解らないまま、妖怪を逃がしてしまったりもしたが、今では少々手慣れてきてしまっている。

『なあ、真夕美。大丈夫か？』

『そうそう、気持ち悪くない？』

「大丈夫だよ。鬼火、狐火。私はもう大丈夫」

大丈夫。その言葉は仮面<sup>ベルソナ</sup>。本当にイタイ時、それを偽る仮面の魔法。彼はいつもそうやって、誰にも痛みを明かさなかった。

だから私も真似をする。疼き続けるこのキズを、偽り誤魔化し心の底に押し込めて、忘れない為に。

私は絶対忘れない。この痛みを感じる度に、私は彼を思い出して仮面の魔法を使うのだから。

見上げていた首を下に向け、視線を自らの手に下ろす。

深く仮面をかぶるのを、彼らに気取られないために。

「大丈夫だよ」

フワフワと浮かぶ二つの火の玉に、私は笑いかける。

どんなにこの手が汚れようとも、彼をこの世に引き戻せるならそれでいい。

今は、そう思える。

最初は流されるままに妖怪と闘わせられて、そしてギリギリの所で打ち勝つことが出来た。自分が生きている事が不思議な程ギリギリの状況で。

妖怪との戦いにおいて、勝つとは命を奪うと言う事と同義。

その感触は、とても気持ちの悪いものだった。

どんな異形のもので、命の価値は等しいと思う。



初めは、命を奪うこの行為が気持ち悪かった。  
何度手を洗っても、消える事の無い確かな感触が嫌だった。  
寝ても覚めても奪った命からの怨嗟の叫びが、小さな胸を痛めさせた。

けれど、それも今では感じない。

彼の笑顔を思い出した瞬間に、ぶつとりと消え去ったのだ。

今までの人生で、こんな感覚はなかった。  
暁に対して、ここまでの感情はなかった。

見つけてしまった感情は、耐える事も出来ない程に高まっていく。  
叫び出してしまうくらいほどに激しい想いを飲み下す。  
始まりは、いつだったか。

「それでもやっぱり、私は彼を想っていたのかな」

それは忌まわしく、麗しき過去の記憶。  
私の中の罪であり、最も大きな喜びの記憶。

犯した罪は、重く深く。  
与えられた幸せは、何よりも嬉しかった。

胸に手を当て、息を吐く。  
汗はもつ、乾ききった。胸を満たし周囲を吹き抜ける風が心地良い。

これで、大丈夫。

もう一度大きく息を吐いて、私の顔に喜色が満ちる。

見計らったかのように良いタイミングで、私に声をかける者がいた。

『真夕美さん。お疲れでしょうが、悪い知らせです。』

喜色に満ちた男の声、和ぎる神だ。

これは自らの内のチカラ      彼は《氣<sup>き</sup>》と呼んでいた

に乗せて、言葉を任意の相手に届ける術だと言っていた。最近、私も出来るようになった。

彼はいつも飄々としていて何を考えているのかが解らない。言っている事は真実なのだが、いつも何かを隠している様でどこか、怖い。

今回も悪い知らせと言いながら、確実に彼は笑っている。

怒りたくもあるが、それをしてもし悪い情報が私の元に届く事に変わりはない。怒るのは、全てが終わった後だ。

顔だけは笑って、そして心の中では彼を呪いながら、彼と同じように言の葉を飛ばす。

『そうですか。悪い知らせってなんですか？ 場合によっては、ねじ切りますよ。』

心の中の筈が、少々私怨が滲み出てしまった。失敗。  
作られていた拳に、ふよふよと浮いていた二つの火の玉がビクリと反応する。

『ね、ねじ切るって何をだ?』 『しし、知らないよ。けどそれは聞いちゃいけない気がするよ』

その通りだよ狐火、聞いちゃいけないよ。

鬼火は好奇心が旺盛なのかな。けどそれはいつか自分の首を絞める結果になると思う。

『はは、真夕美さん。私に敵意を向けるのは良いですけど、きちんと背後には気を付けた方がいいですよ?』

和ぎる神の一言を聞き終わる直前、背後から大きな妖気のようなモノが沸き上がった。

それと共に、乾いた筈の汗が再び私の身体から流れ出る。

生き物らしい気配と言うより、妖怪のそれに近い。

妖怪は滅した筈。それなら何?

それは私がそちらを振り返る直前に、人間のモノとは思えない、けれども確かにヒトのモノである言葉を発した。

「女、お前は能力者か?」

遙かな昔に聞き覚えがあるような、うつすらとした膜におおわれたような女性の声。

それは心の深淵に鋭利な牙で刻み込むようにして記録された、太古の発音なのではないだろうか。

振り向いた先に立つ一人の少女に、私はただただ畏怖を感じた。

一言で表すのならば、彼女の姿は『人形のように固められた膨大な恐怖』とでも言おうか。

この目に映るそれは、身体を硬直させるほどの圧力を持って私に話しかけた。

「能力者だろう？ アイツの力の残滓を感じるぞ」

威圧的な、視線に言葉。それに答えようにも息さえできそうになり。

「……アツ、」

聞こえてくるのは、つぶれた音の片鱗のみ。必死に口を開閉させる私を彼女はつまらなさそうに見ている。

「お前は小さいな、そこに居るだけで潰れかけになるとは」

心底つまらなそうな、王者の視線。

生きとし生ける者を見下すようなその視線は、次の瞬間には私ではなく、私の向こうに向きを変えていた。

その眼は明瞭な憎悪と殺意を持って、上方へと向けられている。軋み上げる齒。血走った眼が、その全てで持って感情を表現している。

「だがお前は違うよな？ クソ神様……！」

その想いを込めた言葉だけで、私の意識は飛びそうだ。

物理的なモノは何もないのに、全身にかかる重圧はかなりのモノ。  
プレッシャー  
一度落ち着いた筈の発汗が繰り返される。匂い、大丈夫かなあ。

『お久しぶりですね、吸血姫さん？』

怖気おそけのするような猫なで声で、背後の異物は嗤いだす。

間の私はどうすればいいのか、傍観者と言えるほど楽な位置には居ないし仲介役なんかはもっての外。

辛いこの状況に耐え続けるのは嫌だ。いつその事意識を手放すのが楽なのだろう。

と言うか、もう、無理。

手放した意識は、白濁色の海の中に浸かるように、ゆっくりゆっくりと溶けていく。

平穏と安寧を求めて。

## A E p 2 : 〈渴望の女〉（後書き）

前話で過去話になるみたいなこと書いていた気がします。その話はもうチヨイ後にしなければならなくなりそうな予感が…… or z

またこれから時間の許す間は執筆作業を行おうとは思っていますが、リアルで色々大変、なんて言ってられませんよね。

被災地の方々はもっと大変なんでしょうし……

しあわせって何なんでしょうか

なんてね、思春期だからでしょうか。色々可笑しい思考回路をしています、読んで下さった方ありがとうございます。

ではまたの機会に。ノシ

## E p 26 : 目覚めて

古びた洋館の、古びた門の前。

ミリィはそこで寝かされていた。安らかな寝息を立てて、毛布の上からロープで固く縛られて、俗に言う芋虫状態なミリィ。

なぜこんな状況に陥っているのかと言えば、原因は吸血鬼キリアのせいである、としか言いようがない。アキラを連れてB級の依頼を受けたは良いが、侵入して早々に落とし穴と言う典型的で古典的な罠に引っかけたかと思うと、アキラの転移<sup>ゲート</sup>魔術で飛ばされ、その後何の気遣いかキリアの使い魔らしき木のゴーレムが毛布とロープを巻いていったのだ。

だがどんなに毛布に包まろうと、外に投げ出されたままでは寒いらしくミリィはクシュンとくしゃみをした。

それと同時に、ミリィは苦しそうに声を上げる。

「うーん、寒い」

彼女は寝起きが悪いらしく、現状を把握できていないようだ。目もぼんやりとしている。

芋虫状態のままゴロゴロと道のど真ん中を転がっている。幸いここは幽霊屋敷の前の道であるため、一通りは少なく邪魔にはなっていない（それでも一日に数人は人が通るので、後日幽霊屋敷に悪い（？）噂が増えたのはまた違うお話）。

寝ぼけたまま、寒さに耐えかねたのかミリィは火属性の魔力を練り始めた。

使われる魔力は微量、それでも巻きに巻かれた今の状態で火属性の魔力を解放すれば、

「ファイア発火、……あつ熱うううい!!」

丸焼きと化すのも当然と言うモノである。

グルグル巻き状態で発火の魔術を使ったせいで、数秒をかけて全身に回った火は強くないものの、やはり熱い。

未だ芋虫状態のまま全身に火が付いてしまい、必死に鎮火しようと転げ回るミリィ。

とてもシュールな光景。

「熱い熱い熱い、あつうううい!!!」

近隣に民家がない事が唯一の救いだろうか。などと考える余裕もない様子のミリィ、やっと火が消えた時にはミリィの息は切れ切れだ。

その上再び屋敷の方から足音のようなモノが聞こえてきた。

音が近づいている事も解らないミリィ。彼女の寝起きの悪さは相当なようだ。もしかしたら低血圧とかそう言うのなのだろうか。

「え？ 何、何すんの？」

気が付けば、また担ぎ上げられて運ばれている。

ロープは一応焼け切れているが、抵抗するだけの力が出ない。魔力の方は十分に有るが、見た所担ぎ上げているのはゴーレム。それも用意周到な事に対魔力用の障壁なんかつけられている。これでは今のミリィには手も足も出ない。



だからこそ、担ぎ上げられる瞬間に声を上げて術師に伝えてもらおうと思ったのだが、それも意味はなさそうだ。ゴーレムは無駄の無い動きでミリイを運び続けている。

きつと自立稼働が出来るように一つの命令をこなすよう作ったのだろう。

それにしては強固に出来ているが、これも術者の力が強力である証明になる。幽霊屋敷の吸血鬼は人形遣いだいう噂もあるし、その裏付けが出来ただけか。

「はあゝ……、痛くはしないですよ？」

洋館の中はまさしく、城と言うに相応しい。

連れて行かれるとしたら城主の元か、それとも……。

「なんかアキラがやらかしたみたいだけど、大丈夫かなあ」

今はただ、流されるままに。

安全かは分からないが、この人形ゴーレムの向かう終点は分かりきっているのだから。

焼け跡、斬痕、そこかしこに大量にこびりついた血糊。

そして気だるい自身の身体に、アキラは違和感を覚えた。

「気持ちワリイ」

アキラは頭を押さえ、ぎしぎしと悲鳴をを上げる身体を無理やり起こす。

起きたばかりで明暗を繰り返す視界も、大分慣れてきただろうか。

見れば、隣に少女が寝てる。

「アハ、これ夢だ」

全力全開、目の前の状況から戦略的撤退を開始しよう。  
引きつる顔をそのままに、アキラは身体をうつぶせにして匍匐前  
進。

見覚えがあるような気もするが、きつと気のせいだ。

ぶつぶつと呟きながら扉を目指すアキラ。 転移魔術ゲートを使わないあ  
たり、大分混乱しているらしい。

ズリズリ、ズリズリと進むアキラ。その姿はなんとも滑稽だ。  
ズリズリ、ズリズリ。その音に紛れて近づく足音がするが、それ  
にアキラは気付かない。

ズリズリ、ズリズリ。 コツコツコツ。

もうすぐアキラが扉に着こうと言うその瞬間、素晴らしい勢いで  
扉がアキラの顔面に激突した。

「アキラー！ 無事！？」

顔がメコリとへこんだアキラに気付かず、そのまま頭、背中、そ  
踏み進んでいくミリイ。故意では無いらしい。  
奇跡的な触覚をしている。

「なんか動きづらい床……」

愚痴りつつ見えたそれからそつと降りるミリイ。眼はあらぬ方向  
を向いている。

へこんでいた顔も元に戻り、口を開くアキラ。

「ミリイ、俺やらかしたかも」

怒りとかそう言ったモノはない。

ミリイはひとまず安心したらしく、深く息をはく。

「なにしたのよ？」

ジト目で俺を見るミリイ。

それに対して俺は元いた場所を指で示す。まだ顔が痛い。

「俺、起きる前の記憶が曖昧なんすけど……」

どうしよう。

そんな思いを込めてミリイの方を見上げたのだ。

すると、彼女は石化していた。

あぐりと口を開けて、石になったかのように固まっていたのだ。

「やっぱ、俺がいけないのか？」

アキラの一言に、答える者は居なかった。

**E p 2 6 : 自覚めて (後書き)**

ギャグ？

なんだろうか、この感覚。

やりたい放題にやった、後悔はしていない

事にしよう。うん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9938m/>

---

緋色の騎士は異邦人

2011年3月24日23時27分発行